ISSN 0910-3295

研究紀要10

目　　次

甲府盆地周辺にみられる縄文時代中期の土壙墓と土器棺再葬墓
——井戸尻Ⅲ式～曽利Ⅰ式期の場合—— …… 長沢　宏昌　1

山梨県北巨摩郡大泉村甲ッ原遺跡出土琥珀の産地同定（1）
——赤外吸収スペクトル分析—— …… 五味　信吾　27
野代　幸和

金生遺跡出土の土器 2（晩期） …… 新津　　健　47

山梨県東八代郡中道町金沢出土の土師器甑 …… 高橋みゆき　73

1994

山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター

序

1993年４月に考古博物館長と埋蔵文化財センター所長に着任してから満１年が経過しました。両機関ともそれぞれが設置された目的や社会的な要請に基づく責任のある仕事が多く、運営には難問が山積しています。しかし博物館といい埋文センターといっても、考古学上の調査研究に深く関係する機関ですから、その研究成果を公表することは当然の責務であります。

着任して気付いたことは、近年景気浮揚のための開発の要請によって発掘件数が非常に多くなり、限られた人員で発掘と整理を進めていかなければならないということであります。その中で調査報告書の刊行や研究成果の発表を順調に行っていくことは並大抵のことではありません。この『研究紀要』もその中のひとつであります。機関の責任者としてこのような状況の打開に向かって努力を積み重ねて参る所存であります。

このような制約された条件の中で、『研究紀要』10号が刊行されましたことは、私どもにとっては大変意義のあることであります。おそらく刊行に関与した者は遺跡調査を進めながらの骨身をけずっての努力があったことと思われます。

長沢宏昌の縄文時代中期の埋葬例に関する論文は、甲府盆地という地域圏を限定しての墓制構造論であり、注目される問題提起と思われます。五味信吾・野代幸和の論文は、甲ッ原遺跡出土の琥珀の赤外吸収スペクトル分析を通じて、原料琥珀の産地同定を試みたものであります。原石の供給と流通とから経済的な交流圏や文化的領域が設定できる基礎的な研究になると考えられます。新津健は呪術・信仰にもかかわる縄文時代晩期の金生遺跡の遺物論を展開しています。縄文社会への理解にとって重要な論文になると推測されます。高橋みゆきの土師器の甕に関する報告は、有力な古墳が集中して分布する笛吹川流域の歴史的性格の解明に、良好な資料になるものと思われます。

考古博物館と埋文センターが設立されてから、今年は12年目にあたります。両機関で50数名の職員が現在おりますが、わずか20名前後で発足した頃と比較しますと、山梨県の埋蔵文化財の調査体制と保護行政は大きく前進しましたが、なお課題の多いことも事実です。何より重要なことは、調査研究の成果の公表であり研究水準の向上をはかることだと思います。このたび発刊になりましたこの『研究紀要』10号が、山梨県の考古学界のみならず、ひろく全国の考古学研究の発展にいささかなりとも貢献できるとすれば、望外の喜びとするところであります。そのためにも、各位からの些少にかかわらずご教示と忌憚のないご批判を賜りたくお願い申し上げます。

1994年３月

山梨県立考古博物館長
山梨県埋蔵文化財センター所長
大塚初重

山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター　研究紀要10 1994年　pp 1～26

甲府盆地周辺にみられる縄文時代中期の土壙墓と土器棺再葬墓
－井戸尻Ⅲ式～曽利Ⅰ式期の場合－

長　沢　宏　昌

1　はじめに
2　墓壙の認識
3　事例
4　井戸尻Ⅲ式期～曽利Ⅰ式期の埋葬形態
5　土器棺再葬の意味
6　おわりに

1　はじめに

これまで県内各地で縄文時代の多くの集落が発掘調査され、当然のことながら土壙も夥しい数にのぼる。その中で、墓と考えられる土壙も多く確認されているが、その根拠が提示できたものは少ない。もちろん、本県のような山間地の台地上の遺跡では人骨が残ることは予想しにくく、完形土器などの出土状況から墓と認識せざるを得ない面が強い。このような状況下で、近年、これまで資料の少なかった井戸尻Ⅲ式期～曽利Ⅰ式期にかけての土壙資料が増えてきたが、その時期にはまた、本県に特徴的な住居外に設置される大型土器を用いた“単独埋甕”が存在する[1)]。復元高70～80cmを測るこの時期でも最大級の土器を用いたこの単独埋甕については、これまで意外なほど触れられていない。本稿は、このような単独埋甕の初現期と思われる井戸尻Ⅲ式期～曽利Ⅰ式期に時期を限定して、墓と考えられる土壙と単独埋甕とのかかわりについて述べると共に、単独埋甕の意味についても触れてみたい。

2　墓壙の認識

岡村道雄は埋葬に関する諸儀礼の中で「一般的に墓・墓域には次のような考古学的な痕跡が残される可能性がある」として以下の12項目を挙げている[2)]。

①死体処理のうち、骨格に影響する痕跡。
②骨格の特徴、例えば年齢、性別、体格、疾病など。
③遺体の埋葬姿勢。
④遺体の装束や装着されたもの、遺体をくるんだり覆うもの、遺体を入れた棺など。
⑤死者の上や脇などにおかれた呪物、墓穴の中などに供えられた生前の持ち物、死者の身分・特殊技能などを表すもの、来世のためにもたせるものなど。
⑥墓穴の底あるいは上面などへ、土器などの容器に入れた食物などの供献。
⑦墓の構造、例えば配石、墓標、墓穴の形態、石室、砂利・粘土などを用いた墓穴の埋め方などの特徴。
⑧一連の葬式のある過程で、死者の持ち物などを壊した痕跡。

⑨動物や魔物を防ぐための呪具などが墓あるいはその付近に置かれていないか。

⑩墓葬礼に伴う祭祀の痕跡。例えば焚火跡、共食の痕跡、食物を撒いた痕跡など。

⑪葬式あるいは墓儀礼にかかわった道具、死者の持ち物を処理した痕跡はあるか。

⑫集落と墓域の位置関係、墓域の有無・形態・構造、墓群の形成過程。

以上が考古学的に痕跡を見ることのできるものだという。ただし、これは葬送儀礼を含んだ幅広い行為を表すものであり、特定の遺構を墓と認識する場合には、さらに属性を抽出する必要がある。確認された遺構を墓と認識するという立場で抽出すると以下のようになろう。

1．遺体そのものや骨格が出土。

2．遺構の構造から墓と考えられるもの（石棺や土器棺など）。

3．遺体の装束や装着されたものが出土。

4．墓穴の底あるいは上面などからの副葬・供献品の出土。

5．集落と墓域・墓群との位置関係からみた土壙群。

おおむね以上の5点に絞り込むことができると思われる。

土壙そのものについての検証を行おうと試みる場合、まず5については、群・まとまりとしての意味が非常に重要な要素となる。そのうえ、山梨県内だけに絞ってみても、いわゆる環状集落中心部分に存在するすべての土壙について一基一基検討し集成することはほとんど不可能である。一方、遺物を出土した土壙は本県内でもこれまで数千基に及ぶと思われる。装着品やそれを副葬したもの（3）、あるいは遺構そのものからの状況から考えられる（1・2）などについては遺構を「墓」と認識し易いが、副葬・供献品については、例えば土壙と称する掘り込みから磨石や石匙が出土したような事例は非常に多く、土壙出土という一面だけで墓と認識することは難しい。まさに岡村の指摘にあるようにどのような状況で出土しているかの検証が非常に重要となる。ところが、実際には土壙からの出土状況はページ数の関係からか報告書でもおろそかにされていることが多く、単に土壙出土と記載されているに過ぎないものがほとんどである。また、“供献品”も、かならずしも土壙内部から出土するとは限らず、掘り込みの縁や盛り土を想定すれば、掘り込みから離れた部分から出土したものであってもその掘り込みとの関係を考慮する必要がある場合もあろう。そのことから、（4）については、とくに検討が必要であり、遺構確認段階で極端に重複しあっているような事例については対象から外さなければならない場合も生ずる。

このように、通常我々が発掘する土壙を墓と認識することは容易ではなく、なかでも遺物、とくに土器を出土する多くの土壙を整理していくことが必要であろう。このことは容易に結論が出せるものではないが、土壙の機能として墓以外に挙げられることの多い貯蔵穴は、基本的に内部に土器などは必要でなく、また形態的にもこれまでの事例から袋状を呈しているなどの特徴がある。陥し穴は分布上の制約や形態的特徴がはっきりしており、これもまた内部からの土器の出土は必要ではない。このような状況からすれば土器を出土する土壙についてはひとまず墓と認識することが可能であろう。しかし、土器の出土とはいっても、混入などの危険を避けるため、完形あるいはそれにちかい状況の資料に限定する方が危険が少ない。

3　事　例

(a)　釈迦堂遺跡群（野呂原遺跡）[3]

中期の住居跡21軒、土壙125基、単独埋甕11基及び土器捨て場１カ所が調査されている。

井戸尻Ⅲ式期では５軒の住居跡と７基の土壙が確認されている。住居跡は南北に４軒と１軒とに分かれ、土壙も同様の分かれ方を示す。なお、住居跡を結ぶ地域を中央部とすれば、中央部には土壙は見られないことになる。

４号土壙（第１図３：以下第６図までは図版番号は省略し資料の通し番号のみとする）は円筒形を呈し、掘り込み底面には未風化の花崗岩が顔を出している。完形土器１個体と平石が底面に接するように出土している。32号・33号土壙（１）は接する土壙であるが、ともに土壙掘り込みの際露出した花崗岩を削り込んで土壙を構築している。32号からは深鉢の大破片が、33号からは口縁部欠損の深鉢と別個体の顔面把手、さらに自然礫３個が土器に挟まれるように出土している。74号土壙（４）は10号住居跡と切り合っており平面形を特定できないが、円形と推定される。掘り込みの深い土壙で底面に北関東系大木８ａ式土器が完形のまま横たわっていた。100号土壙（２）は底面での掘り込みが直径1.7ｍほどの円筒形の土壙で、大小の深鉢各１個体が浮いて出土している。

曽利Ⅰ式期では１軒の住居跡と５基の単独埋甕が確認されており、単独埋甕の１・３・４号と５・９号とは住居跡を中心に南北に分かれるような位置関係にある。１号単独埋甕（５）は口縁部及び底部を欠損した大型深鉢を逆位に埋設したもので、掘り方の下部には別の土壙が既に掘り込まれている。掘り方内にはカーボンが僅かに含まれる。３号単独埋甕（６）は１号に接するように掘り込まれる。本来大把手を有するキャリパー形深鉢であるが一対の大把手は欠損している。この深鉢を逆位に埋設したもので、底部に穿孔がみられる。掘り方内にはやはりカーボンが確認される。４号単独埋甕（７）も３号に極めて近い位置に埋設されている。やはり口縁部と底部の一部を欠損しているが残存底面には穿孔の痕跡があり、使用時には底部は完全であったと考えられる。土器の内部にカーボンが多くみられる。５号単独埋甕（８）も口縁部及び底部を欠損した大型深鉢を逆位に埋設したものである。これだけは前述の３基とは約20ｍ離れて埋設される。内部から底部付近の土器破片にかぶさるように15㎝程の自然礫が出土していることから、この自然礫は石蓋のように上面に置かれていたと推定される。９号単独埋甕（９）は５号からさらに10ｍ離れて埋設されるが、大型深鉢を10㎝程の幅で輪切りにした状態である。他の４基とは性格の異なるものであるかもしれないが、通常この時期の大型深鉢のこのような利用のされ方は考えにくく、埋甕の上部を後世の撹乱によって欠損したと考える方が妥当と思われる。

９号を除いた４基からは僅かながら骨片が出土しているが、人骨であるかどうかの同定は行っていない。

(b)　釈迦堂遺跡群（三口神平遺跡）[4]

釈迦堂遺跡群中最大の遺跡で住居跡 172軒、土壙約 800基、土器捨て場３カ所が調査された。報告書ではＳⅢ区とＳⅣ区のそれぞれに１からの遺構番号が付けられているため、以下に

ＳⅢ区を前段で、ＳⅣ区・ＮⅣ区を後段に述べることとする。なお、以下に述べるものは報告書の分類に基づき、ほぼ帰属時期が確実と思われるものだけを拾いあげたものである。特に土壙については該期の土器の破片を出土したものは数え切れないほどであり、完形品やそれにちかいものを出土した土壙だけに限定せざるを得ないため実情とは程遠く、あくまで埋葬の状況を示し得る資料という意味でのピックアップである。

・ＳⅢ区

井戸尻Ⅲ式期の住居跡は1軒で、3基の土壙と1基の単独埋甕がある。土壙の状況は、1号土壙（10）からは完形土器が横倒しになって潰れ、さらに土偶・打製石斧・磨石が出土しており、内部には部分的に焼土が認められる。また、47号土壙（11）からは下半部欠損の深鉢が逆位で埋設され焼石も確認されている。

曽利Ⅰ式期には7軒の住居跡と4基の土壙、2基の単独埋甕がある。土壙は、2号（12）では口縁部及び底部を欠損した大型深鉢が内部に横倒しとなり、34号では完形土器とともに3個の磨石が出土している。単独埋甕は1基が口縁及び底部を欠損した大型深鉢（19）で、もう1基はやはり大型の逆位底部穿孔（13）である。

・ＳⅣ区

井戸尻Ⅲ式期は1軒の住居跡と1基の土壙が確認されている。1号土壙縁からほぼ完形の土器1個体が潰れて出土しているが、実測図からは縁に立てられていたように思われる。

曽利Ⅰ 式期は10軒の住居跡と6基の土壙がある。土壙では、5号（14）からは少なくとも3個体の完形にちかい土器が折り重なるように出土している。土器は掘り込みの底面に近い部分から中段までの位置に横たわっている。52号は4単位の大把手を有する深鉢が内部に横たわるように潰れていた。87・88号（16）は2個体の土器が壙内に倒れ込むように出土している。128号（17）からは少なくとも6個体の土器が土壙縁からまとまって出土している。うち1個体は大把手を有する深鉢である。 396号（15）からは底部欠損の大型深鉢1個体が出土している。単独埋甕は2・3・5号の3基確認されている。2号（20）は逆位で口縁・底部欠損。3号(22)・5号（21）が逆位の底部穿孔で5号は口縁を欠損している。

・ＮⅣ区

曽利Ⅰ式期の単独埋甕1基（18）が確認されている。口縁及び底部を欠損した大型深鉢を逆位に埋設したものである。

(c) 釈迦堂遺跡群（塚越北Ａ・Ｂ遺跡）[5]

塚越北Ａ遺跡では藤内式期の集落が確認されているものの、井戸尻・曽利式期の住居跡はなく、唯一曽利Ⅰ式期の土壙1基が確認されただけである。内部からは上半部を欠損した大型深鉢が出土しており単独埋甕の可能性がある。

(d) 一の沢西遺跡[6]

遺跡を横断する形で、10ｍの幅で調査が行われ、住居跡11軒と113基の土壙が確認された。

井戸尻Ⅲ式期では6軒の住居跡と17基の土壙がある。本遺跡では、とくに土壙から出土する土器が多い。主な土壙の状況を以下に示す。37号（24）は長径100㎝の楕円形を呈する土壙

で底面に20cm大の平石が置かれ、その脇に中型の完形土器が立てられ、さらに平石上部で完形の大型土器が潰れていた。この大型土器も平石上に立てられていた可能性が強い。48号（26）は長径250cm、短径150cmの長楕円形の掘り込みであるが、土壙端に底面に接して30cm大の平石を敷き、その上に有孔鍔付土器を置いたものと思われる。56号（25）も径1m程の円形の土壙であるが、上面を20〜30cm大の自然礫を用いて石囲い風に囲んでいる。掘り込み内部からは4個体（大型3、小型1）の土器が出土しており、最大のものが横倒しとなり、別個体は胴下半が下になっており、埋設段階では立てられていたことも考えられるが、大型のうち2個体は胴部幅が60cmを超えるもので、そのままの状態では内部に立て得ないことから割って埋設した可能性が強い。65号（24左）も長径120cm程の楕円形の掘り込みと推定され底面に近い部分から土器上半部が出土し、さらにその上部を円柱状の石で囲んでいたと思われる。この状況は56号に類似する。なお、覆土には焼土・カーボンが混入している。

曽利Ⅰ式期では1軒の住居跡と3基の土壙、1基の単独埋甕が確認されている。土壙では77号（27）が特異な出土状況を示している。土壙の掘り込みは長径130cmの楕円形で、深さ50cmを測る。内部からの出土遺物はない。しかし、確認面より10cm浮いた状態で口縁部を欠損した大型深鉢が、半分が土壙内にかかる状態で潰れて出土している。「墓」である土壙には盛り土があったであろうと想像されるが、内部あるいは縁に立てられていたものが倒れたと考えられる。単独埋甕は古墳周溝内部での確認であり、掘り込み底面に逆位の口縁部が残されていただけである。周溝構築の際、ほとんどの部分は削り取られたと思われる。

なお、本遺跡では井戸尻式期直前の藤内式期の集落も確認されているが、井戸尻式期の埋葬とのかかわりから藤内式期の42号土壙（23）の出土状態にも触れておきたい。長径160cmの楕円形土壙で確認面からの深さ80cmを測る。中央部に掘り込み底面に接して40cm大の平石2枚が重ねられ、その脇に完形土器が壁に倒れかかるように潰れていた。また土器の横に20cm大の自然礫3個が確認されている。

(e) 安道寺遺跡[7]

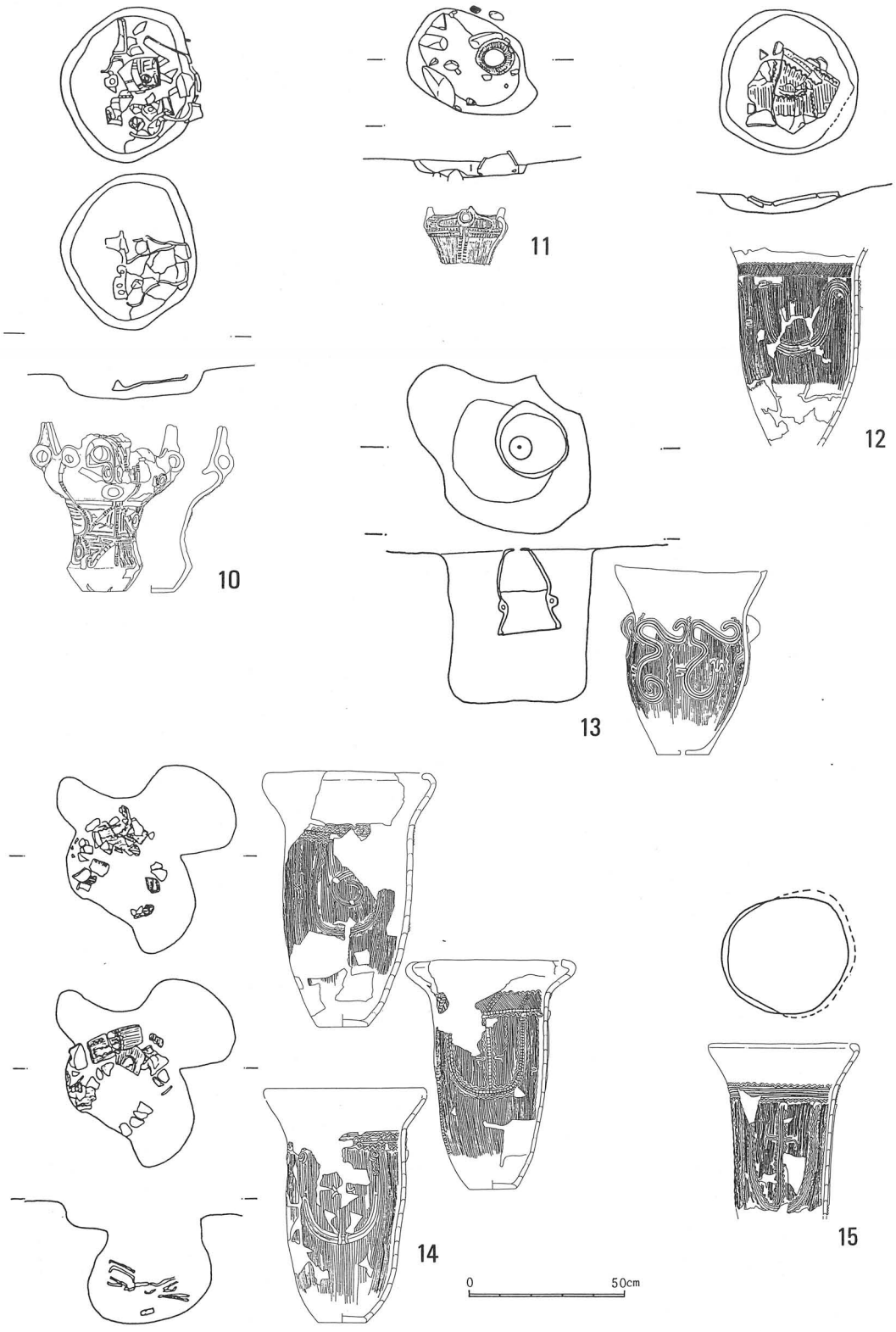
19軒の住居跡と2基の土壙が確認されている。井戸尻式期は住居跡は確認されているものの、土壙は確認されていない。

曽利Ⅰ式期では1軒の住居跡とその住居跡のすぐ脇に掘り込まれた1基の土壙が確認されている。土壙（28）は径65cmほどの円形を呈し、深さ70cmを測る。底面に完形深鉢が横たわり、この土器中や底面には焼土塊が認められる。完形土器を覆うように4単位の渦巻文大把手を有する大型深鉢を割って入れている。完形土器は大把手で囲まれた後、口縁部、胴部の順で埋設されたと考えられる。この土壙も土壙スペースは大把手付き深鉢はそのままでは埋設できない容積といえる。

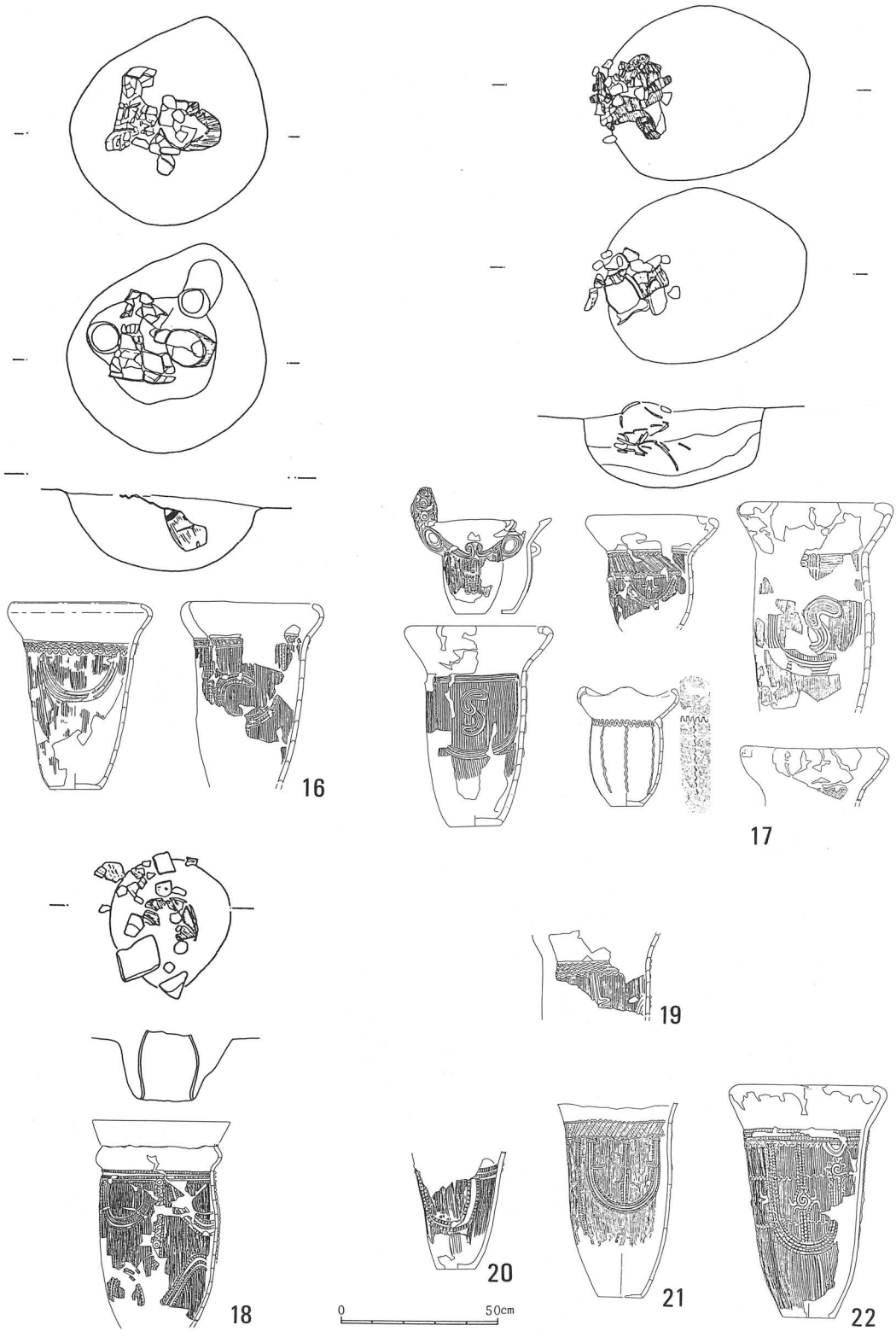
(f) 甲ッ原遺跡[8]

県道建設に伴う事前調査として、1989年から調査が行われている。この調査は現在も続けられており、遺構等の数値は今後さらに変化していくことになる。ここでは、ひとまず1991年までの3か年間の調査の概要が概報にまとめられているため、その状況を示す。

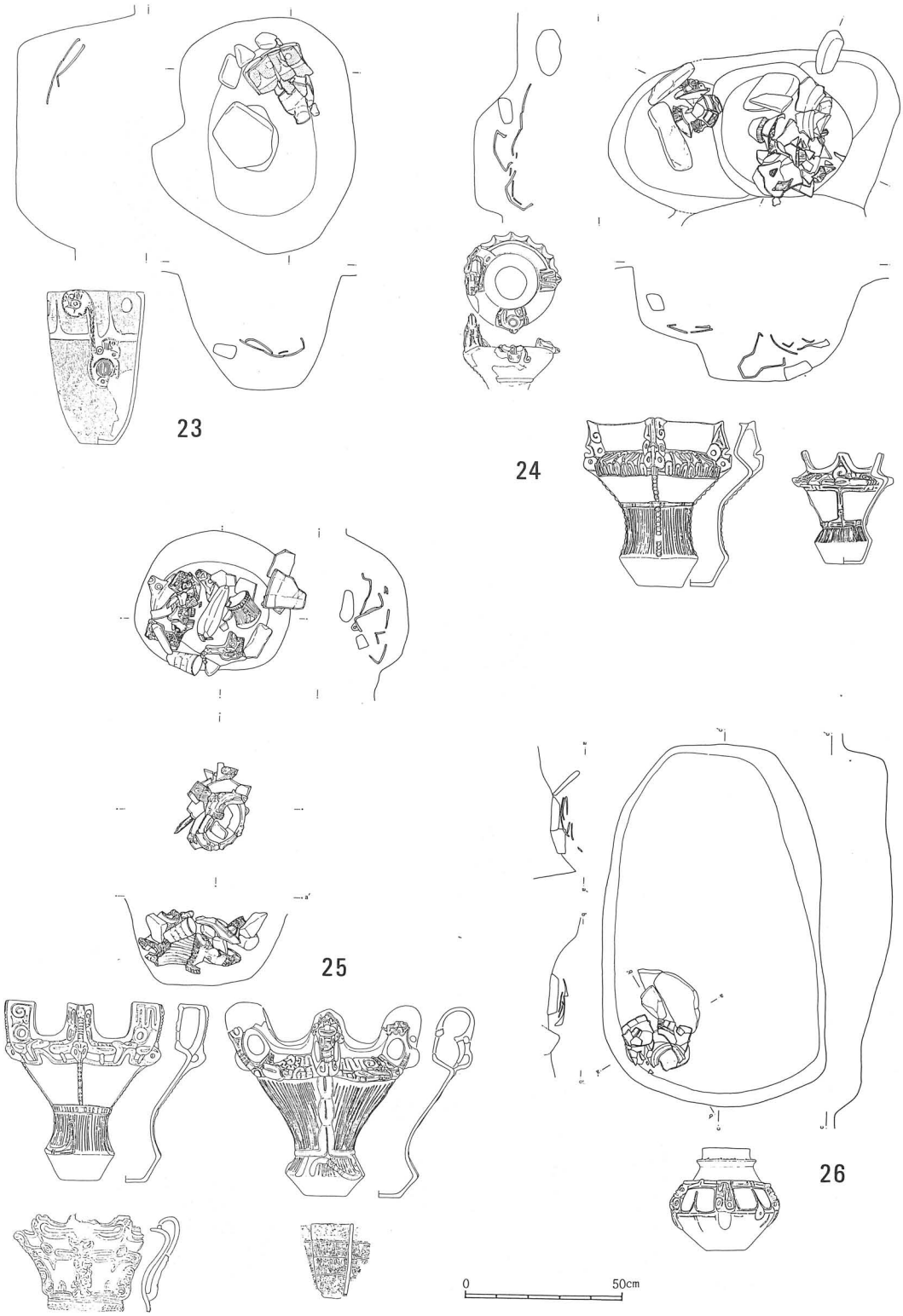
第1図　集成図1（野呂原遺跡）



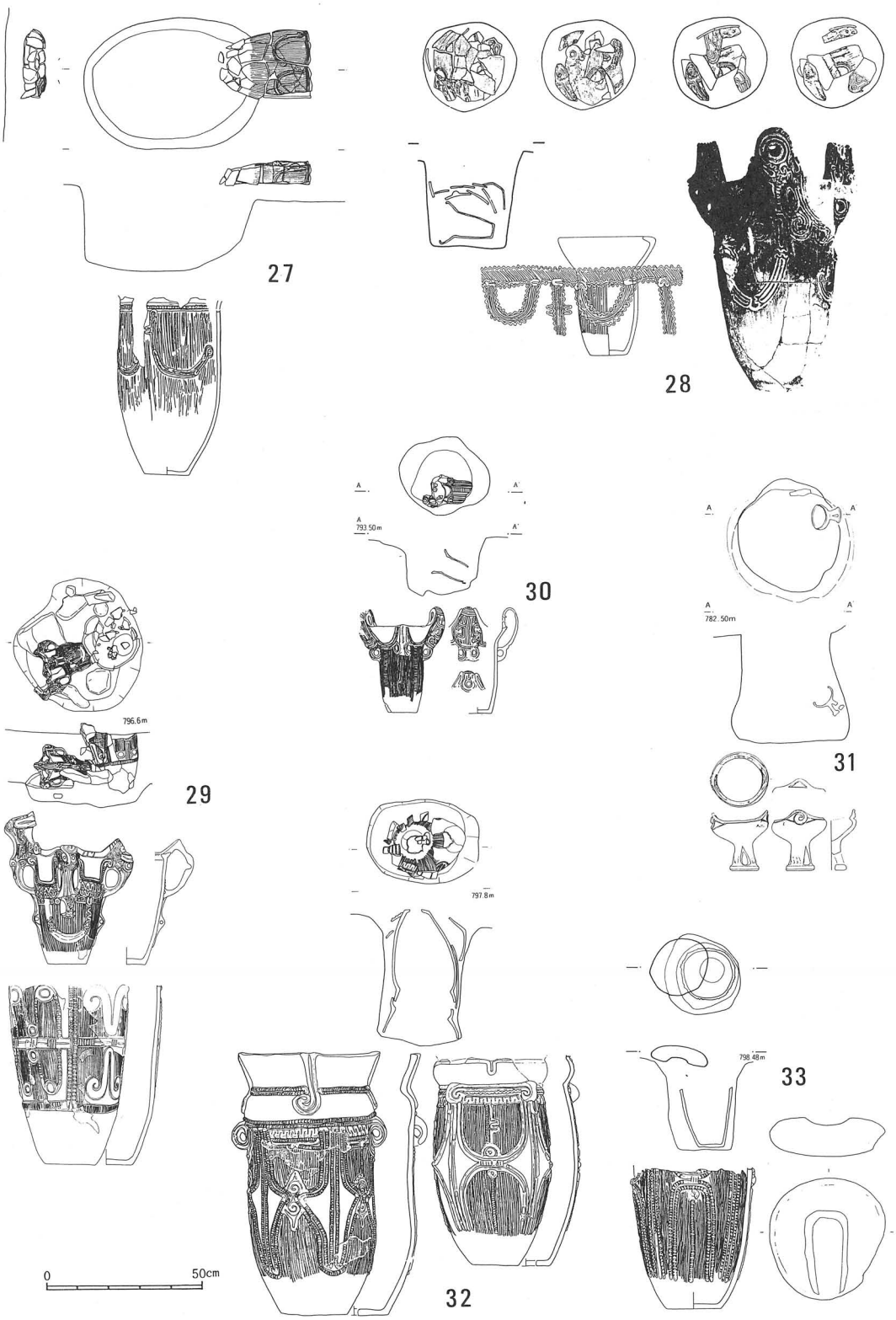
第2図　集成図2（三口神平遺跡）



第3図　集成図3（三口神平遺跡）



第4図　集成図4（一の沢西遺跡）



第5図　集成図5（一の沢遺跡、安道寺遺跡、甲ッ原遺跡）

第6図　集成図6（上の原遺跡、上の平遺跡、三光遺跡、宮の前遺跡）

3カ年合計で住居跡45軒、土壙 300基以上、掘立柱建物跡6棟などが調査された。このうち井戸尻Ⅲ式期（概報では井戸尻式期という表現になっており、Ⅰ式とⅢ式の両者が含まれる可能性があるが、概報の出土遺物を見る限りⅢ式がほとんどである）では住居跡8軒、曽利Ⅰ式期では7軒が確認されており、いずれも集落としてのまとまりが認められる。しかし、300基を超える土壙については、個々の分析まで手がついておらず、概報にもごく一部が示されているに過ぎず、単独埋甕も同様である。なお、本遺跡では住居跡内や土壙内から井戸尻Ⅲ式と曽利Ⅰ式の土器が伴出している例が数例みられ、従来の編年を再考すべき状況である。

7号土壙（29）は径100cm程の円形の土壙で、確認面からの深さ50cmを測る。内部からは井戸尻Ⅲ式土器と曽利Ⅰ式土器各1個体が出土しているが、井戸尻式は立ったままで、曽利式は横倒しとなっており、あたかも井戸尻式が曽利式を押し倒したかのような状況であった。この状況から両者が土壙内に同時に埋設されたと判断できると同時に、両者は埋設時には立てられていたと考えられる。156号土壙（30）は長径66cm、短径55cm、深さ40cm程の楕円形土壙で底部を欠損した大渦巻把手付深鉢が中心方向に倒れ込むように出土している。胴部下半は土壙壁に極めて近く、壁に密着するように立てられていたものと思われる。

1号単独埋甕（32）は特異な埋設方法を示す。2個体の大型深鉢が逆位で入れ子状に出土している。いずれも底部穿孔である。やや小振りな右は口縁部を欠損しており、より大型の左は完形である。出土状況は左の口縁部が掘り方底部付近より出土し、その上部に右が乗るような形で出土し、さらにそれを覆うように左の胴部～底部が割れて出土している。報告者はその状況から、まず左が埋設され、それを掘り出し（その際口縁部が底部に残ったと考える）、右を埋設し、左の破片を元の状況にちかいものとするため右にかぶせる行為を行ったと考えている。左の口縁部が底部ちかくに残されていることからその可能性は大きいと思われるが、その意味は不明である。なお、掘り方は土器の幅ぎりぎりにちかい。2号単独埋甕（33）は上半部を欠損した大型深鉢を正位に埋設したもので、掘り方上部は大型の石皿（重量25kg）で蓋をしている。

1992年の調査でも井戸尻Ⅲ～曽利Ⅰ式期の遺構は多く確認されているが、特に井戸尻Ⅲ式完形土器を出土した土壙について触れておきたい。 248号土壙（31）は壙口径70cmほどの円形を呈する袋状土壙で、底径・深さとも80cmを測る。壙内からは底面より16cm浮いて完形の特殊脚付鉢が出土した。この土器は赤及び黒で彩色されており、このような器形とあわせて、極めて希な出土例である。底面よりやや浮いて完形で出土していることからも埋葬とのかかわりを示唆するものとして注目される。なお、他に打製石斧1点が出土している。

（g） 上野原遺跡[9]

本遺跡は1971年に道路建設に伴い、また、1984・85年には水管埋設に伴う事前調査として発掘が行われている。1971年の調査については正式な報告書が刊行されておらず、概要が中道町史に示されているのみで詳細は提示できないが、町史によれば住居跡22軒と無数の土壙、多数の埋甕が発見されている。土壙や単独埋甕についての個々の記載はないものの「明らかに埋棺（甕棺墓）と思われる種類のものがある。この中には甕の底に小穴を穿って、口縁を下に垂直に立てたものと、もう一つは大甕を横たえているものとあった。前者のものには、深鉢型の高

さ30cm前後の比較的小型の土器を使用しているものもあり、50cm以上の甕型土器の使用例と二通り見られる。しかし、後者の横たえた大甕の方は超大型ばかりで、しかも器面を豪華に飾りたてたものが認められる。」とあり、写真では井戸尻期の完形土器が土壙内で潰れている状況が窺われる。

1984・85年の調査では16軒の住居跡と95基の土壙が確認されているが、井戸尻Ⅲ式期では住居跡7軒、土壙10基、単独埋甕1基である。36号土壙（34）は長径130cmの不整円形を呈し、2個体の大型深鉢が破片となって掘り込みの中層部分から出土し、39号（35）は直径70cmの円形の掘り込みをもち、底面から完形土器が横倒しになって出土した。3号単独埋甕（37）は大型深鉢を逆位に埋設したもので、胴部下半を欠損している。

曽利Ⅰ式期は1軒の住居跡と各1基の土壙、単独埋甕がある。40号土壙（36）は長径 100cmの楕円形を呈し、底面より底部欠損の深鉢が横倒しになって出土している。5号単独埋甕（38）は径70cmの円形の掘り方をもち、大渦巻把手土器を逆位に埋設したもので、土器に倒れかかるように60cm大の平石が出土している。

（h） 上の平遺跡[10]

曽根丘陵公園の建設に伴う事前事業として調査され、 100基ちかくの方形周溝墓群が確認されたことで知られるが、縄文時代の遺構も多く確認されている。また、道路改良によっても発掘調査が行われており、やはり縄文時代の遺構が確認されている。曽根丘陵公園建設に伴う調査では、方形周溝墓群の保存のため、その存在が確認されていた縄文時代や先土器時代の遺構調査は行われず、道路建設時には縄文時代では住居跡23軒と200基あまりの土壙が調査されている。ただし、遺物はごく一部が報告されているのみで、特に土壙については殆ど報告されていないため、時期毎の遺構の状況については触れることができない。報告されたものについてみると、井戸尻Ⅲ式期では住居跡3ないし4軒と土壙2基、曽利Ⅰ式期は遺構は確認されていないようである。また、単独埋甕も存在しない。

井戸尻Ⅲ式期の土壙は2基の確認であるが、このうち11号（39）は長径90cmの楕円形を呈し、大型の完形土器1個体が横倒しになって掘り込み中層部に潰れていた。

（i） 三光遺跡[11]

御坂山塊の麓、浅川扇状地の扇頂部ちかくに所在する遺跡で、耕作中に多量の縄文土器が出土したことから、一部が緊急調査された。10cmを超える大型の硬玉製大珠が出土したことでよく知られるが、曽利Ⅰ式期の単独埋甕1基（40）が確認されている。遺跡発見時に遺構はほとんど掘りあげられていたが、逆位であったとのことで、底部に穿孔がある。

（j） 宮の前遺跡[12]

富士川左岸の丘陵上に立地する中期の集落跡で、1982年にヘリポート建設に伴う事前調査が行われ、住居跡13軒、土壙5基、単独埋甕2基が確認された。この調査についてはまだ正報告書が刊行されておらず、住居跡の帰属時期については微妙な部分もあるが、井戸尻Ⅲ～曽利Ⅰ式期の住居跡は6軒である。土壙、単独埋甕ともに井戸尻Ⅲ・曽利Ⅰ式期とも各1基づつである。

井戸尻Ⅲ式期は4号土壙と2号単独埋甕がある。4号土壙は、径1ｍの円形の掘り込みで、土器破片と石器石材が中層部より出土している。2号単独埋甕（41右）は口縁部および底部を欠損した大型深鉢を逆位に埋設したものである。

曽利Ⅰ式期は1号土壙と1号単独埋甕がある。1号土壙は径1ｍの円形の掘り込みで、底面より完形の小型深鉢と石皿・凹石・磨石・磨製石斧各1点が出土している。1号単独埋甕（41左）は底部付近に穿孔を有するキャリパー形の大型深鉢でやはり逆位に埋設されていた。なお、単独埋甕2基は極めて近接して埋設されている。

4　井戸尻Ⅲ式期～曽利Ⅰ式期の埋葬形態

以上のように、これまで県内で井戸尻Ⅲ式期と曽利Ⅰ式期の遺構が確認された遺跡について、特に土壙と単独埋甕の状況を述べてきた。土壙は確実に時期決定のできる資料のみを提示しているため集落として見た場合極めて数の少ないものとなってしまっているが、岡村の指摘にある「検証」をクリアーできるもののみを選び出したものであるためやむを得ないものと考える。したがって、ここで述べている土壙は土壙墓と呼び代えることが可能であろう。また、単独埋甕は内部から人骨が確実に検出された例はないものの、他地域で同様の規模の埋設土器内から人骨の出土している例が見られることからも土器棺と考えて良いであろう。とすると、この時期にはどうやら土壙墓と土器棺の2種類が存在することになる。そして土器棺は井戸尻Ⅲ式期終末に出現してくるらしい。ここでは、前述した事例を整理し、埋葬形態について述べてみたい。

Ⅰ　土壙墓の状況

これまで概観してきた土壙墓は、そこから出土する土器の状況から何種類かに分類[13]が可能である。もちろん、本論に先立ちことわったように、本来的には装着品や土器以外の副葬あるいは供献品を伴う土壙墓があるはずであるが、それについてはここでは触れない。

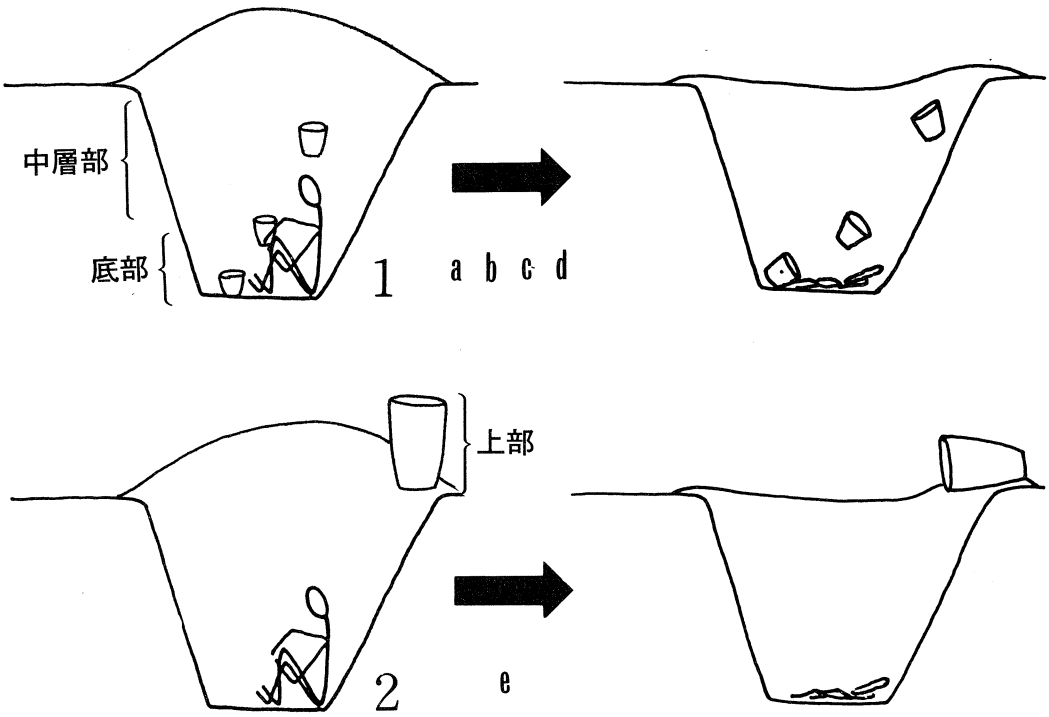
さて、これらの土壙墓を埋葬当時に復元するとどのような状況となるであろうか。これまで概観した土壙墓は土器の大小および出土位置によって、いくつかの類型に分類が可能となる。すなわち

a　小型土器が土壙底部から出土するもの（1・3・4・11・24・28・35・36）
b　小型土器が中層位から出土するもの（31）
c　大型土器が土壙底部から出土するもの（2・14・16・17・25・39）
d　大型土器が中層位から出土するもの（10・23・24・26・28・29）
e　大型土器が上面から出土するもの（12・27）

これらは、さらに土器が単体か複数かによっても分類されようが、ここでは埋葬時のイメージ復元を目的とするので、これ以上の分類は行わない。第7図に示したイメージ図がそれである。上記のａ～ｄでは、土壙墓内部に遺体とともに埋葬された土器は、それが副葬品であれ供献品であれ、埋葬した段階で二度と人目に触れることはない。その意味では土器の大小の差はあっても、ａ～ｄはひとくくりにできる性格のものである。

第７図１は内部の土器と遺体の状況を示したもので、土器の副葬・供献は底面への設置と中層位への設置が考えられる。中層位への設置では、例えば頭部への被せあるいは体部への抱き抱えなど（それが総てでないことはもちろんである）が想定できよう。しかし、これらは原位置を保ち続けることはなく、遺体の腐朽とともに土器も移動することになる。図では完形土器にしてあるが、完形土器も移動や土圧により潰れることになる。当然、当初から口縁部あるいは底部を打ち欠いた個体や逆位設置の場合もある。ここで問題となるのが、特に大型土器を複数伴うもので17は６個体、25は４個体、14は３個体、16は２個体となっている。とくに25の場合は土壙の掘り方自体が小さく、４個体の土器によって内部空間は一杯になることが予想され、死後まもない状態の遺体を埋葬することはとても想定できない。このような、複数の土器によって内部空間が埋め尽くされるような状況を示すものについては、埋葬と関連付けるのであれば二次葬などを想定する必要があるであろうし、あるいは埋葬以外の用途を想定すべきであるかもしれない。また、同じ複数出土例でも24や28は中・小型の土器を底面に立て、上部に大型土器で蓋をしたかのような状況を示している。第７図１の中層位と底面の合同タイプとすることができ、前述の25などに比べると空間上の問題は少なく一次葬の想定は可能であろう。

時期的には今回提示した資料ではａ・ｃ・ｄが井戸尻Ⅲ式期、曽利Ⅰ式期ともに認められ、



第７図　埋葬イメージ図

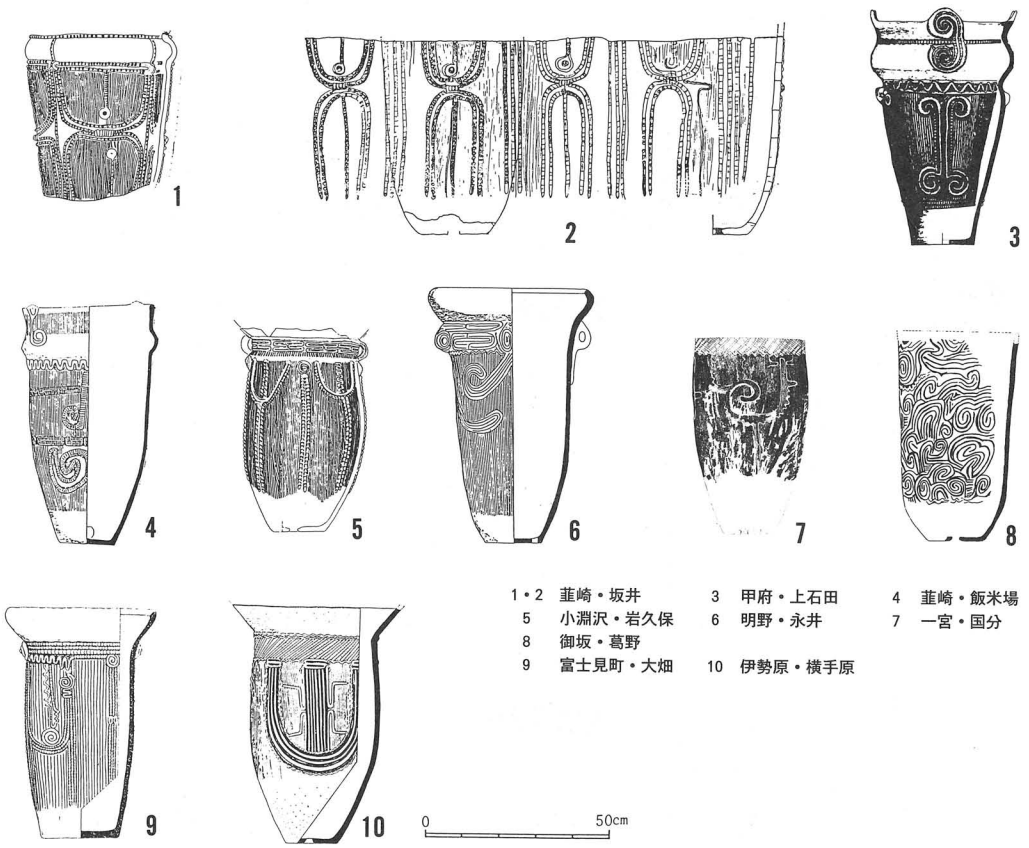
この時期に普遍的な副葬・供献方法であったと考えられる。また、bは井戸尻Ⅲ式期のみとなっているが、副葬・供献部位が底面と中層位とで意味合いが全く違うとは考えられず、曽利Ⅰ式期に底面への埋納が依然としてみられることから、単に提示資料が少ないことが理由であろう。また、参考として載せた23は藤内式期の例であるが、さらにそれ以前からもこのような設置状況は認められる。

これに対し、eは設置の状況がa～dと全く違い、少なくとも一定期間土器は人目にさらされることになる。特に顕著な状況である27を埋葬時に復元したものが第7図2のイメージである。そして、墓に立てられた土器はすでにその段階で口縁部を打ち欠かれていた。

Ⅱ　土壙墓と単独埋甕のかかわり

―1　第5図27の評価

eタイプとして示した27に設置された土器は大型でしかも口縁部を打ち欠かれている。12も口縁部および底部を打ち欠かれている。ともに形態は胴部が円筒形で、これはこの時期にこの地方で一般化する単独埋甕と同一の土器である。筆者自身もこれまでに山梨県内で何例かの井戸尻Ⅲ式期～曽利Ⅰ式期の単独埋甕を調査してきているが、いずれも大型で同じ形態の土器である。第1図～第6図では5～9・13・18～22・32・33・37・38・40・41などが単独埋甕と報

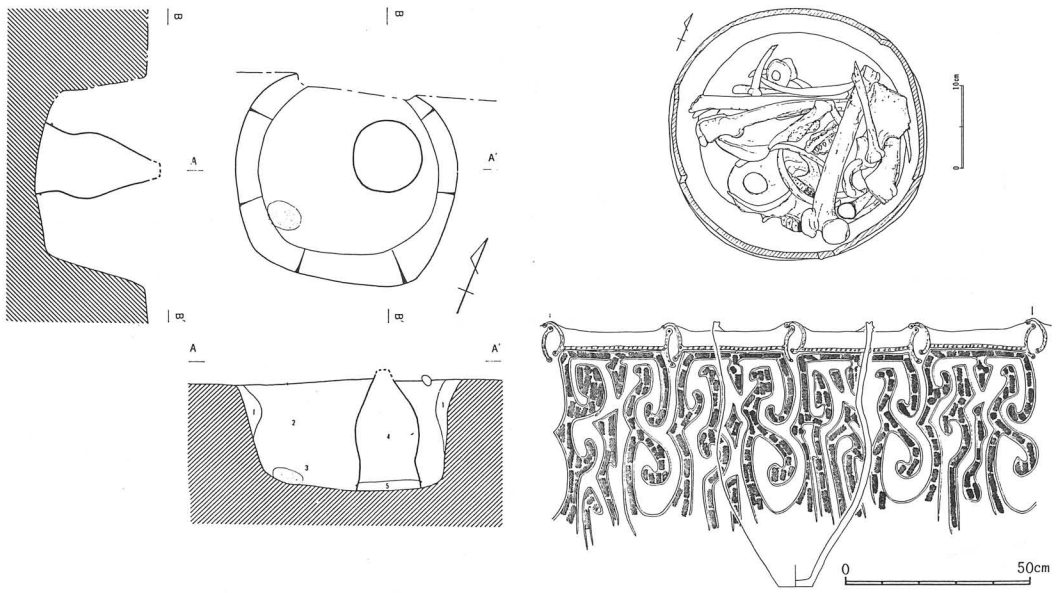


第8図　各地出土の単独埋甕

告されたものである。このほかにも単独埋甕と認識できる資料は多く、その一部を第8図に示した。

井戸尻Ⅲ式期～曽利Ⅰ式期にかけての土器の変遷は近年より細分化されつつあるものの、前述したように井戸尻Ⅲ式期と曽利Ⅰ式期が伴出あるいは両者の折衷と考えられるような個体も確認され始めており微妙なところであるが、大型土器をもちいた単独埋甕は確実に井戸尻Ⅲ式期末段階には存在するようである。37がこれまで確認された中で最も古く位置付けられ、ラッパ状に開く口縁部で頸部に段を有し、胴部が円みを帯びる形態である。これに続くものは井戸尻Ⅲ式期最終末の円筒形深鉢で、総てが同じ形態となる。18・32・33・41右・42・43がこれに当たる。形態は頸部から上は37と同じであり、胴部が丸みを帯びず筒形になる傾向がある。その意味からも37と18などではそれほどの時期差はないものと考えられよう。曽利Ⅰ式期では円筒形の胴部のものが主流になるが、6・13・40・41左など胴部に丸みを帯びるものも認められる。なお、口縁部が残されるものが少ないため定かではないが、特に単独埋甕に用いられるものに限ってみれば、それまでみられた頸部の段がなくなる傾向がある。この形態の深鉢を井戸尻Ⅲ式期と曽利Ⅰ式期とに区切る場合の一つの指標となるかも知れない。また、曽利Ⅰ式期とはいっても、40と13とではかなりの時期差があり、Ⅰ式期全般さらにはⅡ式以降に続くことになる。

さて、5・7・8・19・21・22などが曽利Ⅰ式期の単独埋甕の代表的な資料である。これらと土壙墓のｅタイプとした27・12は同じ形態の土器を用いている。第7図2に示したようにｅタイプは土壙の掘り方内部あるいは縁の盛り土上に立てたものと解釈できる。そしてここに用いられた土器が、一方で単独埋甕という別の遺構として確認されるものである。ここから共通点を見いだすことは容易である。即ち、27や12は“単独埋甕の一段階前の姿”を示していると考えることが可能であろう。いずれ一定期間後に埋葬した遺体を掘り起こして再葬する必要がある場合、墓地の位置を示す墓標や再葬に際しての土器棺は必需品である。そこで、空の土器棺を墓標を兼ねて墓地に立てていたと考えられるのである。図示した資料は土壙の掘り込みに一部かかるような倒れ方をしているが、土壙墓に盛り土を考えた場合[14]、壙口からある程度離れた部分に同様な土器があるものについても、同じことが言える。このように27の事例はこの時期の大型単独埋甕と結び付くものであり、さらにそれは再葬のための土器棺と考えられる。大型単独埋甕の土器棺としての使用例では、第9図に示した埼玉県坂東山Ａ地点の甕棺墓（後期初頭）がよく知られている[15]。焼骨ではない塾年期の男性1個体分が逆位の土器に収められたもので、短骨や下顎骨が見いだされなかったこともあって再葬と考えられている。この事例のように内部に人骨が良好な状態で残ることはごく希であり、通常焼骨以外は腐食消失することになるため、骨片は出土しなくても土器が類似した出土状況を示すものについて土器棺墓とすることには抵抗が少ないものと考えられる。千葉県寒風貝塚のように小児骨を出土した例[16]もあり、総てを再葬のための土器棺とすることには危険もあろうが、前述したような土壙墓とのかかわりからすれば成人を対象とした再葬のための土器棺とすることは可能であろう。なお、坂東山遺跡例で用いられた土器は、口径43㎝、胴部最大径41㎝、器高72㎝を測る。これに対し



第９図　坂東山遺跡　甕棺墓

て本県で見られる単独埋甕はどの程度の大きさであろうか。完形品が少ないが、第５図32左は口径46㎝、器高84㎝、第６図41左は口径47㎝、器高65㎝、第１図８は口縁部及び底部を欠損しているが胴部最大径39㎝、現存高63㎝を測る。いずれもこの時期でも最大級の土器を用いている。

―２　これまでの単独埋甕研究

以上のように、この時期にこの地域でみられる大型単独埋甕には土器棺再葬に用いられたものがあることを示した。

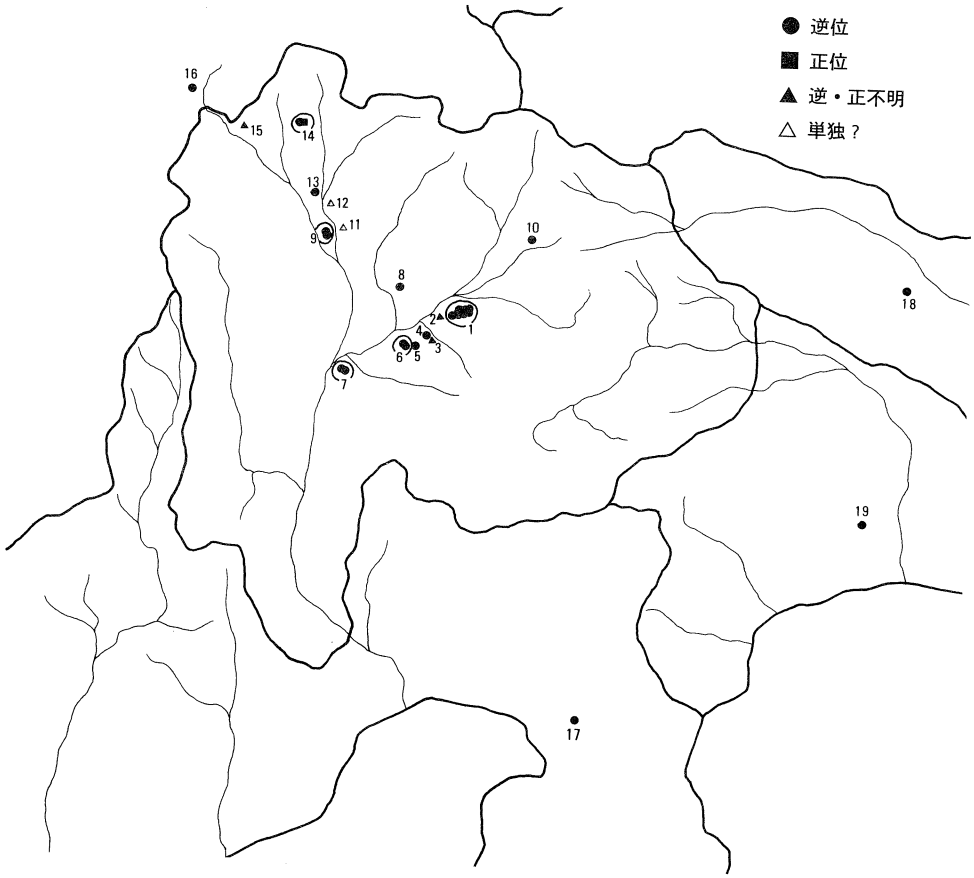
ところで、これまで単独埋甕はどのような評価をされてきたのであろうか。埋甕は、通常住居跡内の出入り口部分に埋設されたものを指し（それだからこそ住居跡外のものを示す意味で“単独埋甕”と呼称してきたのであるが）、埋甕研究は住居跡内埋甕が主であった。その用途をめぐって渡辺誠[17]、桐原健[18]、木下忠[19]、水野正好[20]等の活発な研究もあって、幼児埋葬、胎盤収納、住居建築儀礼などの諸説が提示されてきている。これに対し、単独埋甕は関東の貝塚地帯からの小児骨出土例がよく知られていることもあって幼児甕棺という考え方が定着している。内容物の検出という直接的な方法論が手っ取り早いことは言うまでもないが、あまりにその方向に目が向けられているため、それ以上の検討は行われていないのが現状であろう。

単独埋甕に注目し、事例を集成したものでは桜井清彦・原信之[21]の報告がある。桜井等は神奈川県伊勢原町横手原遺跡の単独埋甕の特徴として底部穿孔の大型深鉢、ピット中への逆位埋置、住居跡等に伴う施設ではないという３項目を挙げた。そして、類似資料を含め14遺跡例を提示し、小児埋葬の事例から従前の改葬甕棺墓という考え方に批判を加えた。しかし、後期の確実な事例から改葬甕棺墓の可能性は認めている。分布については、中部関東の中でも、八ヶ岳山麓を中心とする曽利Ⅰ式土器とその流れを汲むものに初現期とそれに続くものがみられることに注目している。また、中期末・後期初頭の屋外埋甕を集成した山本暉久[22]は、屋外埋甕は大きく埋葬容器と祭祀にかかわる施設という面があるとし、埋葬の場合、甕棺葬と甕被葬とがあり、埋葬対象も幼児・成人を含むとした。確認状況としても土壙内から出土するものと、

埋甕の大きさに併せて穿ったピット内に埋置するものとがあるとしている。また、屋外埋甕の特徴として底部穿孔や大型のものが多いことから併存する屋内埋甕とでは埋納対象が違うと述べ、屋内埋甕が幼児埋葬施設という前提に立てば、中期後半期の幼児埋葬は屋内埋甕が主体であり、屋外埋甕は屋内埋甕と埋葬年令対象が違うとしている。山本は時期的にも最も多くの資料のみられる該期の資料を集成し復元高40～50cm程度の中型土器を埋設した屋外埋甕を主体に扱っており、本稿で扱うものより対象がはるかに幅広いが、本稿の意味するところの大型のものについては底部穿孔の有無にかかわらず埋葬施設である可能性が強いとしている。さらに底部穿孔埋甕に注目した小野正文はこの種の埋甕が住居内・外に認められるとした[23]うえで、穿孔の有無や正位逆位による分類が埋甕においてはあまり意味をなさず、埋葬施設の可能性が考えられるとした。また、埋甕の地域性にも触れ、山梨県と長野県の底部穿孔埋甕を比較すると、総じて山梨県には大型のものが多く、逆位底部穿孔という形態は長野県下ではほとんど知られていないようだと述べている。

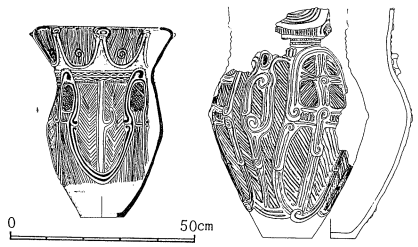
このように曽利Ⅰ式期前後の大型単独埋甕については、埋葬施設という点では一致するものの、本場とも言うべき甲府盆地～八ヶ岳山麓にかけての資料が整理されておらず、しかも貝塚地帯と違って内容物の検出が期待できない状況であるため、単独埋甕という形で現在認識される埋葬が実際どのようなものであるのかという点に迫る事なく現在に至っている。

第10図には井戸尻Ⅲ式期～曽利Ⅰ式期にかけての大型単独埋甕の分布を示した。筆者の管見に触れた範囲では、これまでのところ八ヶ岳山麓というより本県の甲府盆地周辺を中心としているようである。現在までのところ盆地縁辺部から八ヶ岳の山裾にかけての分布が濃いが、八ヶ岳側では県境を越えると確実な例は極端に少なくなる。長野県側では富士見町、原村、茅野市、川上村などの遺跡が同じ八ヶ岳山麓に立地することになる。群馬県赤城山麓では遺跡は一定の標高で山裾を一周するような分布状況を示しており、八ヶ岳においても同様な分布が想定できることからすれば、このような単独埋甕が山梨県側にのみ存在し、長野県側に存在しないなどとは想像できない。しかし、これまでのところこのような資料は富士見町大畑遺跡[24]で確認される程度で、当地方においてこの時期の単独埋甕が一般的でないことも確かである[25]。今後の可能性はともかくとしても、一つには伊那谷に分布の中心をもつ唐草文系土器の分布が長野県側には強く、山梨県側には極めて弱いことが挙げられるかもしれない。曽利式土器の分布は甲府盆地～八ヶ岳山麓にかけてが中心地域であることははっきりしている。長野県では富士見町・原村・茅野市などは、曽利式土器圏と唐草文土器圏の接点に位置することになる。この唐草文土器圏においても大型土器を単独埋甕として使用する状況は認められるが、曽利Ⅱ式併行期がピークとなるようである。第11図に示した上伊那郡飯島町尾越遺跡[26]や岡谷市梨久保遺跡[27]などにみられる単独埋甕が唐草文系単独埋甕としては最も古いものと考えられ、曽利Ⅰ式期併行期やまして井戸尻Ⅲ式期には遡り得ない。一方、山梨県東部地域に目を向けてみると、この地域では曽利Ⅰ式期の遺跡自体少ないこともあって、現在まで確実に曽利Ⅰ式期の単独埋甕と考えられるものは確認されていない。さらに東～南に拡大すると、神奈川県伊勢原市横手原遺跡[28]で60cmを越える口縁部欠損の曽利Ⅰ式の単独埋甕が1点、また静岡県三島市千枚原遺



1．釈迦堂　2．一宮町国分地内　3．葛野　4．三光　5．一の沢西　6．上の原　7．宮の前
8．上石田　9．坂井　10．殿原　11．飯米場　12．明野村永井地内　13．須玉町内　14．甲ッ原
15．岩久保　16．大畑　17．千枚原　18．中管生　19．横手原

第10図　大型単独埋甕分布図



第11図　唐草文系単独埋甕（左 尾越、右 梨久保）

跡[29]でも60cmを越える大型深鉢が出土している。さらに東京都秋多町中菅生遺跡でも曽利Ⅰ式ないしⅡ式の逆位に埋置された大型深鉢が工事中に発見されているとのことである[30]。しかし、曽利Ⅰ式期で確認できるのもせいぜいこの程度であり、この状況からも井戸尻Ⅲ式期～曽利Ⅰ式期にかけての大型単独埋甕はまさに曽利式土器の中心地域である甲府盆地周辺で始まったとすることができよう。

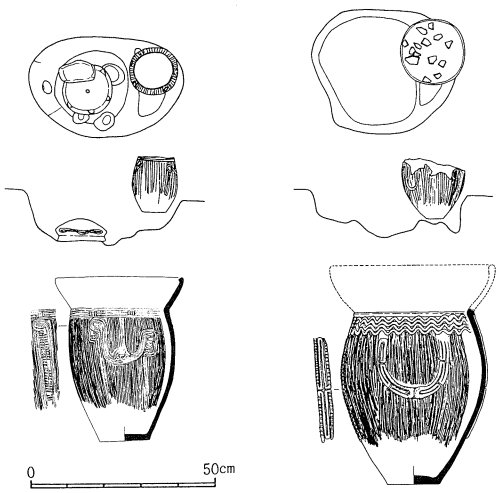
ところで、単独埋甕に限らず埋甕全般において出土状況が問題となる。本稿で扱った大型単独埋甕が、前節で示したような土器棺再葬の結果であるとした場合、分類の基準として何が重要となるであろうか。大きな要素として底部穿孔あるいは欠損が取り上げられようが、これは実用的な穿孔や破損とは考えられず、既に指摘されているように仮器であることを示すものあるいは再生の願いを込めたものなどの意味となろう。それよりも、実際の使用段階では正位であるか逆位であるかによって埋葬手順が変わってくる。即ち、正位は容器内への埋納であるの

で土器埋設後あるいは同時の埋葬となるが、逆位は埋葬または再葬後の被せを意味することとなるからである。いずれの場合でも容積からは成人の再葬も幼児の直接埋葬も考えられるが、前述した山本の集成結果から推定すると幼児埋葬の場合は正位でしかも底部の存在するものが傾向としては多いようである。確実な成人再葬の事例である坂東山例は逆位であり、本稿で扱った単独もごく一部に正位がみられるものの、確実なもののほとんどは逆位となっており、この面からも成人再葬の可能性が指摘できるのである。

5　土器棺再葬の意味

以上のように、第5図27の遺構は単独埋甕の一段階前の姿であり、またそのことから、単独埋甕は土壙墓に埋葬したものを再葬するための土器棺である可能性を示した。しかし、27のような事例はこれまで県内各地で発掘された資料中でも極めて特殊といえるほど類例の見られないものである。類似する土壙資料は県内においては他に確認できず、第12図に示した長野県原村居沢尾根遺跡35号土壙および109号土壙例を確認できた程度である[31]。この二例共に掘り込み内の端に段を有し、その部分に大型土器を立てている。掘り込み内部への土器設置という点では盛り土上部への設置である一の沢例とややニュアンスが異なるが、共通の意識を看取できよう。ようやく類例を確認できたのであるが、ともかく類例は非常に少なく、ここにその特殊性が示されている。

人骨を伴った土器棺再葬は、群馬県板倉遺跡[32]の加曽利ＥⅢ式期（成人男性；頭蓋のみ）が古く、後期以降になると前述の坂東山遺跡例はじめ事例が増えてくる。とくに滋賀県北部～福井県・岐阜県の県境地域にかけては晩期の土器棺再葬墓が集中しており、中村健二はこれらの再葬墓を集団墓とし、土器棺の様々なタイプは被葬者の出自を示すものとした[33]。中村の指摘からすれば、少なくともこの時期の土器棺再葬は特定の人物が選択されたという考えは成立しにくい。中部高地における井戸尻Ⅲ式期～曽利Ⅰ式期の土器棺再葬と近畿北東部における晩期後半の再葬の意味は全く別ととらえる必要があろう。同じ中部地方では、長野県北部に位置する北村遺跡で 300体にも及ぶ埋葬人骨（幼児～熟年まで幅広い）が確認されているが[34]、土器に収められた事例は僅か１例（焼骨）のみで、他に再葬は集積葬が６例あるだけである。この集積葬は報告者である平林彰によれば、意識的というより、繰り返される墓坑構築により露出した遺体を処理した可能性が強いとのことである[35]。また、埋設土器も何例か確認されているが、中期を含めて土器はせいぜい30㎝程度の大きさで、再葬のための土器棺とは考えにくい。これからすると



第12図　居沢尾根遺跡土壙
（左：35号，右109号：必要部のみ再トレース）

北村遺跡での再葬例は焼人骨の１例のみということになり、土器棺への再葬は極めて特殊な事例である。中期に属する21基の墓坑には再葬はみられず、被葬者は同じように一定の墓域に埋葬されているのである。少なくとも中期後葉段階の北村遺跡では土器棺再葬は行われていないようであり、北村遺跡においても集団墓の性格が強く、特定の人物を選択し特殊な葬法を用いることは行なっていない。これに対し、釈迦堂遺跡群などでは墓域内に通常の土壙墓と土器棺再葬墓が併存していることになり、集団の中の特定の人物が選定されていたことは確かである。岡村は、冒頭の文中で装着品を出土する土壙は限定されており、その被葬者は特殊な身分であったとしている。27の事例では壙内からは何も出土していないが、同じ時期で通常の土壙墓が一般的であることから、再葬される被葬者とされない被葬者との区別があったことが考えられる。なお、このような土器棺から装着品あるいは副葬品が出土することはほとんどない[36]。装着品を有する被葬者は埋葬方法自体は特殊ではないが、土器棺再葬は葬法そのものが特殊なのである。このことは生前の個人に対してではなく、死後の埋葬者に対しての意味付けを示しているものと考えられる。より労力を必要とする葬法を用いて、その特殊性を示すことに意義があったのであろうか[37]。通常、特殊人物とはムラの長、あるいはマツリにかかわる重要人物という項目でまとめられることになるが、きらびやかに飾った姿ではないが、しかし“再葬のために限定された人物”の存在を想定する必要がある。土壙墓と土器棺再葬墓の比率を考えると、このような形で再葬された被葬者は極めて限定されていることが窺われ、しかも、一次葬段階では内部になんらの副葬品ももたないものであった事例からは、被葬者が「死後に特定の意味付けをされた」と想像されるのである。そして、それはまた家族程度の規模ではなく、集落全体での意味付けであったのであろう。

6　おわりに

本稿は県内各地でこれまでに確認された土壙のうち、墓と考えられるものを選定し、副葬あるいは供献品と考えられる土器の出土状況からこの時期に県内に特徴的に見られる大型単独埋甕とのかかわりを探り、さらにこの単独埋甕の意味を探ろうとしたものである。境川村一の沢西遺跡の報告書作成段階から77号土壙の出土状態が気に掛かっていたのであるが、今回、まがりなりにも筆者なりの解釈をすることができた。これまで、住居内埋甕、単独埋甕ともにその用途については内容物の検出という方向に目が向けられていた。もちろんこれが何より直接的な方法であることは言うまでもないが、内容物の遺存が期待できない内陸地域にあって、土壙とのかかわりから単独埋甕の用途を推定できることが示せたのではないかと思う。しかし、土器棺再葬という観点からは、その前段階である土壙墓を整理する必要が生ずるが、時間的制約もあって充分検討しないままにいたずらに資料を提示するだけになってしまった。また、単独埋甕についても不確実なものを含めたままで論を展開したうえ、東北地方や北関東地方に見られるものとの関連、さらには曽利Ⅱ式期以降の状況などに触れなかったこともあって中途半端なものとなってしまったが、いずれこれらについても再整理してみたい。

本稿を草するにあたり、下記の方々に文献等でお世話になった。記して謝意を表する次第で

ある。

帝京大学山梨文化財研究所谷口一夫・櫛原功一、山梨県学術文化課小野正文、井戸尻考古館小林公明、長野県原村教育委員会平出一治、群馬県埋蔵文化財調査事業団井川達雄、滋賀県文化財保護協会中村健二、広島大学中越利夫、山梨県埋蔵文化財センター坂本美夫。

註

1）単独埋甕とはいわゆる屋外埋甕と同義である。埋甕である以上、その掘り込みは埋設土器の大きさに合わせて穿たれたものを意味し、広い掘り込みを有する土壙内埋設土器とは本来的には区別されるべきであろう。土壙としての機能が別にあったと考えられるからであるが、しかし、実際には土壙としての別の機能が生かされていたかどうかの検証は困難であり、土壙内埋設土器も含められよう。なお、屋外埋甕をまとめた山本暉久は、概念規定として「屋外埋甕とは埋納容器（施設）として屋外に意図的に埋設された土器を総称して言う」と述べている。

山本暉久　1977　「縄文時代中期末・後期初頭期の屋外埋甕について（一）」『信濃』　第29巻11号　33頁～56頁　信濃史学会

――― 1977　「縄文時代中期末・後期初頭期の屋外埋甕について（二）」『信濃』　第29巻12号　48頁～64頁　信濃史学会

2）岡村道雄　1993　「埋葬にかかわる遺物の出土状態からみた縄文時代の墓儀礼」『論苑　考古学』　47頁～119頁　坪井清足さんの古希を祝う会編　天山舎

3）長沢宏昌他　1987　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第22集『釈迦堂』Ⅲ　山梨県教育委員会

4）小野正文他　1987　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第21集『釈迦堂』Ⅱ　山梨県教育委員会

5）小野正文他　1986　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第20集『釈迦堂』Ⅰ　山梨県教育委員会

6）長沢宏昌他　1986　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第16集『一の沢西・村上・後呂・飯米場』山梨県教育委員会

7）小林広和他　1978　『安道寺遺跡調査報告書』　山梨県教育委員会

8）山本茂樹他　1992　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第71集『甲ッ原遺跡概報』Ⅰ　山梨県教育委員会

――― 1993　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第83集『甲ッ原遺跡概報』Ⅱ　山梨県教育委員会

9）上野晴朗　1975　「上野原遺跡」『中道町史』上巻　263頁～350頁　山梨県中道町

中山誠二他　1987　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第19集『上野原遺跡・智光寺遺跡・切附遺跡』山梨県教育委員会

10）中山誠二他　1987　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第29集『上の平遺跡』第4次・5次発掘調査報告書　山梨県教育委員会

11）甲斐丘陵考古学研究会　1979　「三光遺跡」『御坂町の埋蔵文化財』　1頁～59頁　御坂町教育委員会

12）長沢宏昌　1982　「市川大門町宮の前遺跡」『山梨考古』第7号　3頁～6頁　山梨県考古学協会

13）県内で確認された縄文時代中期の土壙については、既に小林広和が集成・分類を行っている。小林は土器及び石材の組み合わせパターンにより数種類の類型を設定しているが、これをバリエーションと捉え、それゆえ「規制された葬制が確立されたものとは考え難い」と述べている。しかし、墓域が限定されていること自体、葬制の規制を示すものと考えることが可能であり、本稿で想定している土器棺再葬などはまさに強力

な意志・規制によるものと筆者は考えている。

小林広和　1987　「縄文時代の土壙について」『研究紀要』４号　53頁～ 105頁　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

14）林謙作は北海道に特徴的な環状周堤墓内に存在する複数の土壙について、周堤内全面積に占める土壙掘り方面積の比率が非常に低いことから、それぞれの土壙には盛り土があったと想定している。土壙の掘り方の外側までを覆う盛り土を想定しており、標識（墓標）の位置と盛り土の規模は関係が深く、その位置から規模を探ることも可能だとする。

林謙作　1993　「石狩低地帯南部の環状周堤墓」『考古論集』　243頁～282頁　潮見浩先生退官記念事業会

15）谷井彪他　1973　埼玉県遺跡発掘調査報告書第２集『坂東山』　埼玉県教育委員会

16）平野元三郎・滝口宏　1933　「下総高木村寒風発見の人骨」『ドルメン』第２巻７号　５頁～７頁　岡書院

17）渡辺誠　1970「縄文時代における埋甕風習」『考古学ジャーナル』40号　９頁～17頁　ニューサイエンス社

18）桐原健　1983　「埋甕」『縄文文化の研究』第９巻　250頁～258頁　雄山閣

19）木下忠　1981　『埋甕―古代の出産習俗』　雄山閣

20）水野正好　1978　「埋甕祭式の復元」『信濃』第30巻４号　16頁～25頁　信濃史学会

21）桜井清彦・原信之　1968　「神奈川県伊勢原町横手原出土の底部穿孔土器について」『考古学雑誌』第54巻２号　24頁～33頁　日本考古學会

22）註１文献

23）小野は自身が担当した釈迦堂遺跡群（三口神平遺跡）の発掘調査結果もふまえて、住居の出入り口部分への曽利Ⅰ式大型土器の埋設があると考えているようである。しかし、三口神平遺跡で住居内とされるものが数基報告されているが、いずれも重複が激しく、確実に住居に伴う資料と断定できるとは思われない。他遺跡でもこの時期の大型土器を住居内埋甕として使用した事例は確認されておらず、筆者は三口神平遺跡例も単独埋甕の可能性が強いと考えており、該期の大型土器を住居内埋甕として使用したという確実な事例は現在までのところ確認されていないとしておきたい。

小野正文　1982　「底部穿孔埋甕小考」『甲斐の地域史的展開』　13頁～32頁　磯貝正義先生古希記念論文集編纂委員会編　雄山閣

24）武藤雄六　1965　「長野県諏訪郡富士見町大畑遺跡第三次調査報告」『長野県考古学会誌』３号　39頁～56頁　長野県考古学会

25）桜井・原は註21文献中で、曽利Ⅰ式期の単独埋甕資料として伊那市大泉新田遺跡例を挙げている。しかし、この土器は曽利Ⅰ式土器ではなく、唐草文土器である。当時唐草文土器が独立した様式として理解されていなかったためやむを得ないが、ともかく、曽利Ⅰ式期の単独埋甕とすることはできない。大泉新田遺跡資料は下記文献に示されている。

林茂樹　1966　『上伊那の考古学的調査』　125頁

26）神村透他　1972　「尾越遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―上伊那郡飯島町地内その１』所収　長野県教育委員会

27）会田進他　1986　『梨久保遺跡』　岡谷市教育委員会

28）註21に同じ

29）註19文献 258頁から引用。

原書は、山内昭二　1968　『三島市千枚原遺跡』　三島市教育委員会

30）註21文献から引用。

31）樋口昇一他　1981　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―原村その４』（居沢尾根遺跡）　長野県教育委員会

32）外山和夫他　1989　「板倉遺跡」『板倉町史考古資料編別巻９』　板倉町史編纂委員会

33）中村健二　1993　「土器棺墓よりみた近畿地方縄文晩期後半の地域色について」『滋賀考古』10号　9頁～28頁　滋賀考古学研究会

34）平林彰他　1993　中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11集『北村遺跡』　長野県教育委員会

35）平林は集落（居住地）の拡大はあっても墓域は拡大せず、当初から決められた場所にこだわり続けている状況があるとし、墓域での繰り返しの使用が強力に行われた、言い換えれば集団としての墓域の意識が個人（死者）よりも優先するとしている。

36）山本暉久は、埋甕内からの遺物出土例として、東京都元八王子遺跡例を挙げている。そこでは勝坂式土器が逆位に埋設され、その内部から硬玉製大珠が出土しており、甕使用葬の可能性を窺わせるものとしている。なお、釈迦堂遺跡群では単独埋甕内から土製円盤（メンコ）が出土した例がある。

37）縄文時代の再葬については、下記の設楽文献に詳しい。設楽によれば土器棺再葬は再葬甕棺墓というかたちで北東北地方において後期前葉に発達し、系譜的なつながりは不明であるものの晩期に再び近畿地方などに顕著に見られるとのことで、その意味については死者の再生を願ったと考えるのが妥当であろうとしている。そして、後期になって再葬が（土器棺というかたちで）顕著になるのは、それ以前の他界観との間に何らかの変化が生じたことを意味したと述べている。しかし、本稿で示したような土器棺再葬が中期中葉末にまで遡るとすれば、その時点で、どのような変化かはともかくとしても変化があったことを想定する必要があろう。

設楽博巳　1993　「縄文時代の再葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集　７頁～46頁　国立歴史民俗博物館

山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター　研究紀要10 1994年　pp27〜46

山梨県北巨摩郡大泉村
甲ツ原（かぶつっぱら）遺跡出土琥珀の産地同定（1）
― 赤外吸収スペクトル分析 ―

五味　信吾 ・ 野代　幸和

1　はじめに
2　甲ッ原遺跡および出土琥珀の概要
3　測定資料と分析方法
4　測定結果
5　考察
6　おわりに

1　はじめに

縄文時代において琥珀（amber）は装身具の材料として珍重されたものであるが、加工ないし製品化が可能な原材料を産出する地域は、現在わかっている範囲では北海道石狩地方・岩手県久慈市・福島県いわき市・千葉県銚子市・岐阜県瑞浪市など数ヵ所に限られており、容易に手に入るものではなかったと考えられる。山梨県において、これまで縄文時代の琥珀製品としては金の尾遺跡（中巨摩郡敷島町）[1]と一の沢遺跡（東八代郡境川村）[2]の2例を数えるのみであったが、平成4年に行なった甲ッ原遺跡（北巨摩郡大泉村）[3]の第4次調査の際、2基の土坑から3個の完形の垂飾と20点余の破片が出土した。これらの琥珀は質的にも優れたものであるばかりではなく、縄文時代中期初頭の五領ヶ台Ⅱ式に属する土器の破片を伴なっていたことでさらに考古学的な価値を高めた。では、これらの琥珀がどこで採取され、どのような経路をたどって甲ッ原遺跡に運ばれたのであろうか。発見時から当然のごとく沸き上がった疑問であるが、考古学的な分布論からみた産出地の想定は、縄文時代の琥珀のように極めて散在的な分布の遺物に関しては、言ってみれば状況証拠であり、決定力に欠けると言わざるをえない。そこで視点を変え、科学的な分析の方法として、琥珀の赤外線を吸収する特性に着目した赤外吸収スペクトルによる分析法を取り入れることにした。この方法は1974年に室賀照子氏らによって提唱された琥珀の産地同定法である。室賀氏らは現在においても琥珀を産出する地域のサンプルを考古資料とともに分析し、その産地同定を試みた。その後、遺跡出土の琥珀に対してこの方法による分析がなされたことは数少なかったが、その理由として、遺跡から出土する琥珀の絶対数が少ないこと、残存状態が悪いこと、この分析方法がいわゆる「破壊分析」にあたることなどが考えられる。甲ッ原遺跡では後で述べるように、出土量が豊富でサンプルの抽出が行い易かったことから、赤外吸収スペクトルによる分析が可能となったのである。

今回の研究は調査終了後からはじめて1年にも満たず、得られた地学的なサンプルも少ないうえに、考古資料も甲ッ原遺跡のわずか1遺跡のもののみである。そこで、本稿は新たな琥珀

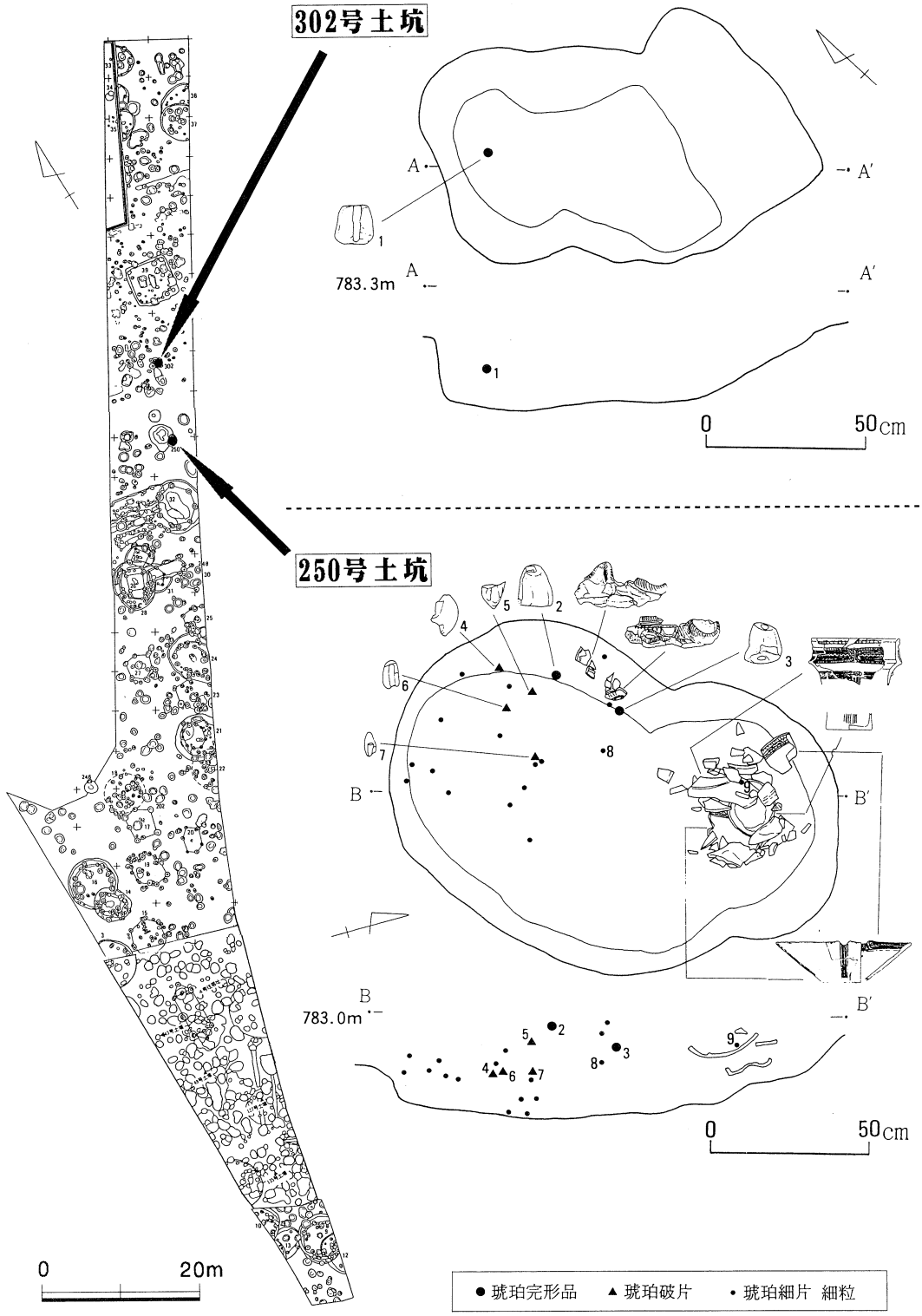
研究の方法を摸索する第一歩とし、その分析の方法や問題の所在について明らかにする基礎研究と位置づける。以下、甲ッ原遺跡の琥珀と産出地のサンプルの概要、赤外吸収スペクトルの測定方法および測定結果について述べ、これを踏まえた上で、科学的な分析と考古学的なアプローチの両者から得られる琥珀に関する情報をどのようにすりあわせていくべきか探るものである。

2　甲ッ原遺跡および出土琥珀の概要

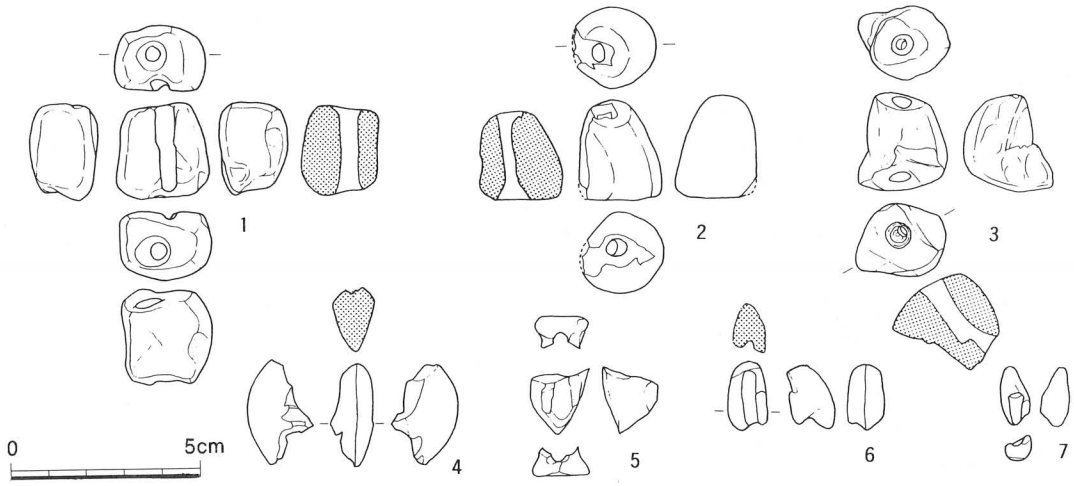
甲ッ原遺跡は、山梨県の北西部、長野県境にそびえる八ヶ岳の南麓の北巨摩郡大泉村に所在し、標高は780mから810m程度である。遺跡は小河川に挟まれて南に緩やかな傾斜を持つ「痩せ尾根」上に立地している。

発掘調査は県道須玉八ヶ岳公園線の建設に伴ない1989年から1993年まで5次にわたって行なわれており、縄文時代を中心に多数の遺構・遺物が確認されている。遺跡は南北方向に非常に長いので大きくA・B・Cの3区にわけて発掘調査を行なっているが、第4次調査は最南端のC区に対して行なった（第1図)。琥珀が発見されたのは、C区の中央よりやや北の250号土坑および302号土坑である。発見された位置などは図示した。これらの琥珀については甲ッ原遺跡の発掘調査概報[4]で触れているので、ここではむしろ、琥珀が発見された状況や変化などの現象面に重きを置くとともに、これに対する処置について具体的に述べ、今後遺跡において琥珀が発見された場合の予備知識としていただきたいと思う。

出土琥珀のうち完形または形状が推定できる破片は第2図の通りである。最初に発見されたのは250号土坑の2の琥珀である。出土時の第一印象としては土が付着していたために土製かとも思われたが、穿孔が確認できたので首飾りとして捉らえることができた。貧困な知識しか持ち合わせていなかった担当者にとって未知の材質であったが、直感的に「琥珀ではないか」という発想が頭をよぎった。さらにその表面を明確にするため、慎重に付着した土を水分を含んだ綿で拭き取ろうとした。その結果、表面は「艶けし」の状態から光沢のある状態に変わり、琥珀に違いないと確信した。製品としても穿孔も良く残った完全なものであった。しかし、暫くすると、孔の部分を境に崩壊をはじめ真二つに割れてしまった。そこで、これ以上の琥珀の崩壊を防ぐべく、ドラフティングテープで2つの破片を固定しビニール袋に入れ、持ち帰り、その後樹脂[5]によって破片を接着し、保管した。この琥珀への対処については後で述べるようにいくつかの問題点を持っているが、最初に見つかった琥珀が製品として完全なものであったことと崩壊し始めたことで、新たな琥珀の発見とその後の対処の目安になった。掘り進めるにあたって、「また琥珀が出るかもしれない」という心の準備ができていたので、慎重におこなったが、その後出土した琥珀製品と破片についても対処することができたわけである。このうち3の琥珀は材質的にもしっかりしているほか五領ヶ台式の土器片と近接して出土し、この琥珀に年代観を与えるものとなった。このほか製品としての形が残っているものもある半面、取り上げの時点ですでに粉々になっていた琥珀の破片も確認されたが、これらは乾燥した状態で、光沢がまったくない状態であった。



第１図　甲ツ原遺跡（Ｃ区全体図および琥珀出土状況）



第２図　250号土坑・302号土坑出土琥珀製品（½）

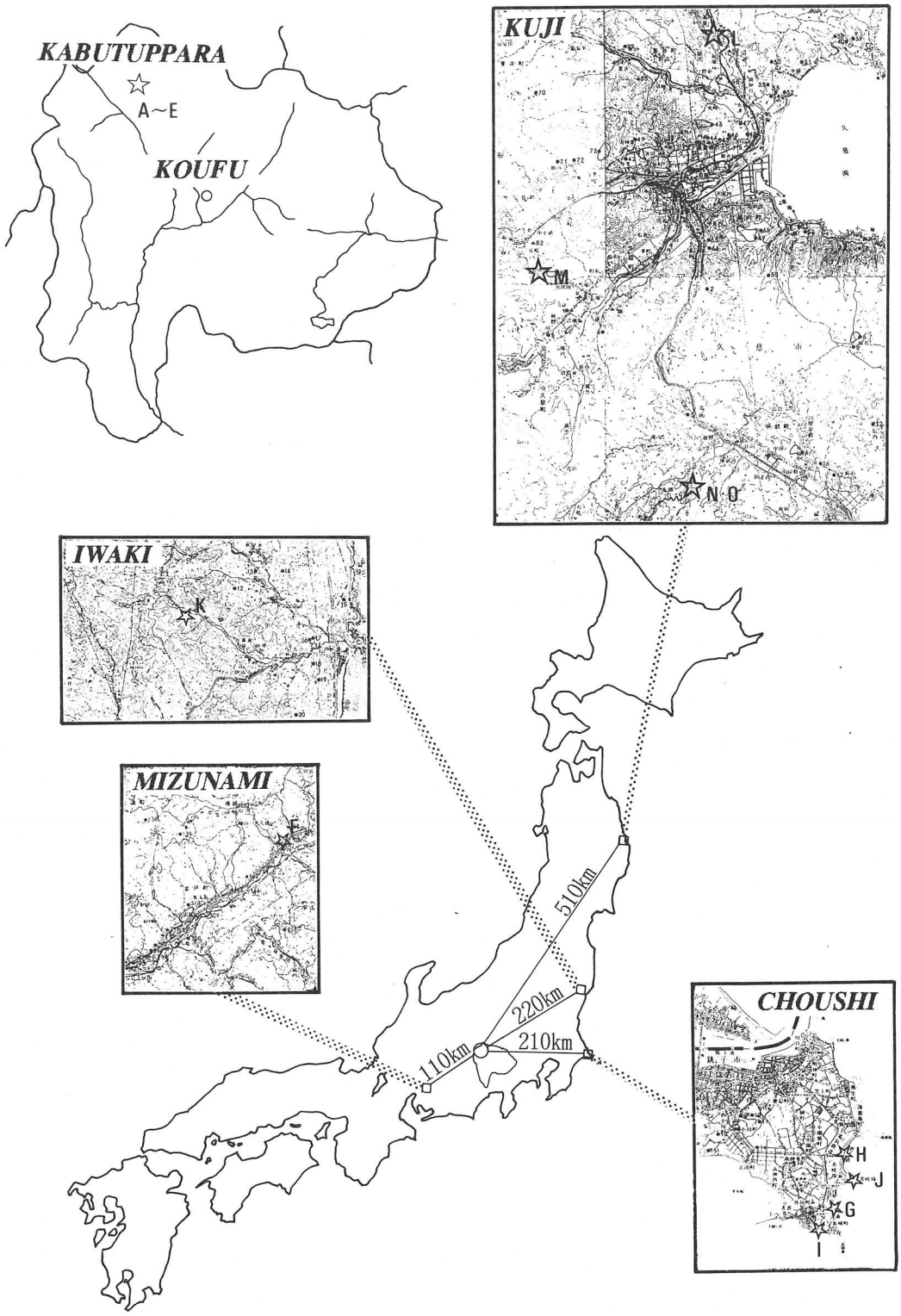
302号土坑は250号土坑から９ｍ程離れたところに位置するが、覆土と地山の違いが不明瞭であった。１の琥珀製垂飾は単独での出土でほかに遺物は伴なっていない。この琥珀は今回出土した琥珀の中では最もしっかりしていて、しかも光沢のある良質なものであった。量的に豊富な250号土坑の琥珀であったが、別の302号土坑からも琥珀が出土したことで、より多くの情報が得らることとなった。

３　測定資料と分析方法

今回測定に用いたサンプルは表１に示した通りで、甲ッ原遺跡の250号土坑および302号土坑出土の考古資料５点（Ａ～Ｅ）と琥珀産出地の地学資料10点（Ｆ～Ｏ）の合計15点である。このうち地学資料は岐阜県瑞浪市の１地点、千葉県銚子市の４地点、福島県いわき市の１地点、岩手県久慈市の３地点で採取された資料を用いた（第３図）。久慈市宇部町長坂のサンプルのみ１地点２サンプルの分析を行い、同じ地点採取琥珀の違いについても見ることとした。なお、考古資料については、接合の際に残った砕片を用いた。

琥珀の分析方法として、赤外線吸収スペクトルの測定による分析方法を用いた。まず試料１mgを乳鉢で細粒化し、KBr（臭化カリウム）と混合してプレス器にかけて錠剤とした。測定には、Nicolet 6000型分光光度計を用い、分解能は４cm^{-1}、Scanは500回で行った。なお、分析試料には硬度を保ち、薬品等の影響を受けていない光沢のあるものを厳正し利用したことを付記する。

琥珀は赤外部に吸収を持っており、各産地によってその吸収の波数および強弱が異なるという特性については、室賀照子氏によって「本邦出土琥珀の産地分析－赤外吸収スペクトルによる研究－」[6]と題する論文の中で発表されている。今回、測定を行った15点についても、この論文に基づいて実施したものである。なお、測定については京都大学化学研究所の林宗市先生にご協力を頂いた。



第３図　琥珀サンプル採集地　位置図

ここで分析用サンプルに関して若干の注意を述べておく、まず遺物が出土した段階が脆い場合、薬品による処理（パラロイドB-72など）を施す場合があると思うが、これらの薬品が測定結果に及ぼす影響がどの程度あるのか全く知られていないため、保存処理を施す場合には十分な注意が必要である。仮に化学的な分析を後で試みようと考えるならば、遺物出土の段階で未処理の破片資料を採取しておけばよい。甲ッ原遺跡の場合は破片資料が多数存在したため、分析に支障は出なかった。次に分析用サンプルそのものについてであるが、全く風化しておらず光沢を保っている部分が必要であり、且つ指先で摘んでも潰れないような硬度を持つ良好な状態のものに限定されていることをここに記しておく。甲ッ原遺跡の場合は、伴出した破片資料の大部分のものについては、他県における出土例と同様に風化してボロボロになったものが多かった。このような中から良好な保存状況にある貴重なものを抜き出すのは大変なことであるので大事に扱ってほしい。ちなみに琥珀の量については1mgあれば十分な結果が得られるのである。

4　測定結果（第4図～第18図）

赤外吸収スペクトルによる各サンプルの波形は図の通りである。各波形を室賀氏の論文および助言を参考にしながら観察を加える。ただし筆者は化学的研究の基礎がないので、氏の観察・表現とは相違があるが、素人なりになるべくわかりやすい表現になるよう心掛けた。各データは波形のみ図化されているので、実際の観察に際しては1㎜方眼のマイラーベースを重ねて読みとりを行った。各図の横軸は赤外吸収の位置（単位はcm^{-1}、以下便宜的に省略）を示し、縦軸は吸収の大きさを表すが、後者はKBrと琥珀の混合の比率に左右され波の大小が表れるため、絶対値ではなく比較値である。簡単にいえばあるサンプルの波は縦方向に間延びしていたり、あるサンプルの波はつぶれた感じになることがある。したがって吸収位置を基準に、波の大きさは異なる吸収位置の波との間の比較による分析を行う。吸収位置を図化した範囲は、これまでの論文のおよそ3800から600 のもの（各サンプルの波形図の右上に添付）ではどうしても大まかな比較となってしまうことから、今回は2000から400の範囲に拡大して各サンプル間の特徴をより鮮明にして検討するものである。また、図中に打ち出された数値は分析に用いた機器が波のピークを認識して自動的に書き込んだものであるが、参考までにそのまま載せておく。なお室賀氏の論文の波形と本論の波形とでは分析機器の違いによって裏返しの状態になっている。これは機器の新旧の差によるもので比較しにくくなってしまったがご了承いただきたい。

（1）各サンプルの波形の観察

A（第4図）……1800付近から波が出始め、1720付近で最大になり、1520付近で波が元に戻る。この波が他の波に比べ極端に大きい（①）。1460付近（②）と1380付近（③）に①の約半分の位いの波が連続してみられる。1230から1170にかけて幅の広い張り出しを持つ波が続き（④）。この間の最大吸収位置は1230付近である。そして、1030付近（⑤）と980付近に小さな波を持つ（⑥）。

B（第5図）……Aと波形はおおむね類似するが、④の幅の広い張り出し部分が1230から1180

の間でやや狭いことが異なる。この範囲の最大吸収位置は1180付近である。

C（第6図）……Bとほぼ同じ波形で吸収位置も共通する。強いていえば1230から1180付近（③）が平坦であるという特徴を持つ。

D（第7図）……Bと類似するが、1230から1170付近の張り出し（③）の凹凸が大きい。この間の最大は1170付近である。

E（第8図）……Dに近い。③の張り出しは1230から1160付近で共通するが、この間の波形はDと酷似している。

F（第9図）……これまでの波形とは極端に違う。1710付近の波は小さく（①）、1460付近の波（②）と1380から1370にかけての波（③）が突出し、極めて鋭い。③について波の先端が大きく先割れしている。1260（④）、1160（⑤）、1040（⑥）、880（⑦）、830（⑧）付近に比較的小さな波が見られ、その間にも微細な波が多数見られる。このうちでは⑥が大きく①とほぼ同じ程度の波である。

G（第10図）……1720（①）、1460（②）、1380（③）の位置で長い波を持つ。このなかでは②が最も大きな波である。①の波は極端に細い。1230（④）、1150（⑤）、1100（⑥）、1030（⑦）、970（⑧）、860（⑨）、820（⑩）付近に①から③ よりも小さな波がみられる。

H（第11図）……①の波は1740付近で一度止まり、1700で再び急激に倍以上の長さになる特異な形状を示す。1460付近（②）に最大の波形を持つ。その先端は細く鋭い。1380付近の波（③）も鋭角的で、②よりは小さい。②、③の波に関してはGと共通する。その後は、1260（④）、1180（⑤）、1090（⑥）、1030（⑦）、980（⑧）、860（⑨）、820（⑩）付近にわずかな波を持つ。

I（第12図）……1720（①）、1460（②）、1380（③）付近に鋭く長い波があり、このうち②が最大である。①の波はGと同様に極端に細い。1230（④）、1150（⑤）、1100（⑥）、1030（⑦）、970（⑧）付近に①～③よりも小規模な波がある。このうち最大は⑧である。860（⑨）、820（⑩）付近にもわずかな波を持つ。GとIは波形に関してかなり違っているという印象を受けるが、吸収位置は類似している。

J（第13図）……1720（①）、1460（②）、1380（③）付近の波が長い。このうち①と②はほぼ同じ長さである。1230（④）、1150（⑤）、1090（⑥）、1030（⑦）、970（⑧）付近に小規模な波があるが、①～③との長さの差は少なく、③と⑤はほぼ同じである。860（⑨）、820（⑩）付近にもわずかな波がある。

K（第14図）……1720付近で最大の波（①）を持ち、1460（②）と1380（③）付近でこれに次ぐ波を持つ。1230（④）と1160（⑤）付近に突起を持つまとまりが見られる。③と⑤はほぼ同じ大きさである。1090（⑥）、1030 （⑦）、980（⑧）付近にも小さな波を持つ。1460・1380付近の波の長さの違いを除けばEの波形・吸収位置に極めて近い。

L（第15図）……①の波は1730、1700付近で2つの頂点を持つ最大の波である（①）。これに続くのが1460（②）、1380（③）付近の波で鋭い。①と②との差は小さい。1230（④）、1210（⑤）、1160（⑥）付近に突起を持つまとまりがあり、この内の最大は⑥である。1090（⑦）、1030（⑧）、970（⑨）付近にも小さな波がある。このなかでは⑧が大きい。900から800にかけて4つのわ

ずかな波がある（⑩）。

M（第16図）……①の波は1710付近で頂点を持ち鋭く大きい。わずかながらその先端は2つに割れている。1450付近の波（②）は① よりも大きく、1380付近の波（③）は①よりも小さい。1230（④）、1210（⑤）、1160（⑥）付近に突起を持つまとまりがあり、この内の最大は⑥である。このまとまりはLとほとんど差がない。1090（⑦）、1030（⑧）、970（⑨）付近にも小さな波があるが、⑧が極端に大きい。900から800にかけて4つのわずかな波がある（⑩）。

N（第17図）……①の波は1730、1710付近で2つの頂点を持ちLに近いが、最大の波である1460付近の②と1380付近の③に関してはMと酷似している。1230（④）、1210（⑤）、1160（⑥）付近に突起を持つまとまりがあり、これはL、Mと共通している。1090（⑦）、1030（⑧）、970（⑨）付近の波はLに近い。900から800の間にわずかな3つの波がある。

O（第18図）……1730と1710付近に2つの頂点を持つ波（①）、1460付近の最大の波（②）はNと共通であり、1380付近の波（③）についても似ているが、先端がわずかに2つに割れている。1230（④）1210（⑤）1160（⑥）付近のまとまりは全体的に小さい。1090（⑦）、1030（⑧）、970（⑨）付近にも波がある。⑧は⑥よりも大きい。これはMに近い。900から800の間にわずかな3つの波がある。

（2）地域別の特徴

まず甲ッ原遺跡の琥珀AからEについては、1720付近の波が極端に大きいこと、1460と1380付近の波がほぼ同じ大きさであること、小さな波が少ないことなどが特徴的で、5点ともよく似ている。強いていえばAの1230付近の波の出方がわずかに大きい点で他の4点と異なるが、302号土坑と250号土坑の違いが表れているといえないこともない。しかし、波形から見て5点とも同一産出地のものであると考えてよいのではないだろうか。

次に瑞浪産のFの特徴であるが、1710付近の波が極端に小さいこと、1460付近の波が大きく、1380から1370付近の波が先割れしていること、1040付近の波が比較的大きいこと、1500から900の範囲に小さな波が数多くあることなどが挙げられる。

銚子産に関しては、Hのサンプル（君ヶ浜産）が他の3点と異なるが、1460付近の波が細くて鋭いこと、1460、1980付近の波が大きいこと、これに続く1150の波が比較的大きいこと、970付近の波が1030付近の波より大きいこと、860、820のわずかな波が存在することは銚子特有のもので他産地のものと比較する際の指標となろう。

いわき産のKに関しては、全体的に甲ッ原遺跡のサンプルとりわけEとの波形の類似がみられる。ただし1460と1380付近の波の出方が甲ッ原遺跡のものよりやや大きいという違いもある。

久慈産に関しては、1260から1100付近にかけての波形はどのサンプルもよく似ており、Kのいわき産とも共通している。しかし、1730から1700付近の波の先端が2つに先割れしていること、1460付近の波がかなり大きいこと、1030の波が周囲よりもやや大きいことなどの特徴を持ち、いわき産とは異なる。ちなみに同じ産出地の資料であるNとOでは部分的な波の凹凸はあるがおおむね類似した波形になっている。また久慈の中での異なった産出地でも波形は比較的

似通っている。

5 考 察

これらのデータが指し示す波形の比較及び肉眼観察の結果から、本遺跡発見のものは福島県のいわき産の可能性が非常に高いように考えられる。この結果は出土遺跡の分布と地理学的な利便性から通常考えられている千葉県の銚子や東京都の八王子、岐阜県の瑞浪とは異なる見解を示すこととなったのでる。特に福島県のいわきの可能性が出てきたことについては、室賀氏の論文には掲載されていないものであり、こういった未知の可能性を秘めている点においては、将来性のある研究方法であるように感じられるのである。しかしここでは、地学資料の分析データが少ないため、現時点での産地の限定は避け今後の研究課題としたい。

今までの赤外吸収スペクトル分析が古墳時代の遺物を中心に実施され、その産地の同定結果が久慈としか示されていないため、どうも久慈産としか同定されないのではないかのように思われてきた。近年これに対して、古墳時代の琥珀玉[8]については、分布論や地理学的な観点から、これらの科学分析の結果および分析方法について疑問を投げかけている。我々はこの分布論的な問題点については、古墳時代以降に限定された段階であり、物の動きもかなり活発な段階であると考え、この段階以前においては、その時代・時期によって、ある程度（この程度が問題であるが・・・）交易の範囲が限定され、限られた琥珀の産地において採取され流通した可能性があるのではないかと考えている。すなわち、今日まで科学分析が行われてきた考古資料については、古墳時代以降のもの[9)10)]が大部分であり、このことが多量の琥珀を産出し、量的に入手しやすい久慈を産地として指し示す要因となっているようにも思われるのである。

本論考の対象である縄文時代においては、こうした多量に採取可能で物流の活発な時期と同じ次元で捉えることはできないと考える。このような観点から、近くに産地を控える出土遺跡についてみてみる必要があろう。例えば銚子市の粟島台遺跡においては、層位的に見た場合、中期初頭段階からの出土も確認されているようであるが[11)]、これより上層の中期後半加曽利Ｅ式段階に集中しているようである[12)]。ちなみに本遺跡出土の琥珀については、Ｓトレンチの第６層出土の物と表採資料が銚子産と同定されている[13)]。久慈市のある岩手県とその周辺においては、中期中葉以降からの出土が主に伝えられている。福島県では七郎内Ｃ遺跡から50点以上の玉が出土している。時期的には、伴出土器が無く限定はできないが、縄文時代中期前葉に位置付けられている[14)]。

銚子から比較的近い関東地方の様相はというと、東京都町田市の三矢田遺跡から前期後半から末葉に位置付けられる小玉が出土している[15)]。前期末葉から中期初頭段階のものには、東京都八丈町の倉輪遺跡のものが知られている[16)]。中期初頭段階のものには千葉県銚子市の荒野台遺跡からの垂飾が上げられる[17)]。しかし、これらの資料の産地同定はなされていない。

甲ッ原遺跡周辺に目を向けてみると、長野県の諏訪湖周辺で集中する傾向が見られ、６遺跡で確認されている。中でも中期初頭段階に位置付けられるものに、岡谷市の梨久保遺跡出土のものが上げられる[18)]。長野県史[19)]によれば、これらの琥珀製品の産地として八王子市の北浅川

産を上げているようであるが、北浅川産のものについて言えば、現在発見されているその多くのものが、小粒で軟質であり、真のコハクになっていない[20)21)]ことなどから加工して製品化するにはかなり無理がある。つまりこれは地理的な推測のみで産地を判定する危険性を証明するものであるが、これについて言えば諸条件が適しておらず、現状では産地の同定分析以前の問題であるように感じられる。分布論的な内容になるが、このように前期後半から中期初頭段階に位置付けられるものについては、銚子より西部において集中して確認されていることに注目したい。また最近、前期後半段階に位置付けられると考えられる垂飾が四街道市の木戸先遺跡で発見されており、本州においては最古に位置付けられるものと考えられる琥珀製品である[22)]。このような発掘事例からわかることは、本州における琥珀製品の初現は前期末葉から中期初頭段階にあたるようである。該期における山梨県の様相としては、北陸・畿内・中部高地の土器群と関東の土器群が共に流れ込み、互いに伴出関係を持って出土状況を示し、活発な物流が窺える時期であるが、中でも西側方面の文化の流入が目立つ中で、東側で産出し加工されと考えられるものが出土したことには、東西文化の交流地点として位置づけられる本県においてその意義はとても大きなものである。このような考古学的に得られた成果と化学的な分析結果について検討すると、現段階で得られた情報からは、極めて想定しうる結果を示していることに気付くのである。むしろ現状では、琥珀産地周辺における考古資料の分布の貧弱さが明らかとなる結果を示すこととなったのである。このことは、地学的な産地と遺物の分布、やや反比例した結果をもたらしており、今後の資料の増加を待って、化学分析結果と共に再度検討を行うこととしたい。

今回の実験的な試みで明らかとなったのは、前述のとおり福島県のいわき地方の産出の可能性を示すもの[23)]であったこと以外に、同じ銚子産でも君ヶ浜海岸産出のものについて言えば、他の三例と異なった波形を示しており、今後の資料の増加に伴ってさらに比較検討を行う必要性が生じてきたことである。これらのことは考古学的な手法と科学的な結果を基にしても、未だ不安定な要素をどちらも含んでいることが明らかとなり、問題点を提起するような形となった。つまり、琥珀の同一産地における出土層位の違いなどによる地学的なサンプリングに関する問題点が浮上してきたことを示している。このことからもいちがいに銚子の可能性を捨てさることができなくなってしまったのである（波止山からは富士山を望むことができる…！）。またこれによって考古学的な分布論の有効性に関しても再浮上することとなった。よって現段階における産地同定については、産地を限定せず可能性の域を越えないほうが安全であるように思われるのである。

今回の分析で産地の検討を行うにあたって、室賀照子氏の基本データとも対比しながら実施したわけであるが、測定機種が異なった点などもあり、基本的な吸収の特性については問題はないが、部分的なパターンの問題で不整合が生じ、産地の特定に当たっては慎重を極めざる終えない状態となってしまった。よって今後の分析では、これらの問題点を克服するべく方向で実施していく構えでいる。

6　おわりに

近年、各地で琥珀資料の発見が伝えられる中で、分布論に基づいて述べられるものが大部分で、ほとんど科学的なメスが入れられず今日までに至って来たのが現状である。我々は少しでも真の縄文時代における琥珀の流通経路（アンバールート）を解明したいと考えていた。そこで実施したのが今回の分析である。とりあえず協力頂けた各個人および機関からの地質学的な試料と共に考察を加えてみたのだが、同一地点の試料で出土層位・色調の相違などによって、どの程度の測定値に差異が見られるのかなどといった問題点について克服できない状態にあり、より多くの資料（データ）との比較をしたい。また考古資料に見た形態的な相違などについても合わせて検討していき、交流経路と時代的な特徴と位置付けを行っていくつもりである。今後の試料の充実を待って再度分析を実施し、明確な産地の同定を試みたい。

最後に本稿の作成にあたり多くの方々のご指導・ご協力を賜りました。特に化学的な知識に疎い我々に対して親切・丁寧なご指導を頂いた室賀照子先生、赤外吸収スペクトル測定に御協力頂きました京都大学化学研究所林宗市先生・木村功之先生、分析試料の提供にご協力頂いた岩手県立博物館佐々木勝氏・福島県立博物館森幸彦氏、竹谷陽二郎氏、久慈琥珀博物館佐々木和久氏、山田勝彦氏、伊藤睦憲氏、銚子市教育委員会高森良文氏、東総文化財センター赤塚弘美氏、瑞浪市化石博物館、文化庁原田昌幸氏、その他御指導・御教授頂いた吉田格先生、立正大学池上悟先生、末木健氏、山本茂樹氏、小松繁氏にはこの紙面を借りて深く感謝いたします。

（追記）

今回実施した分析は非破壊ではないので、文化財を扱う者として大変勇気のいる決断でした。しかし良好な資料や若干の破片資料などが伴出した場合には、可能な限り実施することによって未知の可能性が開けてくるものと思われます。

－眠っている遺物たちよ今すぐ出でよ！－

註

1）山梨県教育委員会『金の尾遺跡 無名墳（きつね塚）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第25集　1987
第13号住居址（縄文時代中期中葉）の覆土内より出土

2）長沢氏による教示　一の沢遺跡から出土したものについては報文中に記載されていないが、縄文時代中期中葉段階に位置づけられる住居の覆土から出土したものである。

3）室賀照子・藤永太一郎・竹中亨「本邦出土琥珀の産地分析－赤外吸収スペクトルによる研究－」『日本化学会誌』9　1974

4）山梨県教育委員会『甲ッ原遺跡概報Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第83集　1993

5）パラロイドB-72＋ナフサ混合３％溶液

6）註３と同じ

7）註３と同じ

8）池上 悟「古墳出土の琥珀玉」『立正大学文学部論叢』97　1993

9）室賀照子「奈良県雄丸山・於・慈恩寺脇本古墳出土の琥珀の化学分析」『橿原考古学研究所論集』5　1979

10）室賀照子「琥珀は語る…古代アンバールートを探る」『末永先生米寿記念考古学論文集』1985

11）寺村光晴・安藤文一「千葉県粟島台遺跡の調査」『考古学ジャーナル』88　1973

12）赤塚氏の教示による。

粟島台遺跡発掘調査会「銚子市粟島台遺跡発掘調査報告書」1990

銚子市教育委員会「粟島台遺跡発掘調査報告書」1991

13）室賀照子・藤永太一郎・竹中亨「外国産及び本邦産コハクの産地分析」『分析化学』25-11　1976

14）福島県教育委員会『母畑地区遺跡発掘調査報告X』1982

15）鶴川第二地区遺跡調査会『真光寺・広袴遺跡群VI』1991

16）八丈町教育委員会『倉輪遺跡』1987

17）山田氏より教示、現存しない。

18）岡谷市教育委員会『梨久保遺跡』1986

19）宮下健司「滑石・翡翠・琥珀製品の分布」『長野県史 考古資料編全1巻(4)遺構・遺物』1988

20）吉田 格「縄文時代の琥珀」『考古学論究』第2号　1992

21）ディータ・シュレー『日本の琥珀』 北九州自然史友の会　1993

22）(財)印旛郡市文化財センター『財団法人 印旛郡市文化財センター年報7』1991

23）ここで、室賀照子氏による甲ッ原遺跡の資料といわき産の資料に関する分析見解を記載する。

甲ッ原遺跡出土資料に関する吸収波形について以下のような見解を得ている。「3450、3300、3070cm^{-1} 近傍では弱い吸収があり、2990cm^{-1} 近傍では強い吸収がみられる。2870cm^{-1} に弱い吸収があり、1715cm^{-1} に次の吸収が見られる。更に、1457、1382cm^{-1} に小さくやや鋭い吸収が見られる。1228cm^{-1} 付近にかけてやや平坦な吸収があり、1091cm^{-1} に小さい吸収、879cm^{-1} と弱い吸収が続く。」本遺跡出土の資料に関しては、「何れも同様の吸収を示している事から、同一原産地の物と同定される。」

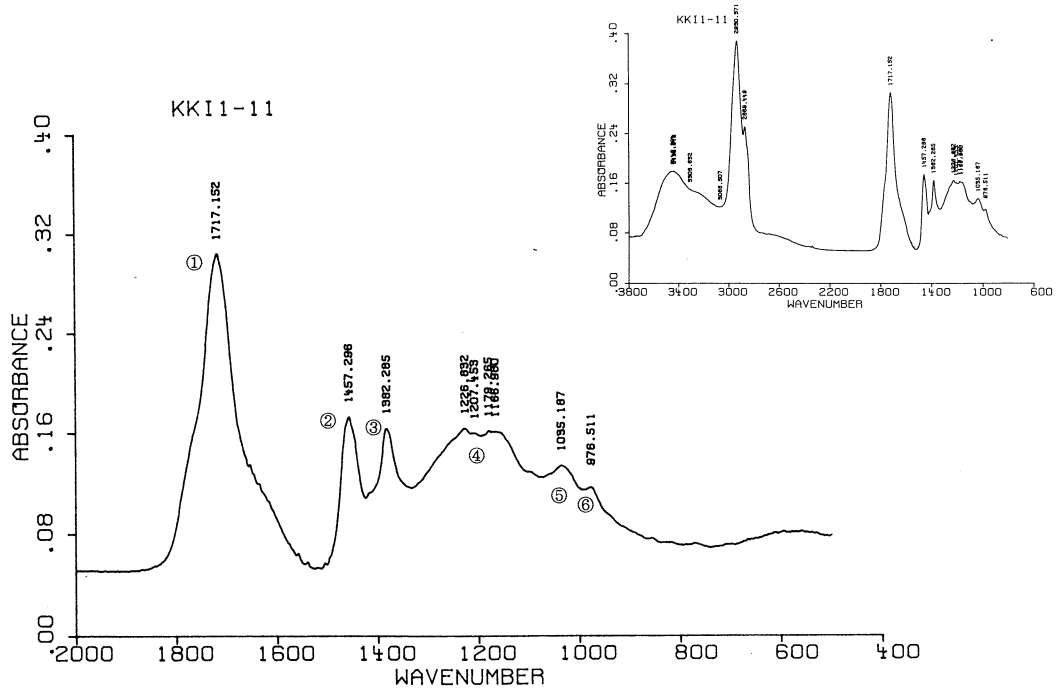
次に標準資料との対比から、「現段階では、いわき産出のそれに近いが、いわき産出の標準資料が少ないので、更により多くのいわき産の琥珀について測定を行い、その範囲を確定した後、改めて産地同定を行いたい。」といった意見が述べられている。

参考文献

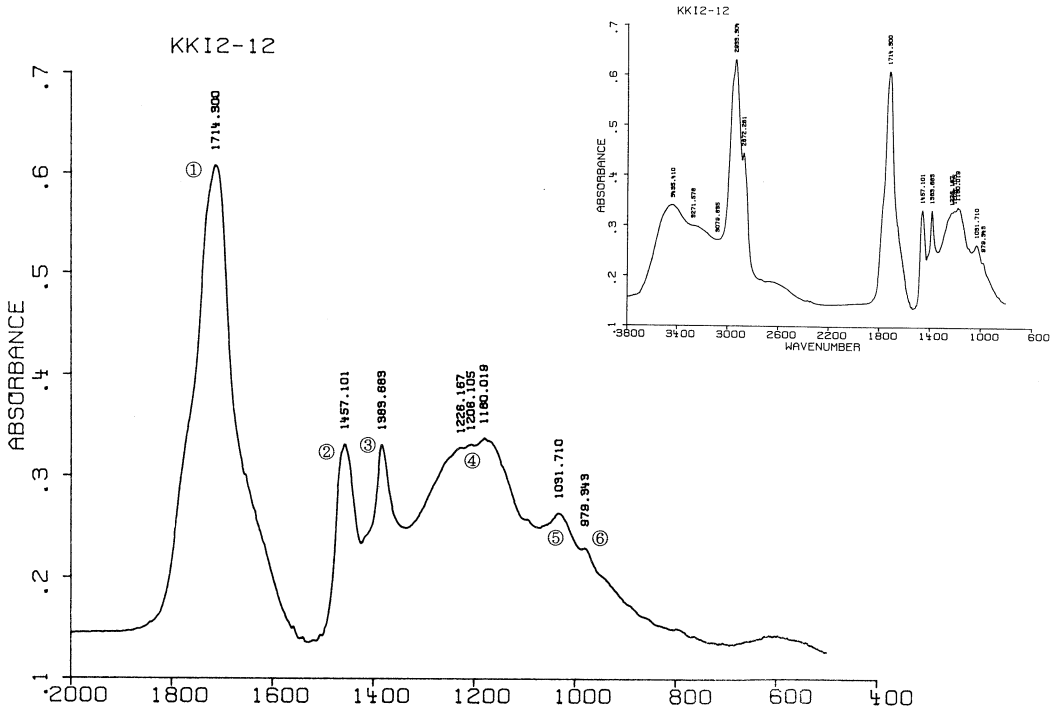
- 糸魚川淳二「瑞浪コハク含有層（釜戸層）の地質」『瑞浪市化石博物館報告』第1号　1973
- 寺村光晴「日本先史時代の琥珀」『和洋女子大学文学部創設三十五周年記念論文集』1985
- 山田勝彦「千葉県銚子市の琥珀原石産地」『宇奈加美』創刊号　1993
- 久保勝範・室賀照子「北見市中ノ島遺跡出土琥珀の赤外吸収スペクトル」『吉崎昌一先生還暦記念論集 先史学と関連科学』1993
- 佐々木清文「琥珀の産地と流通」『上野山遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第67集 1983

第1表　琥珀サンプル一覧表

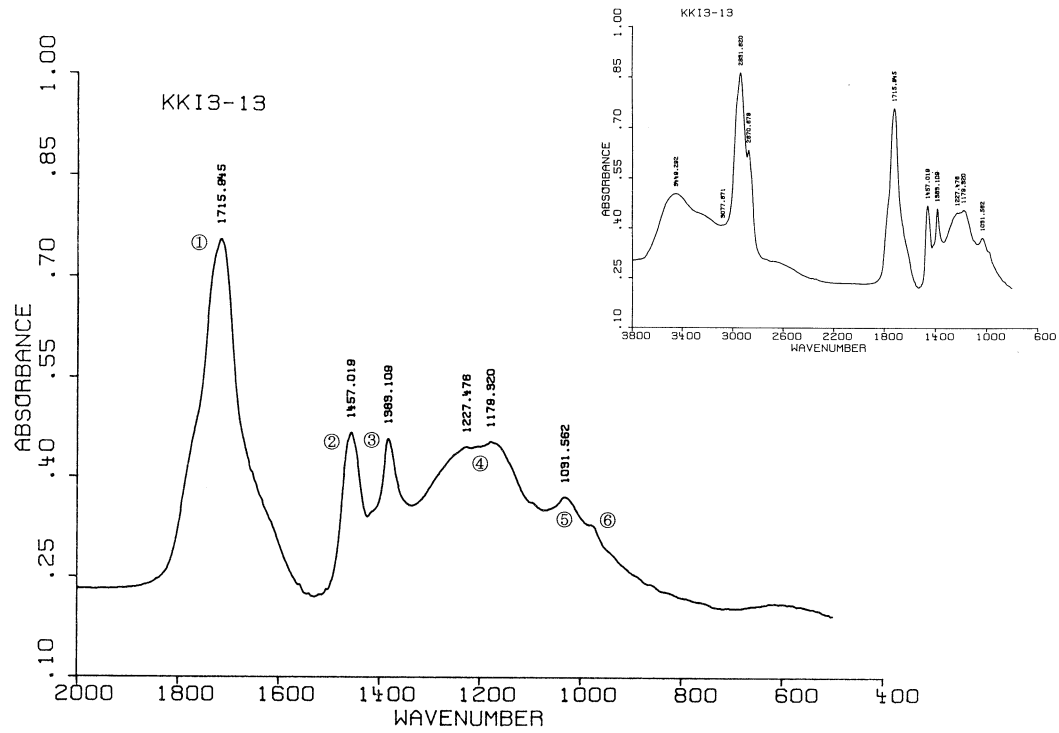
	測定番号	出土・産出地	出土遺構・産出地点	産出層準	推定年代	図版	波形図
A	KKI1-11	甲ッ原遺跡	302号土坑(1)			第1・2図1	第4図
B	KKI2-12	甲ッ原遺跡	250号土坑(8)			第1図8	第5図
C	KKI3-13	甲ッ原遺跡	250号土坑(2)			第1・2図2	第6図
D	KKI4-14	甲ッ原遺跡	250号土坑(9)			第1図9	第7図
E	KKI5-15	甲ッ原遺跡	250号土坑(5)			第1・2図5	第8図
F	K-M-1	岐阜県瑞浪市	釜戸町上萩ノ島	釜戸層	更新世初期	第3図F	第9図
G	K-C-1	千葉県銚子市	長崎町酉明浦海岸	酉明浦層	白亜紀前期	第3図G	第10図
H	K-C-2	千葉県銚子市	君ヶ浜海岸	君ヶ浜層	白亜紀前期	第3図H	第11図
I	K-C-3	千葉県銚子市	外川町波止山	海鹿島層	白亜紀前期	第3図I	第12図
J	K-C-4	千葉県銚子市	犬吠埼	犬吠埼層	白亜紀前期	第3図J	第13図
K	K-I-1	福島県いわき市	大久町小久山之神	玉山層	白亜紀後期	第3図K	第14図
L	K-K-1	岩手県久慈市	夏井町宇津目	国丹層	白亜紀後期	第3図L	第15図
M	K-K-2	岩手県久慈市	小久慈町大沢田	玉川層	白亜紀後期	第3図M	第16図
N	K-K-3	岩手県久慈市	宇部町長坂	玉川層	白亜紀後期	第3図N	第17図
O	K-K-4	岩手県久慈市	宇部町長坂	玉川層	白亜紀後期	第3図O	第18図



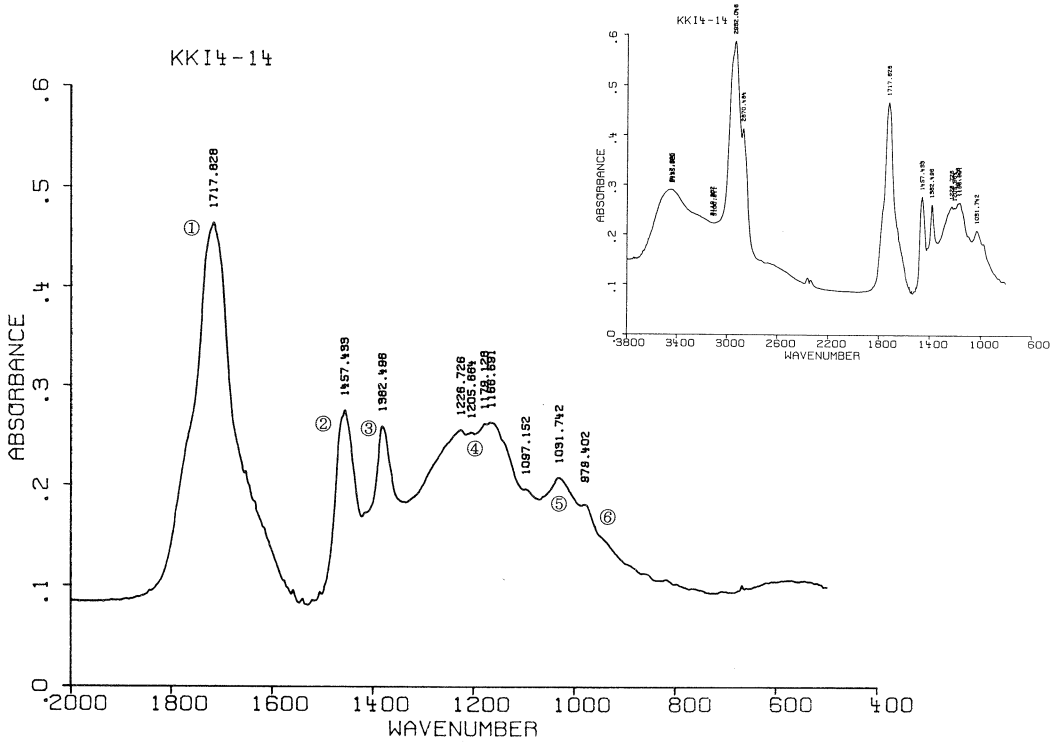
第4図 A　甲ッ原遺跡302号土坑（1）



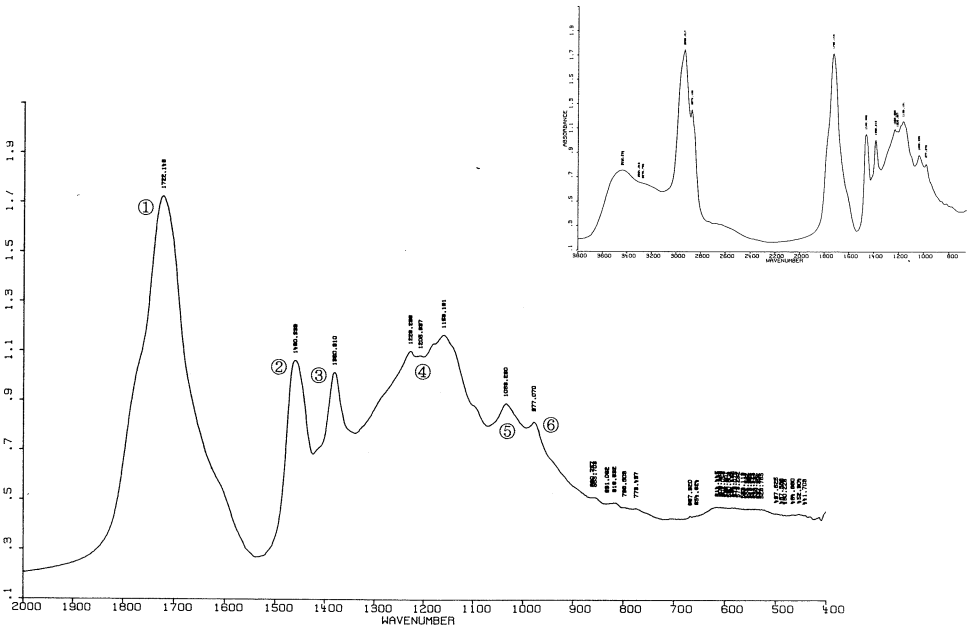
第5図 B　甲ッ原遺跡 250号土坑（8）



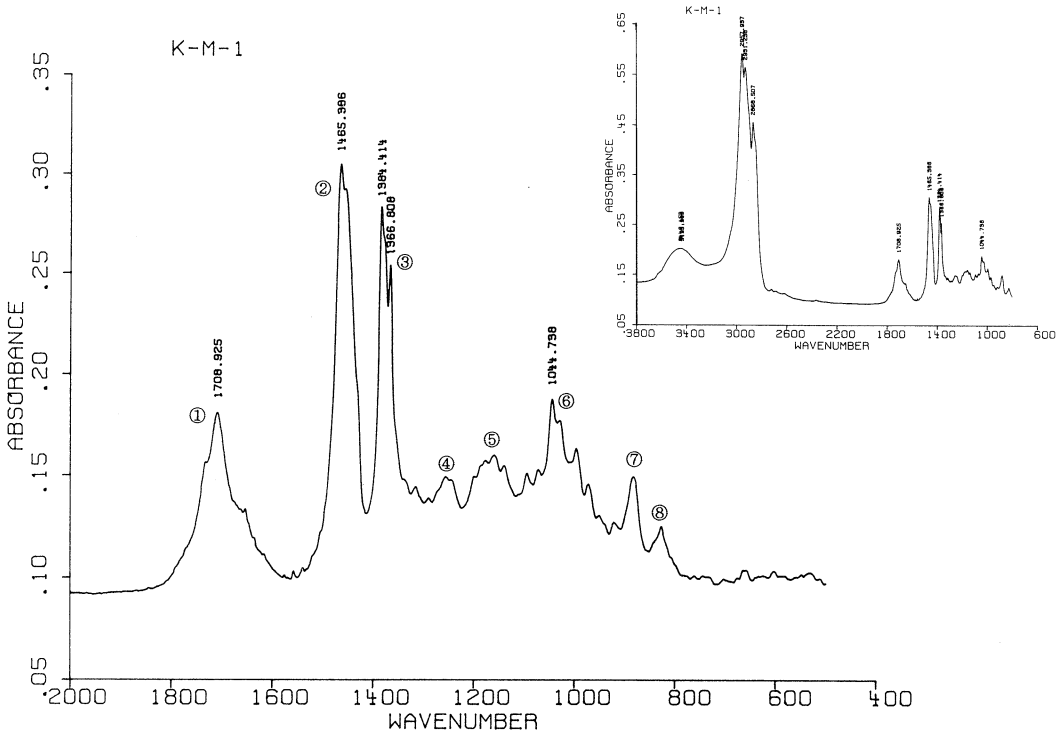
第6図 C　甲ッ原遺跡 250号土坑（2）



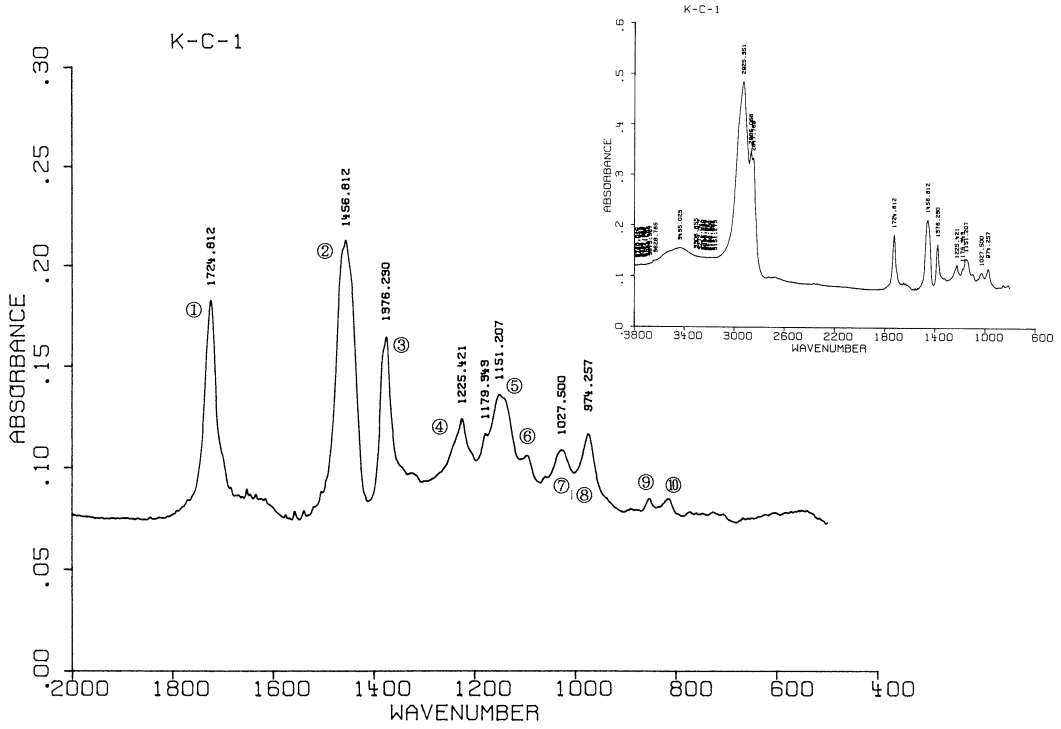
第7図 D　甲ッ原遺跡 250号土坑（9）



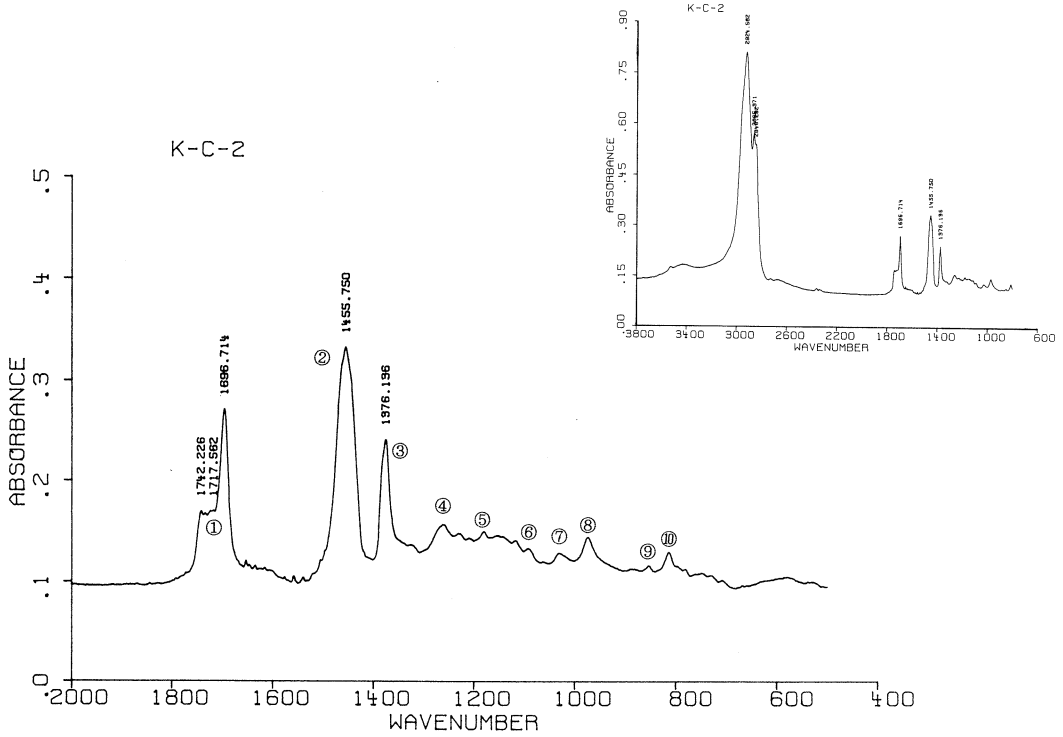
第8図 E　甲ッ原遺跡 250号土坑（5）



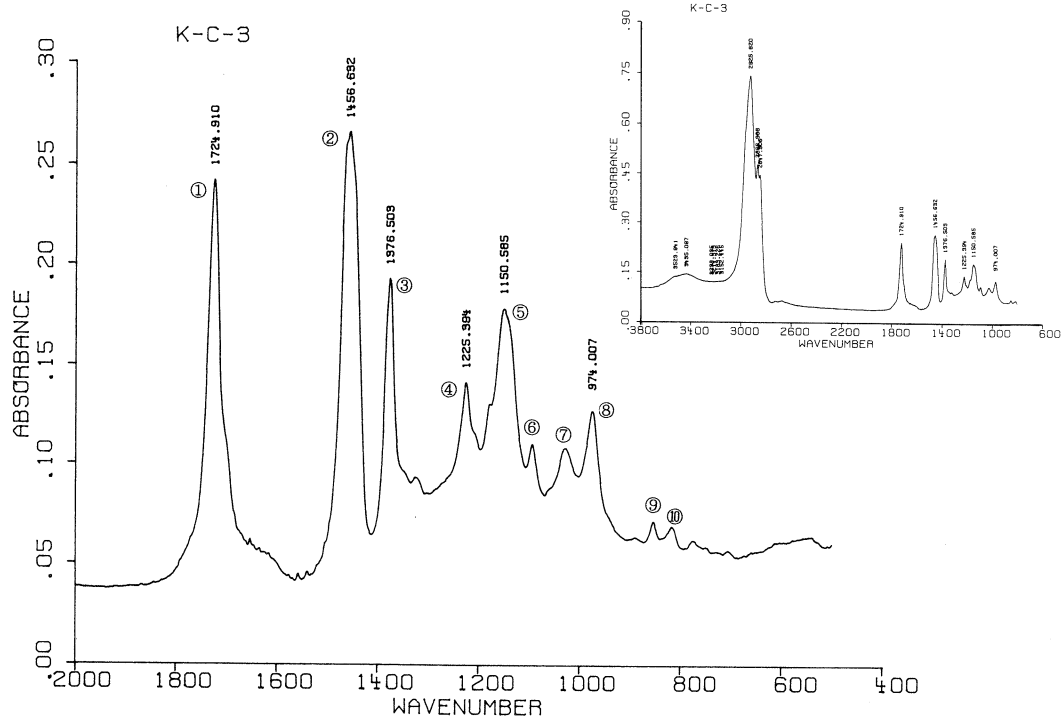
第９図　Ｆ　　岐阜県瑞浪市釜戸



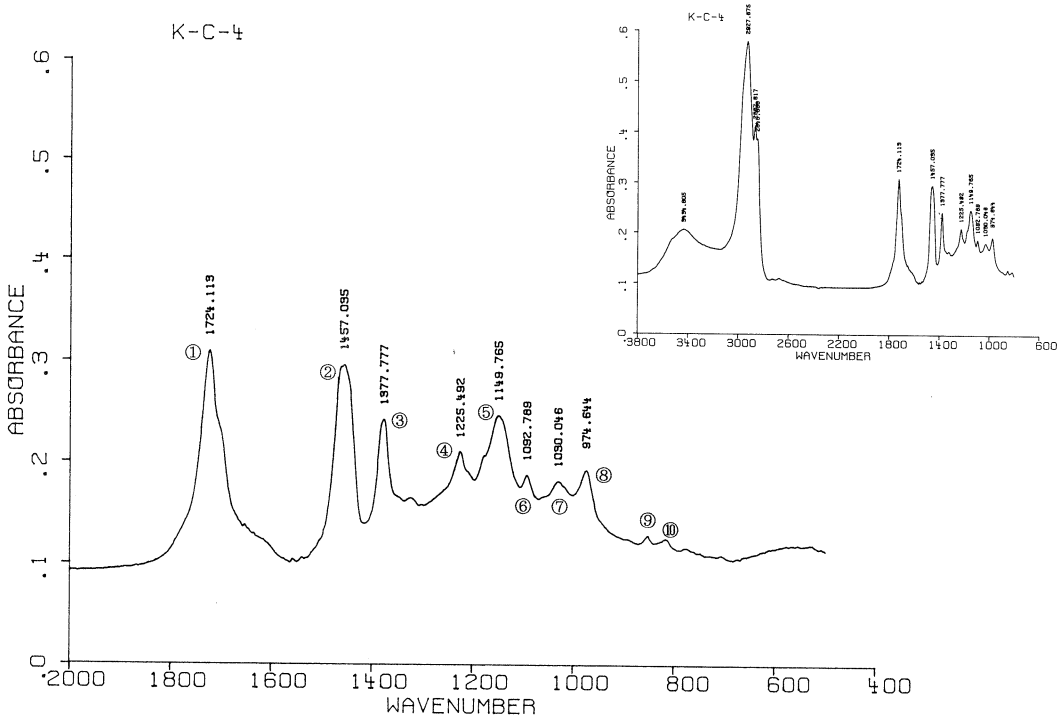
第10図　Ｇ　　千葉県銚子市酉明浦海岸



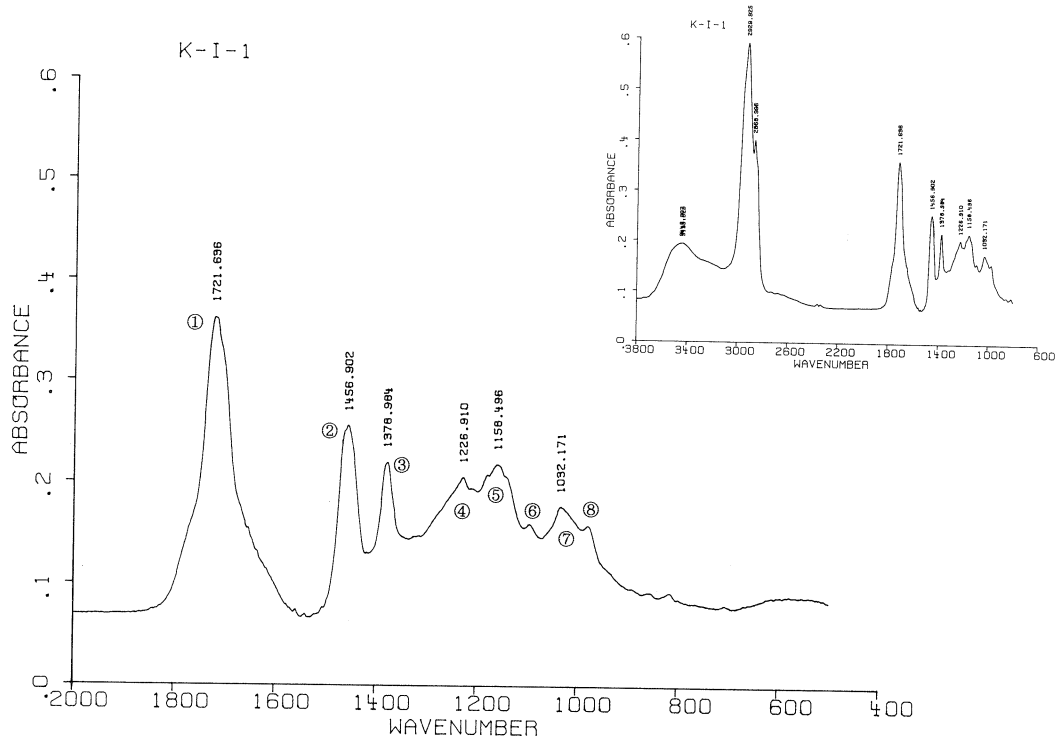
第11図 H　千葉県銚子市君ケ浜海岸



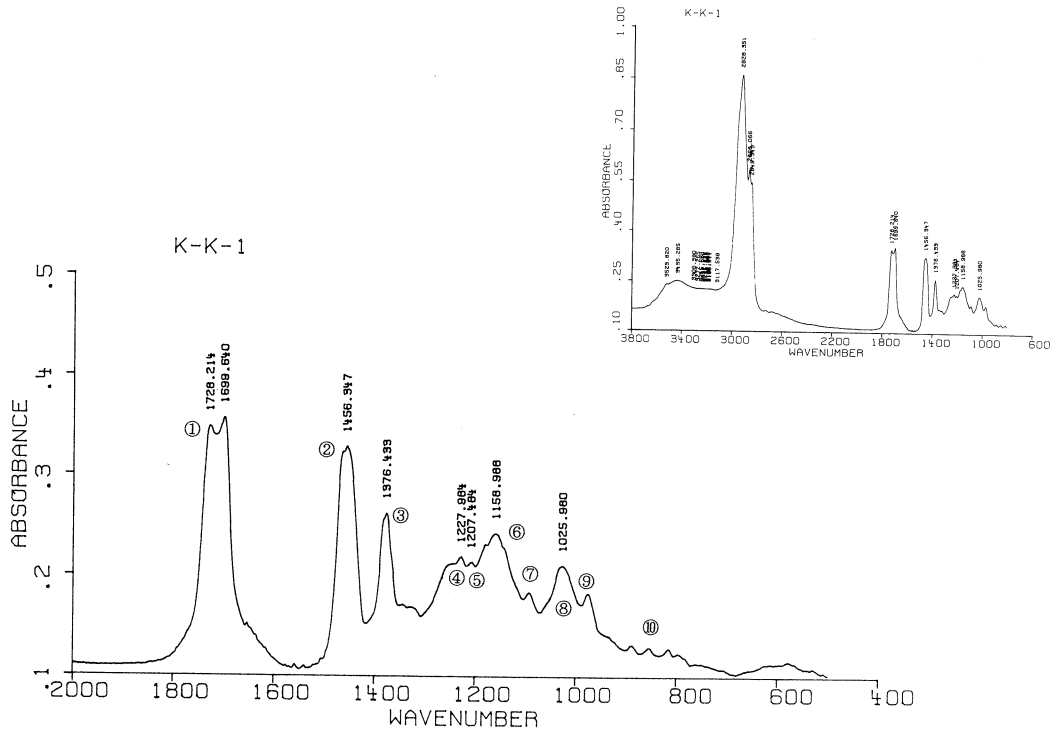
第12図 I　千葉県銚子市波止山



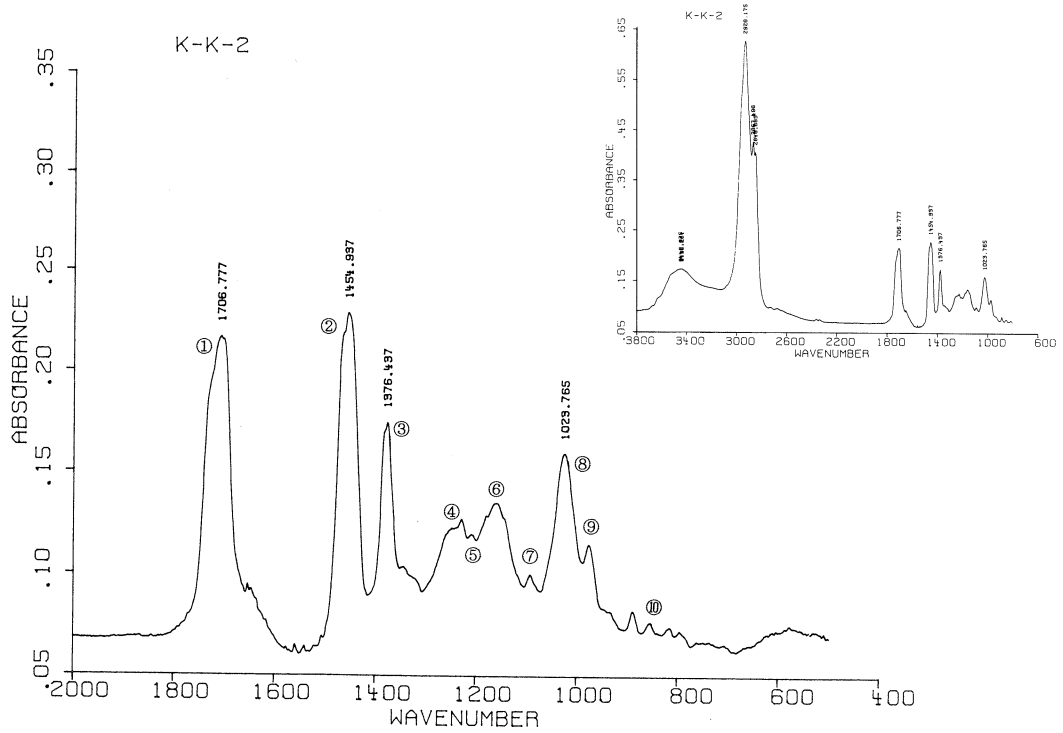
第13図　J　千葉県銚子市犬吠崎



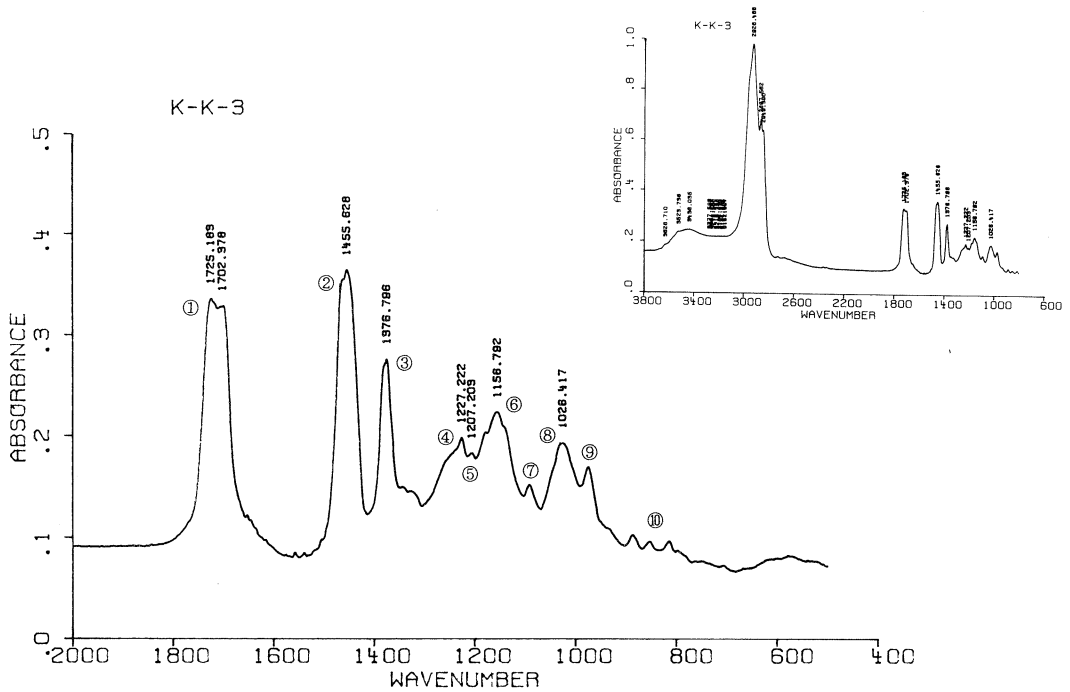
第14図　K　福島県いわき市大久



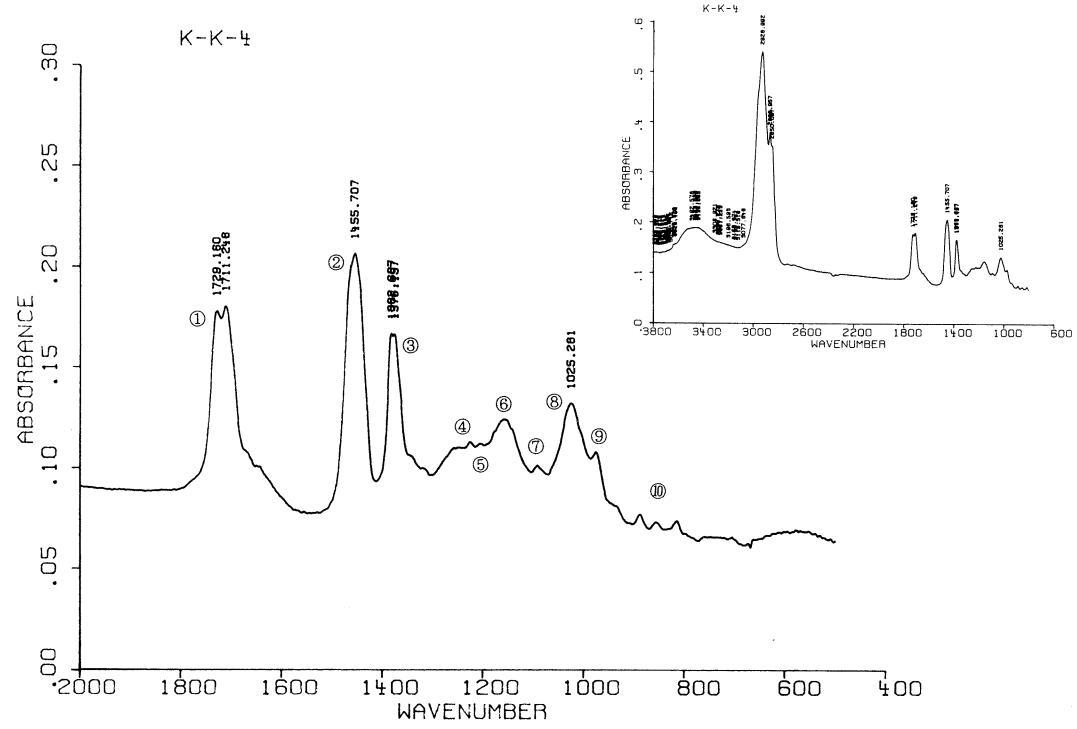
第15図　L　　岩手県久慈市夏井



第16図　M　岩手県久慈市小久慈



第17図 N　岩手県久慈市宇部



第18図 O　岩手県久慈市宇部

山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター　研究紀要10　1994年　pp47～71　－資料報告－

金生遺跡出土の土器　2（晩期）

新津　健

1　はじめに
2　出土土器
3　まとめと課題

1　はじめに

研究紀要8号にて、報告書[1]に載せることのできなかった土器のうちの後期の一部を紹介した[2]が、今回はこれに続き晩期を対象として報告する。

報告書では各遺構から出土した前期から晩期までの土器を中心に第1群～第10群まで分類し報告・検討を行った。今回も基本的にはこれに従って報告していくが、晩期に限ったことから以下の第6群と第7群とが対象となる。

第6群土器　晩期前半の土器　1類　清水天王山式土器　2類　安行3a・大洞B式系土器
3類　大洞BC式系土器　4類　大洞C1式系土器
5類　安行3b・3c式系土器
6類　「鍵の手」文土器（佐野I式系）
7類　北陸系土器　8類　東海系土器
9類　条痕文土器　10類　その他縄文等

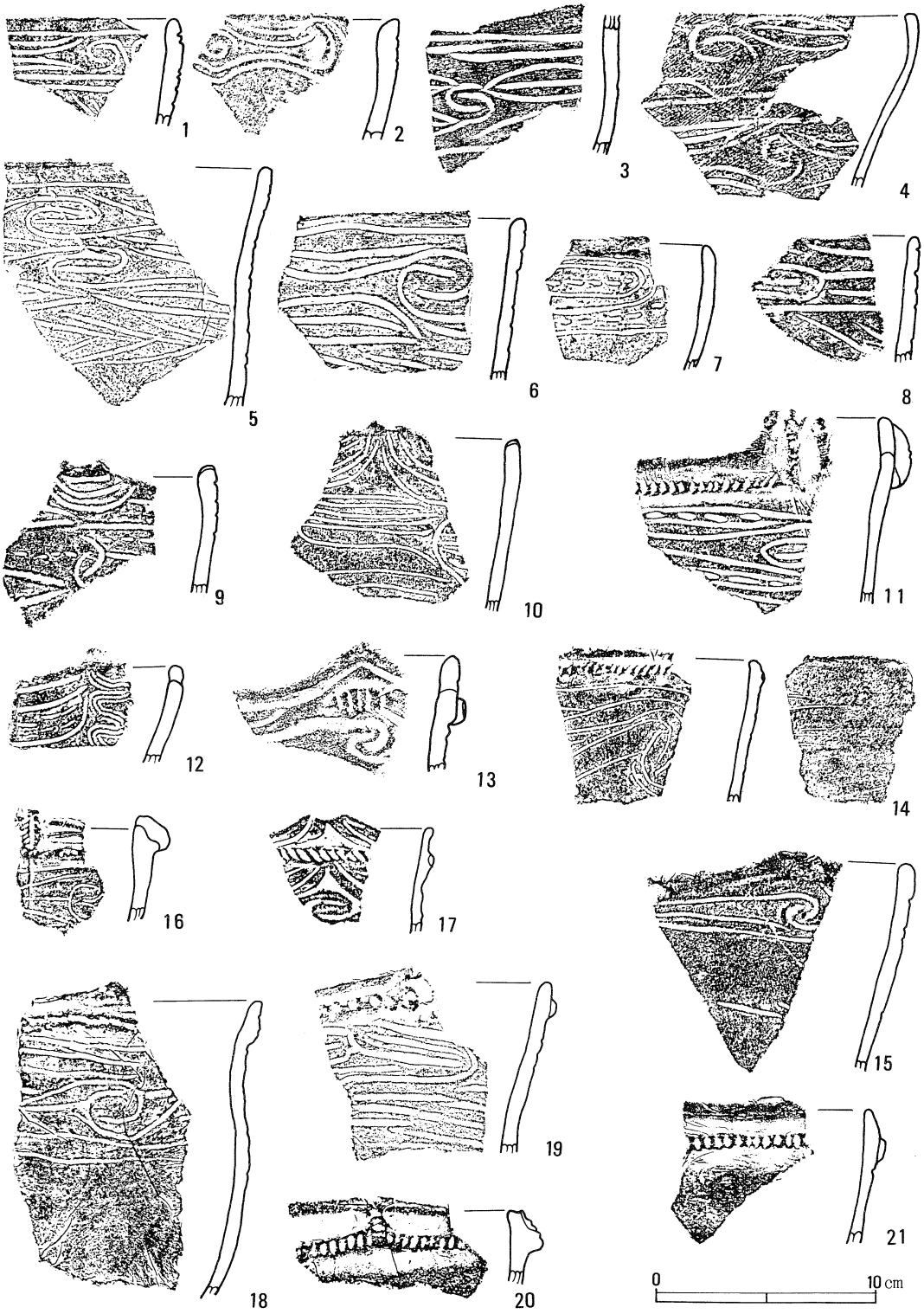
第7群土器　晩期後半の土器　1類　大洞C2式系土器　2類　浮線網状文系土器
3類　東海・西日本系土器
4類　条痕文土器　5類　無文土器

2　出土土器

第6群土器

1類（第1図）

清水天王山式土器およびその系列とみられるもの。ここに示したものは全て深鉢形土器であり、器形および文様にいくつかの種類がみられる。器形については内湾する平口縁（1、2、4、5、7）、斜直平口縁（6、8）、突起状に突出したもの（11）、波状口縁（9、10、12、13、15、16～19）などがある。波状口縁には緩やかで波頂部が小突起状になった9・10、やや大きく盛り上がる13や18・19などいくつかの種類がある。文様については①渦巻き、②入組文、③入組三叉文、④無文等を基本としている。



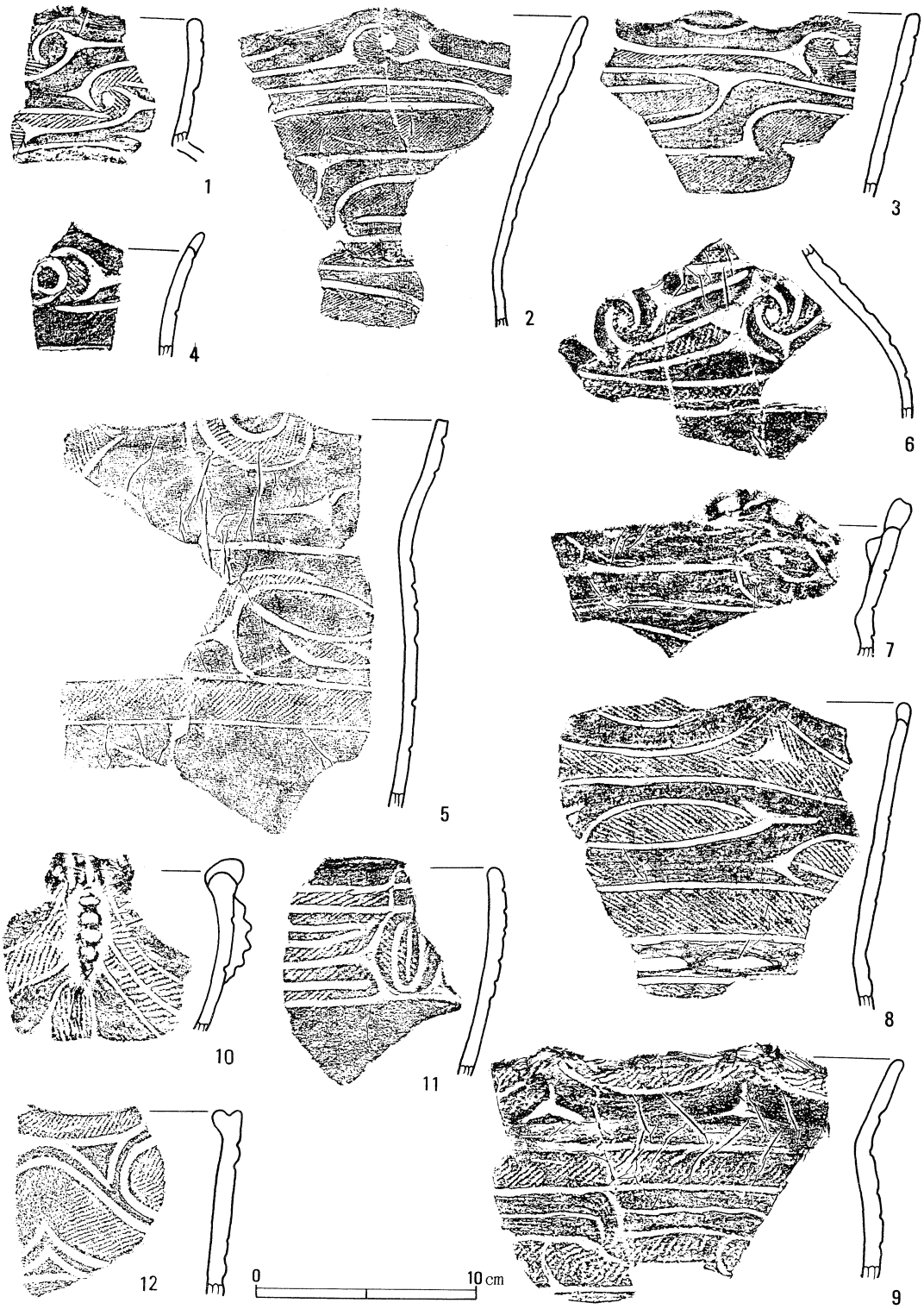
第1図　第6群土器①（⅓）

① 2がある。これは背中合わせの対弧文が連結したもので、その中に渦巻き文が見られるもの。
② 1・3～6・9，13～15があり、7、10～12もこの種であろう。この中にもいくつかヴァラエティがみられる。1、3、9は巴文状の入組、5、6、11、13、15は長い沈線の末端が入り組むものである。4にはその両者が認められる。また12は縦に波状の沈線が走るがこれは連続した巴文に共通するものであろう。これらの文様の種類は3種類の口縁形態の器形とは関係なく全てに共通する。沈線間に列点のつく9・11・12も特徴的で、特に11には有刻凸帯がある。これら入組文の下につく胴部文様については破片のためよくわからないが、1、5、6、15では羽状沈線が認められ、この時期の特徴がよく窺われる。しかし15の羽状沈線は相当形骸化しているようである。このように同じ入組文でも文様構成にいくつかの差異があることから、型式学上の時間差があるものと思われる。1は背中合わせの対弧文からみて2に近いものであり、5・6に比べて古い様相の見られるものである。さらに列点文などを加えると2～3段階という時期差が考えられる。また4では沈線による構成はこの型式の古い段階の特徴を表しているものの縄文が施されており別系統の影響を窺わせる。14の沈線の動きや15の文様構成と器形の関係等も典型からはやや離れている。14では内面に沈線が認められる。
③ 8・16～19が入組三叉文である。8は平口縁で胴部に羽状沈線があり、構成上は5や6に共通する。三叉文といっても17にみる三角形状とは異なり、5・6のような入り組み文から展開したような感じのものである。16も同様であるが、これは波状口縁で有刻凸帯を伴うもの。17は波頂部の下に三叉文がみられ、有刻凸帯を隔て末端の入り組んだ三叉文がある。18・19は構成上8に似るが三叉文はより曲線的で、特に18では羽状沈線は見られない。
④ 20・21のような有刻凸帯の土器がこの型式に伴うものであろう。

以上のような幾つかの特徴が認められるが、報告書でもふれたように渦巻き文のある2や入組文系では1などが古段階で（1段階）、5・6がこれに続くもの（2段階）と思われる。三叉文系では8が入組文系5・6と併行ないしやや新しいもので、18や19がこれに続くものであろう。17の文様構成は、奈良泰史氏が清水天王山式土器と安行3式との繋がりの中で指摘した[3]、東京都小豆沢遺跡出土の安行3a式土器を遡源としたものと考えられ、したがってこれより新しい段階のものである。こうしてみると、ここでは三叉文系として一括したが奈良氏がいうように入組文から展開したものと、安行系からのものとの2種類があることになろう。従って、19にみる入組三叉文は両者からの展開とみることができようか。

2類（第2図1～11・第3図1～6）

主に三叉文で飾られる土器で、壺形土器、深鉢形土器、皿形ないし浅鉢形土器がある。
〔壺形土器〕 第2図1と6がある。1は黒褐色を呈するよく磨かれた土器。6は明褐色の胎土のやや粗い土器。いずれも入組帯状文から展開した玉抱き三叉文であるが6は1に比べ後出であろう。
〔深鉢形土器〕 2～5・7～10。2・3は同一個体であろうか。低い突起がゆるく波状をなし、交互に波頂部下に玉抱き三叉文がみられるものであろう。4も波状口縁で玉抱き三叉文が



第2図　第6群土器 ②（⅓）

ある。5・8・9はいずれもゆるい波状口縁の土器で、口縁の波頂下を中心に三叉文がみられる。特に5と9とは短い口縁部を持つ類似した器形で頸部以下には入組帯状文の残存が認められる。8は口縁部文様帯の広いものでここに入組帯状文から変化したとみられる縄文帯がみられる。10・11は幅広の三叉文が向き合ったもので、11は玉抱き風。

〔皿形ないし浅鉢形土器〕　第3図1～6。1・2は玉抱き三叉文。3は入組帯状文が縦方向に展開したものであろう。4は皿形土器の底部。5はゆるい波状口縁をなしており深鉢形土器第2図9に共通する文様構成である。

以上の土器について、特に壺1、深鉢2～5・7～9、皿ないし浅鉢1～6は大洞B式系であり、特にB2式の段階が中心となろうか。深鉢10の器形からは安行系が窺われるが11の文様は北陸方面かもしれない。

3類（第3図8～16）

羊歯状文あるいはそれから展開した文様を持つ土器で、深鉢形土器（8・9・11・13)、鉢形土器（10・14)、浅鉢形土器（12・15)、注口土器（16）などがある。

深鉢は口縁部が「く」の字形に外反する器形で、8では羊歯状文から展開したとみられる中に縄文が充填されており、入組帯状文風になっている。鉢形のうち特に14は器壁が薄く丁寧なつくりの土器である。赤彩が残り、胴部には細かい縄文が施されている。

11・13・14・15の文様については羊歯状文から変化したものとみられ、時期的には9や10に比べて後出であり、4類に近いものであろう。

4類（第3図17～20、第4図1～7）

深鉢形土器（第3図17)、鉢形土器（第3図18・20)、皿ないし浅鉢形土器（第4図1～7）そして壺形土器とみられる第3図19などがある。

鉢形土器の18はよく磨かれた土器。深鉢17と同じく平行沈線と刻目が文様の主体となっている。ここでは皿形土器が多く、いわゆる雲形の磨消し縄文が顕著である。7は深めの器形。

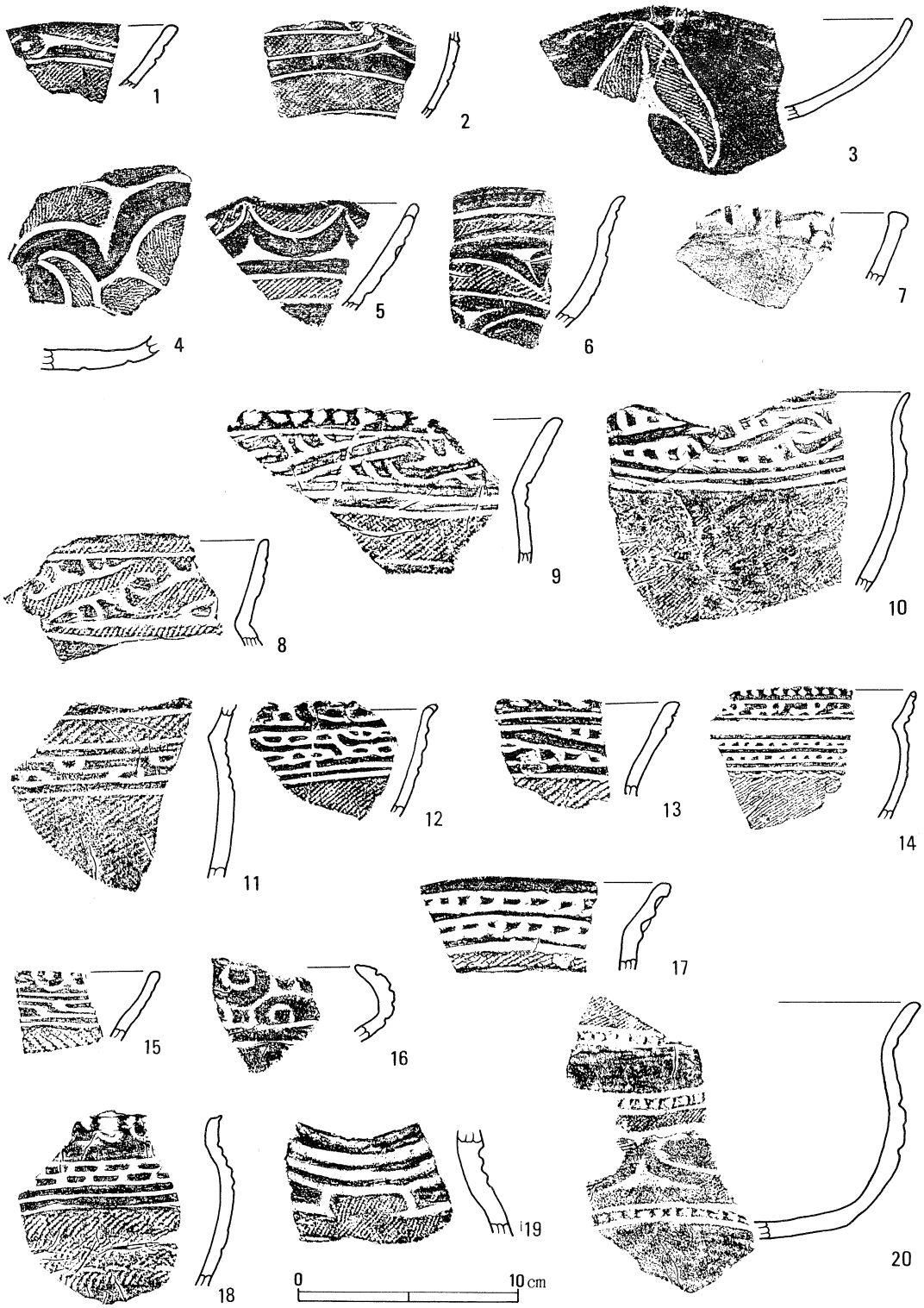
5類（第4図8～20、第5図、第7図1～4）

報告書では5類として安行3b・3c式を包括したことからいくつかの特徴を含んでいる。文様では沈線および列点のヴァラエティを中心とし、それに貼付文等が加わる。器形では壺形土器、深鉢形土器、皿ないし浅鉢形土器、台付土器等がある。まず文様から整理してみる。

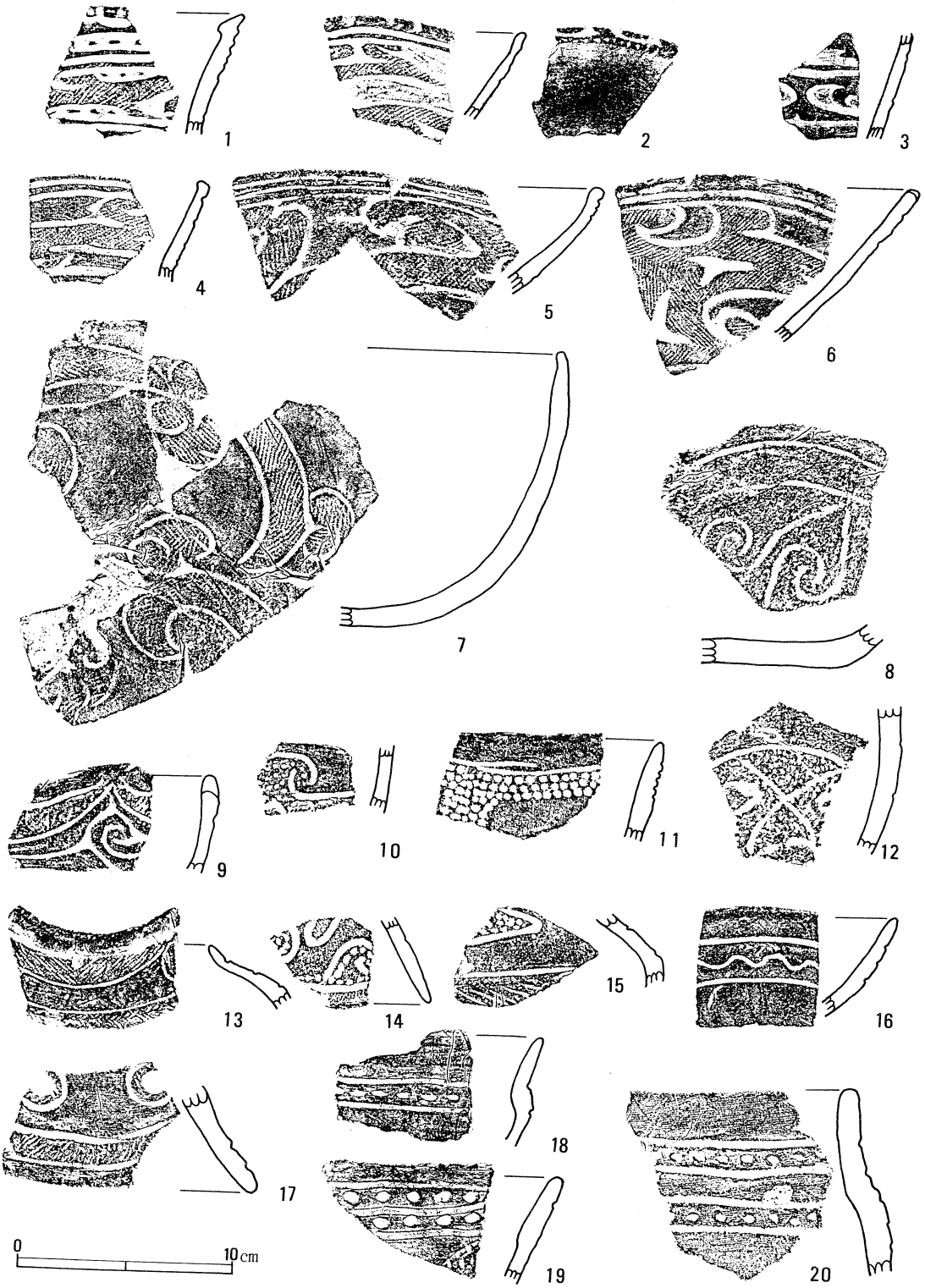
① 入組文

（a種）細い沈線による入組文（第4図8～10)。8は皿形土器の底部であろう。9は深鉢形土器で三叉文ともみられるもの。波頂部から下がる弧状沈線からすると1類土器に共通しようか。10は列点をともなう。

（b種）太い沈線による入組文（第5図15)。鉢形土器であろうか、波打つように沈線による入組文が流れている。



第3図　第6群土器 ③（⅓）



第4図　第6群土器 ④（⅓）

② 入組三叉文（第５図９・10）　列点を伴うが、流れるかのような太めの沈線による三叉文がみられる。９・10ともくびれの強い深鉢形土器ないし鉢形土器の上部破片である。12～14がこの種の土器の胴下半部なのであろう。

③ 沈線区画と列点文（第４図11・12・14・15・18～20）

（ａ種）平行沈線と列点文（第４図18～20）　口縁と平行に沈線が走り、その中に列点が連続する。いずれも深鉢形土器であるが、20は口縁がやや内傾する短頸で壷状の土器。器形の上では次のｂ種とした第５図７とも類似。

（ｂ種）口縁と平行だけでなく、縦や斜め方向、あるいは曲線的に沈線区画が走り、その中に列点が付けられる（第５図１～７）。２・４・６のように沈線区画の連結部に円形貼付文の見られるものもある。図示したものは深鉢形土器と思われ、「く」の字形に緩く外傾する短い口縁部を特徴とするが、６では内湾する。平口縁に、小突起が付いており、その単位にはゆるやかな１個（第５図２）・２個（同３）・３個（同１）などがある。全体に堅い焼きであるが特に７は胎土緻密で灰褐色を呈する。第５図12～14も部分的にはこの種に入るが、先にもふれたように、②種の入組三叉文（第５図９・10）土器の一部と見られるものである。

（ｃ種）曲線的な区画内を中心に円形に列点が密集する（第４図11・12・14・15）。小破片でよく分からないが11は10のような入組文かもしれない。14は蓋と思われ、北陸系とした７類に含まれるものであろう。

④ 沈線区画と波状文　第４図16。皿形土器であろう。

⑤ 沈線区画と縄文

（ａ種）平行沈線区画と縄文の土器。第４図13は壷形土器、17は台付土器であろう。

（ｂ種）縄文の充填された沈線区画と列点文の土器。第７図１～４。深鉢形土器で１と４とは短い「く」の字形の口縁で、③ａ・ｂ種に類似したものがある。２・３は内湾口縁。

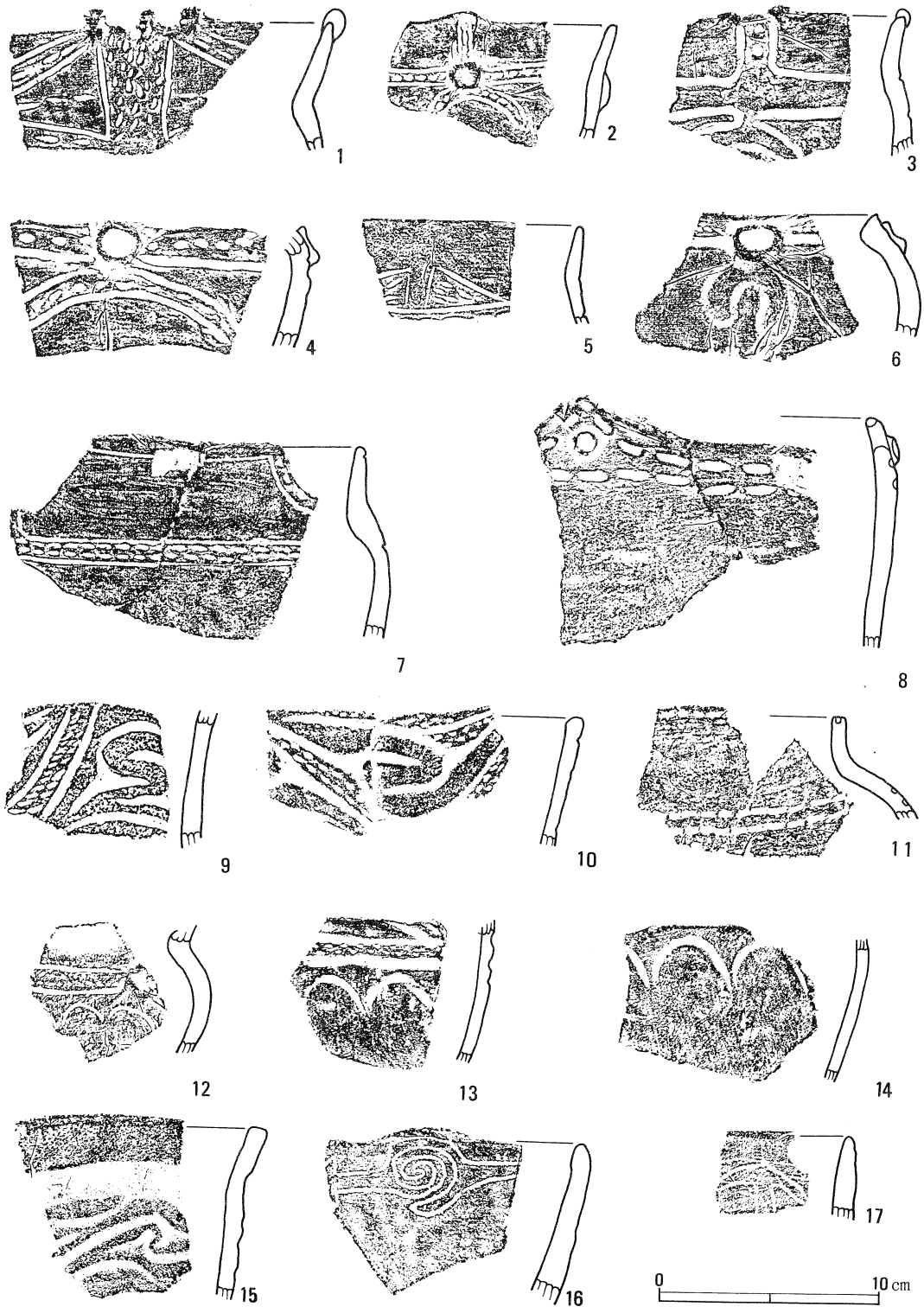
⑥ その他の沈線　第５図16・17は沈線による幾何学状の文様が施されている。16には渦巻き文があるが、このような文様は報告書第100図８・10の土偶背面、あるいは中空土偶（同72図）等にもみられる。これらの土偶の渦巻き文は入組文から発展したものと考えている[4]。17の矢印状の沈線は曲線的で、③ｂ種の３や６の曲線区画に類似している。16と17とは同じような矢印状文があることから同時期のものとみられる。

⑦ 列点文　第５図８と11とがある。列点はいずれも長方形状の刺突文。８は波状口縁の深鉢形土器で、波頂部下に③ｂ種と同様な円形貼付文がある。１１は壷形土器。

以上幾つかの特徴から分類できたが、①ａ・③ｃ・④・⑤ａ種の多くが安行３ｂ式系、①ｂ・②・③ｂ・⑥・⑦種等の多くがが安行３ｃ式系、③ａが安行３ｂ～３ｃ式系と考えられる。縄文の付く⑤ｂ種については別系統の要素が高いが、沈線と列点および器形から③ａないしｂ種に類似したものとしておく。

６類（第６図１～13）

鍵の手文の一群で入り組み方や本数にいくつかのヴァラエティがある。



第5図　第6群土器 ⑤（⅓）

① 入組まないもの　4・6があるが6は曲線的な単線、4は複線で内部に縄文が充填。12もこの種であろうか。4は壺形土器であるが、報告書18号住居出土の1803にも曲線的ではあるがこれに類した文様構成がみられる。

② 入組むもの　1や2を基本型とし、これに縦の短線が加われば11となる。曲線化すれば8となり、さらに10そして9へと雷文に近づく。また基本型の入組み方が崩れると3・5・7・13のような形になろう。13では「T」字状に連続しているがこのような文様になると北陸方面にも見られ、次の7類に含めてもよい。ただしこのような台付土器は本類のものであろう。5は鍵の手文帯が2段となっている。

これら鍵の手文については報告書でもふれたが右下がりが圧倒的に多い。器形では深鉢（1～3）、鉢（9～12）、皿（6・8）、壺（4・5・7）、台付土器（13）がある。

なお第7図6・7もこの類の深鉢形土器口縁部と思われる。頸部に条痕が認められる。

7類（第6図14～19）

入組文、弧線文などがある。14・17は入組文の深鉢形土器。14は頸が強くくびれ、胴の張る器形の土器であろう。入組文が重なり、列点や縄文もみられる。17は第6図1や3に類似した器形の深鉢形土器と思われ、器形の上では6類に共通するものであろう。入組文の中には縄文が充填され、上下に三叉文がみられる。16・18は弧線文の土器であるが特に18は連結し眼鏡状になっている。いずれも浅鉢ないし皿形土器であろう。15・19も鉢あるいは浅鉢形土器と思われ、やはり6類に共通する器形および文様構成である。曲線的な縄文帯や三叉文から7類としておいた。

以上は北陸方面の御経塚式・中屋式といった影響の強いものと思われる。なお第3図7についても口唇部に棒状の貼付文と縄文がみられる浅鉢形土器で、この方面からの流れが窺われる。

10類（第7図）

第7図には縄文を中心とした文様構成の土器を示しておいた。このうち1～4は5類、6・7は6類の項でふれておいたのでここでは省く。以下いくつかの種類がある。

① 口唇に刻目が連続し以下に縄文がみられるもの。8は磨消し縄文帯、11は地文縄文に平行沈線。9・10は平行沈線帯を隔て縄文が施される。9は4類に含まれるものかもしれない。以上は深鉢形土器であろう。

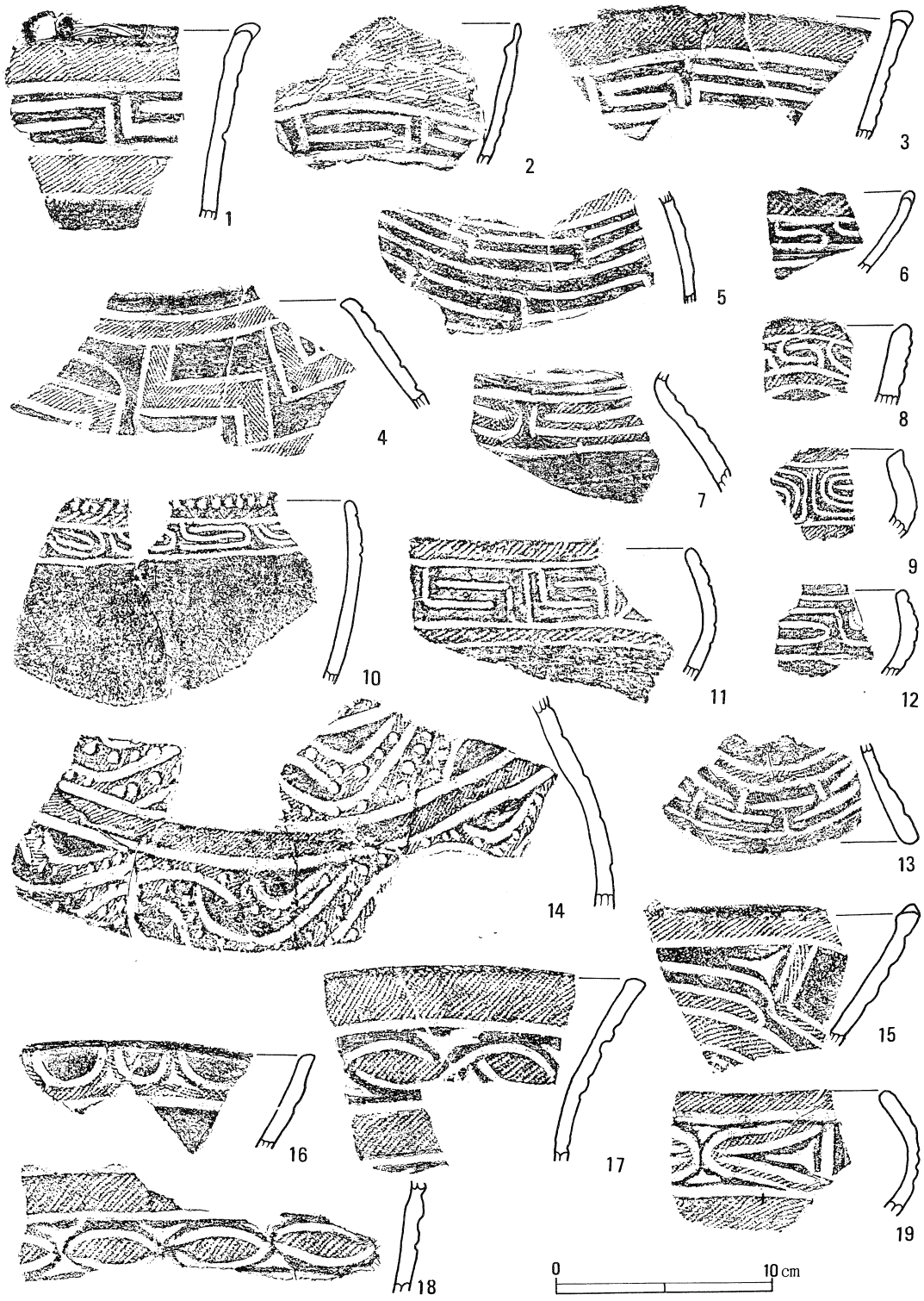
② 口縁に縄文のみられるもの。12～15。12・14は肥厚した部分に縄文が付けられる。
いずれも浅鉢ないし皿形土器であろう。

③ 結節縄文で16～20。深鉢形土器であるが17は壺形かもしれない。

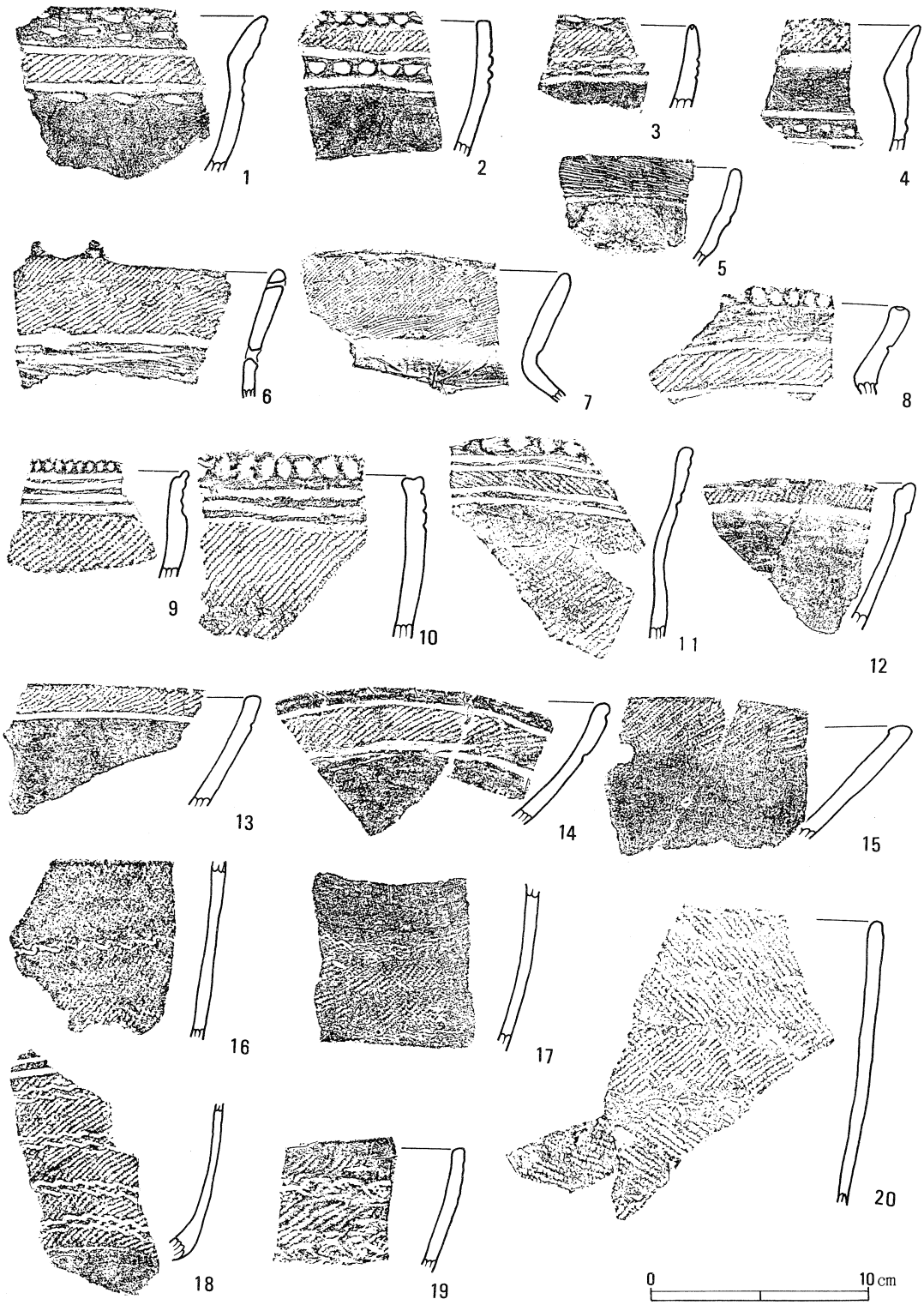
④ 撚糸と思われるもので、5がある。

第7群土器

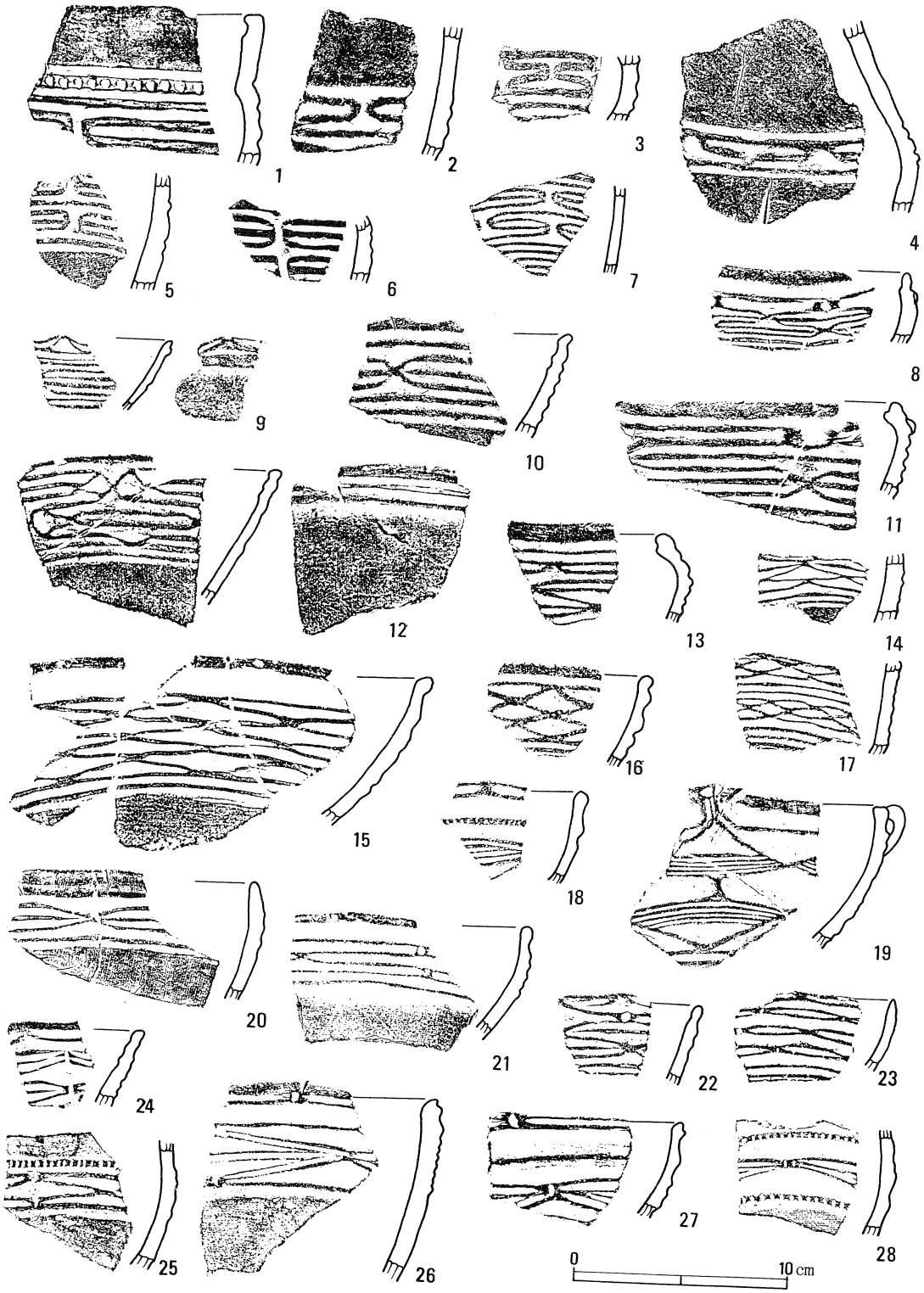
1類（第8図1～4）　1は粗大な工字文[5]といわれるものに共通しようか。なお2・3は工



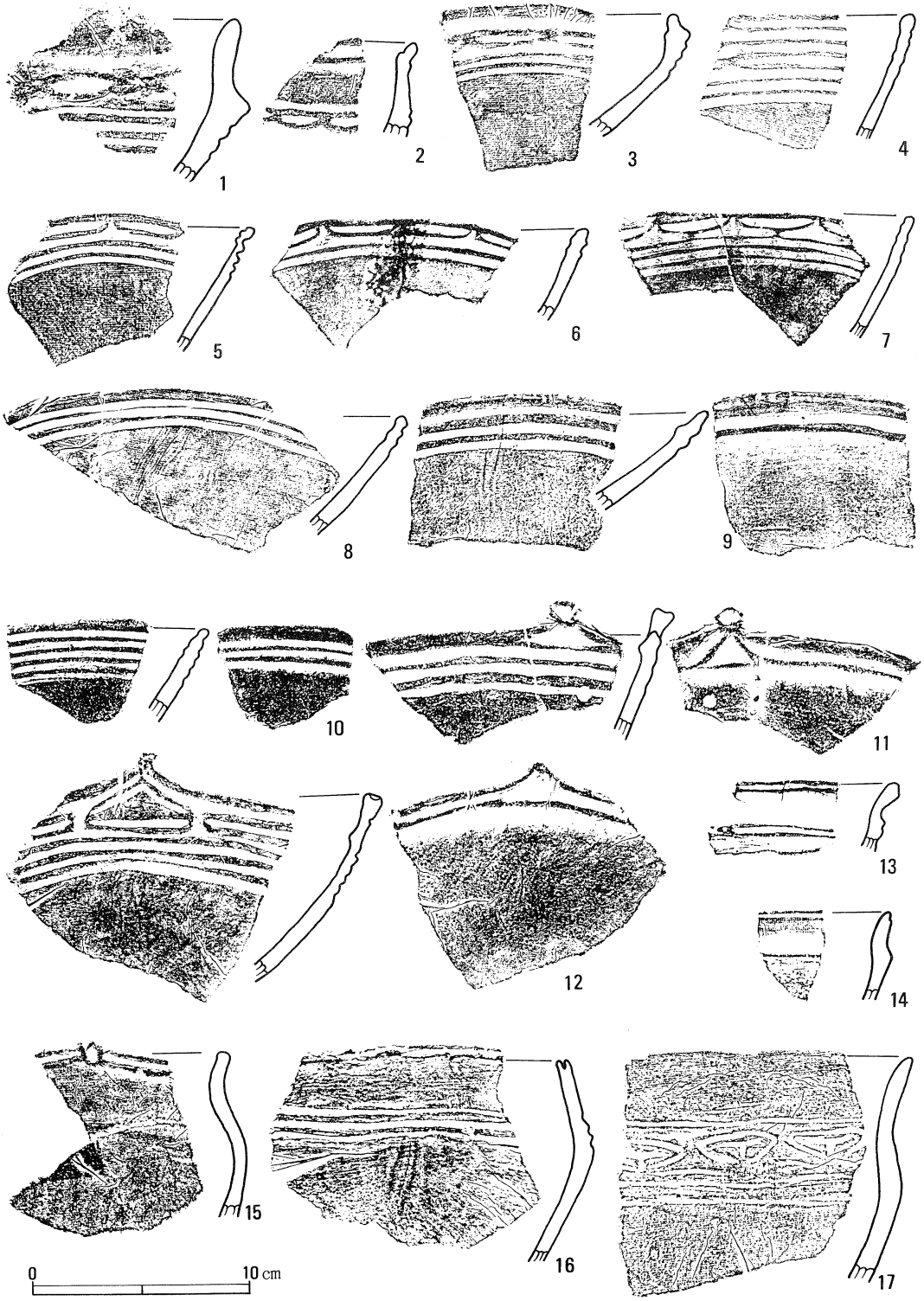
第6図　第6群土器 ⑥（⅓）



第7図　第6群土器 ⑦（⅓）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
10cm

第8図　第7群土器 ①（⅓）



第9図　第7群土器 ②（⅓）

字文の土器でより後出かもしれない。4も佐野遺跡の工字文に類似したものである。壺形土器であろう。

2類（第8図5～28、17を除く第9図、第10図1～12）

浮線文系の土器を一括しており、文様は浮線網状文を始めとして削り出し手法による平行隆線や同様の効果を導き出す沈線などいわゆる平行浮線の一群も含んでいる。器種でも深鉢、浅鉢（皿）形、壺、甕などがある。深鉢形土器では3類・4類と共通するものもある。報告書では文様によりａ～ｆ種に分類した。

（ａ）工字文の形態を保つ土器で報告書2号配石H0202などをこの種とした。今回は特に図示しなかったが、あるいは1類にいれておいた第8図2・3が該当するかもしれない。

（ｂ）流水文風の変形工字文であるが類例は少なかった。小破片で詳細不明ながらここでは第8図5～7をあげておく。

（ｃ）網目状の浮線を文様の中心とした土器（第8図8～28）。ここに図示したものはほとんどが浅鉢形土器であろう。報告書でもふれたがこの種の文様のついた深鉢形土器は非常に少ないものと思われる。第10図2・4・5に一部網目状とつながる文様が見られるが浅鉢ほどの装飾性はない。いずれも肩部に施文されているが5は浅鉢の可能性もある。

広義の氷Ｉ式土器の主体的な文様であるが、特に浅鉢については、網状文の様相には

① やや太い浮線による1ないし2段のもの（10・11）、

② 数段からなる本来的な網目のもの（15・16）、

③ 細目の浮線による直線的な網目で、交点に刺突状の文様のつけられるもの（21～28）、

などの種類がみられ、時期差を考える必要があろう。

（ｄ）削り出しによる平行隆線、ないし削りとることにより沈線が表現されている土器。第9図4～12は浅鉢ないし皿形土器。浅鉢でも比較的器高のないものが多い。特に図示していないものもあるが、内面にも同様の文様がつけられている。細部の文様構成から3種がある。

① 4～7は口縁部に変形工字文に類する浮線状の文様が見られるもの。特に7は顕著である。

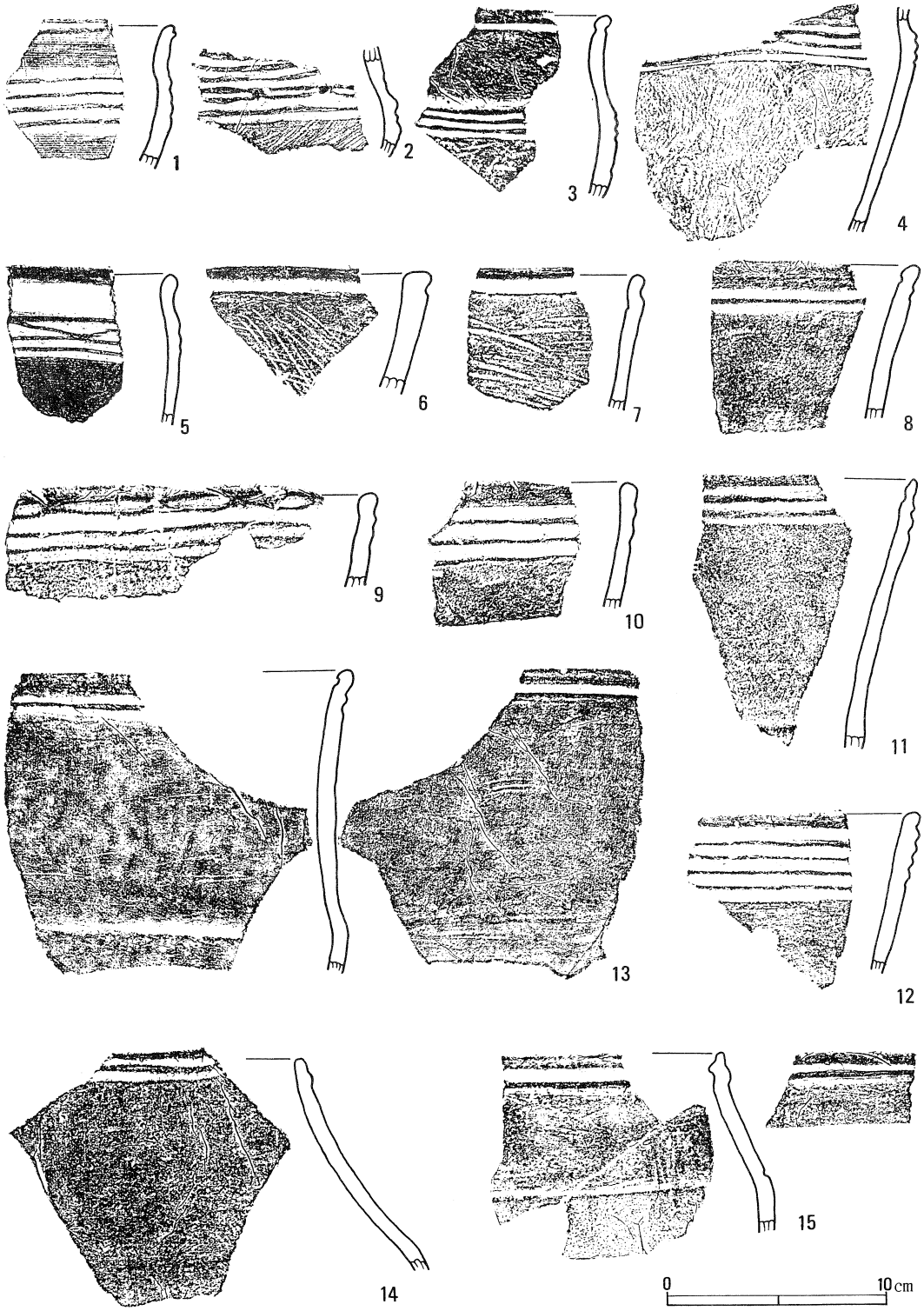
② 8～10は平行隆線（沈線）のもの。9の内面には削り出し隆線と呼ぶにふさわしい線が1条めぐっている。16は鉢形土器と思われるもので、口縁にも沈線がある。他とはやや異質であり別種とすべきであろう。

③ 11と12には小突起がみられ、その部分は三角形の文様をなしている。

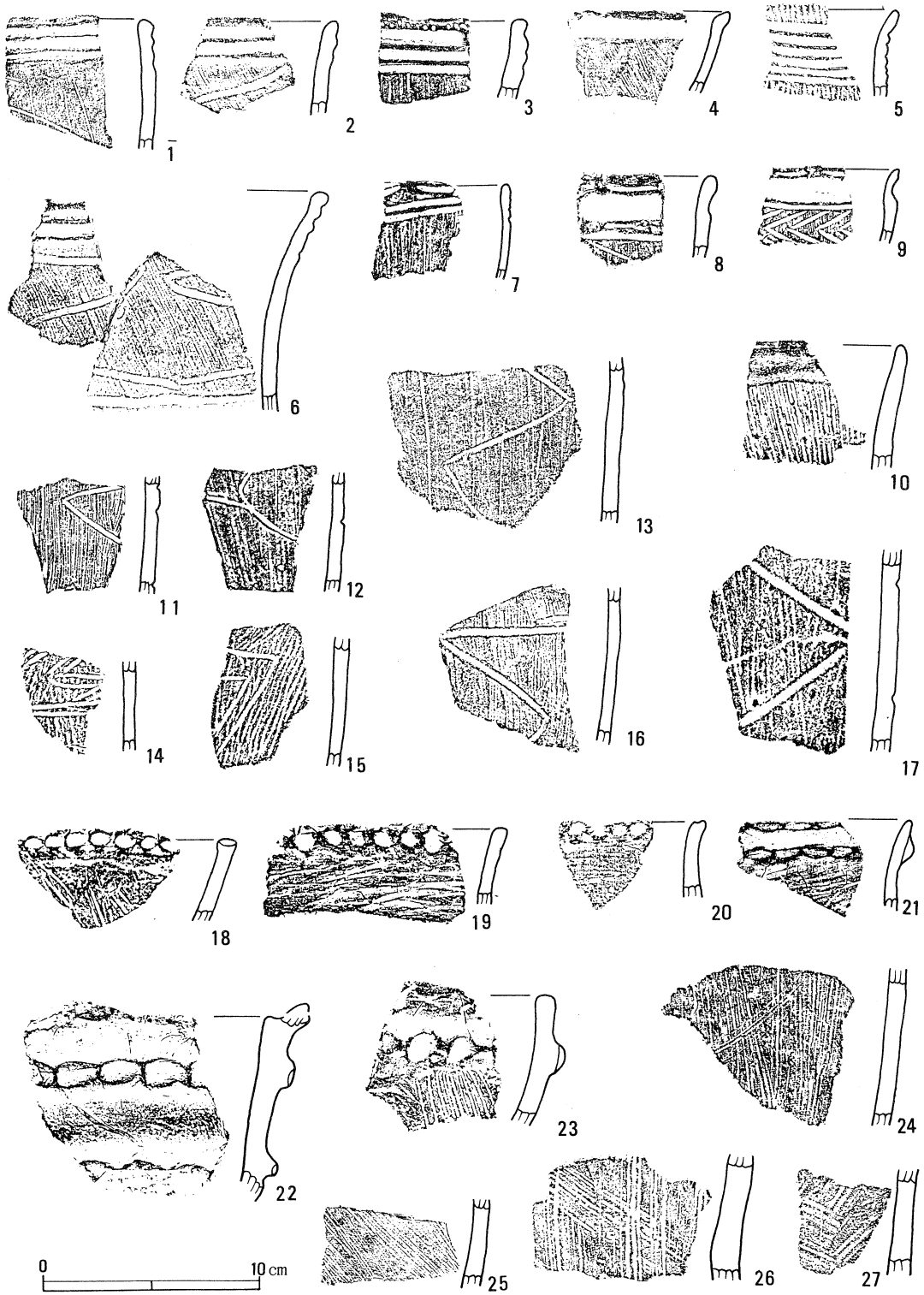
第10図1～12は深鉢形土器。2・4・5はさきにふれたように（ｃ）種の網状文に共通する。ここで全形のわかるものはないが、報告書では①肩部に稜がつき口縁が外反するもの、②胴部の稜は不明ながら口縁が外反するもの、③口縁が内湾するもの、等があった。1～8・11・12などが①あるいは②、10が③であろうか。体部に縄文（4）、条痕ないし擦痕（2・6・7）の残るものもある。

（ｅ）基本的にはｄ種と同じであるが眼鏡状隆帯に類する文様がめぐるもの。第9図1～3がある。これらは浅鉢あるいは鉢状の器形。

（ｆ）平行する浮線文の幅が狭い、ないし隆線内に沈線が加えられるもの。第9図13～15。



第10図　第７群土器 ③（⅓）



第11図　第７群土器 ④（⅓）

浅鉢ないし鉢形土器であろう。

以上浮線文系としたが、装飾性の強い網状文は浅鉢に多く、深鉢形土器では平行隆線や沈線のものが多い。これら器種の組合わせや時期差については詳細不明である。報告書では17号住居址や2号配石の一括をこの1群の中でとらえたが、両者の間には時期差があろうし、またa～dとしたヴァラエティの組合わせも明確ではなく今後の問題であるが、a・b・d（浅鉢①③）・eに古い様相、f種に新しい様相が窺がわれる。またd種（浅鉢②や深鉢の多く）は時間幅のあるものであろう。またc種についても時間幅があるものと思われるが、③種はf種に共通するものと思われ、新しい様相と言えよう。

3類　東海西部・西日本系としたものであるが、報告書では特に2号配石出土土器のうち馬見塚F地点出土資料を念頭に分類したものである。壷・浅鉢・深鉢などがあるが特に深鉢形土器においては2類d種との区別が難しく問題が残る。ここでは深鉢形土器とした第10図13～15がある。内傾しながら反り気味に立ち上がる、甕形とでもいうべき器形である。13は2号配石遺構のH 0224に類似する。14・15は内傾が強い。いずれも口縁内外には2類d種に共通する沈線あるいは隆線がめぐる。

4類　条痕文土器（第11図）　縦方向を中心に細い条痕が走り、口縁部に沈線や隆線等の浮線文系の文様帯のある一群（a）と口縁部に押圧や突帯のある一群（b）とを包括した。

（a）1～9がある。1・2・6などにみるように胴部に稲妻状ないし波状の沈線が縦方向につけられるのが基本であろう。したがって、11～17もこの種としてよいと思われる。ただし報告書の17号住居出土（第31図15）やグリッド出土（第93図54）にみるように口縁部押圧文や刻目文の深鉢にも見られることから、この種の文様は時間幅が広いものであろう。また、口縁部文様帯からみてもいくつかの種類がある。

① 平行沈線ないし隆線　1～6

② 平行する隆線内に沈線が加えられるもの　8・9があり、7もこの種としておく。

③ 無文帯　10

（b）18～23がある。18～20は口唇部を中心に円形の押圧が連続する。21～23は突帯のめぐるもの。おそらく深鉢あるいは甕形土器を中心に、22などは広口の壷かもしれない。23は内湾する器形。

24～27は胴部破片であるが24はa種であろうか。27は羽状になっており後出のものかもしれない。

以上4類とした中にも時期差が認められる。まず（a）種について、①は2類d種、②は2類f種、に対応するものであろう。また（b）種については東海西部方面との関係の強い土器であり、報告書17号住居にみる樫王式に共通するものであろう。

3　まとめと課題

（1）第6群土器について

晩期前半の土器を包括したことから、この群には複数の系統や時期を異にする土器が含まれている。とりわけ1類の清水天王山式を中心としながらも2～4類の東北系の土器が目立ち、同時に6類の種類が多い傾向にある。これらの併行関係や時期差については各方面の資料の検討や山梨を中心とした資料集成も含め今後の問題であるが、金生遺跡出土資料について大略まとめてみたのが第12図である。ここでは遺構内の共伴関係は考慮していないものもあり、土器の個々の特徴を重視している。今回の報告資料に限らず本報告書記載の資料も用いてある。1類（清水天王山式）については報告書でａ類ｂ類とした平口縁の深鉢形土器の展開を示したが、6は報告書でⅢ期としたものである。入組文の展開からは5より後出と思われるが、文様構成や器形からは7・8より5に類するものでありここではⅡ期としておいた。2を除き報告書の資料。

大洞系の資料は比較的まとまっており、深鉢・壺・浅鉢・注口土器など器種もそろっている。Ⅰ期では大洞Ｂ式の比較的新しい段階が中心であり、Ⅱ期でも大洞ＢＣ式の新しい段階が多いようである。23の壺と31の浅鉢は同じ5号配石の接近したところから出土したもので、使用は同時期とみられるものであるが型式的には区分したものである。東北系が比較的多いこと、特に大洞Ｂ式が多いことについては、清水天王山式土器の入組文系の形成と展開を考える上で重要である。もちろんこれについては後期後葉からの資料に注意する必要があり、清水天王山式土偶の形成についてはこの方面との関連がうかがわれている[6]。実測図の土器および28～30は報告書からのもの。

安行3式系については特に前半期では顕著な資料は少ない。33・34については玉抱三叉文からの展開である。37についてはⅡ～Ⅲ期としておいた。Ⅲ期では38～40のような短頸が特徴であり、41～43は開く器形の深鉢形土器であろう。33・39は報告書から。

7類は北陸系と思われるものであるが、Ⅰ期とした44・46は御経塚Ⅲ式とされる一群に類例がみられる[7]。47は入組文であるが文様構成は45に類似しており、これからのつながりがうかがわれる土器である。同時に器形や文様構成は56や65などの鍵の手文の土器に共通し、時期的にも関連するものと思われる。48～52は中屋式に類似するものであるが、Ⅱ期・Ⅲ期の区分は現状ではよくわからない。48～50・52が報告書から引用。

最後に佐野Ⅰ式系とされる一群をあげておいた。Ⅰ期には遡らないと思われるが、Ⅱ期とⅢ期との区分はわからない。ただし鍵の手文には幾つかのバラエティがあり時期差があるものと思われる。前項でみたように①入組まないもの・曲線的（53・54）・直線的（55・56）、②入組むもの・基本形（59・60）、複線（61）、短線付加（62・63）、③雷文状（64～67）、などがみられる。さらに57・58は北陸的でもある。基本形は右下がりの鍵の手が圧倒的に多く、60のような左下がりは少ない。以上のような種類があることから当然時間差はあるものとみられる。63はⅡ期とした清水天王山式の4と共伴する。この一群の土器は東北後期に始まる入り組み帯縄文の流れの中で形成されたものと思われるが、後の羊歯状文の段階なのかあるいはその直前な

のかは不明である。北陸方面とも合わせ今後の課題でもある。実測図および59〜61は報告書からの引用。

（2）第7群土器について

晩期後半の土器については2類とした浮線文系が最も多くその中での細分が課題となる。加えてその前後からの展開にも問題が多い。これらを一覧としたものが第13図である。この時期は第12図の晩期前半から継続するもので、土器については第12図と同様報告書の図からも引用してある（実測図および22・40・57・62）。

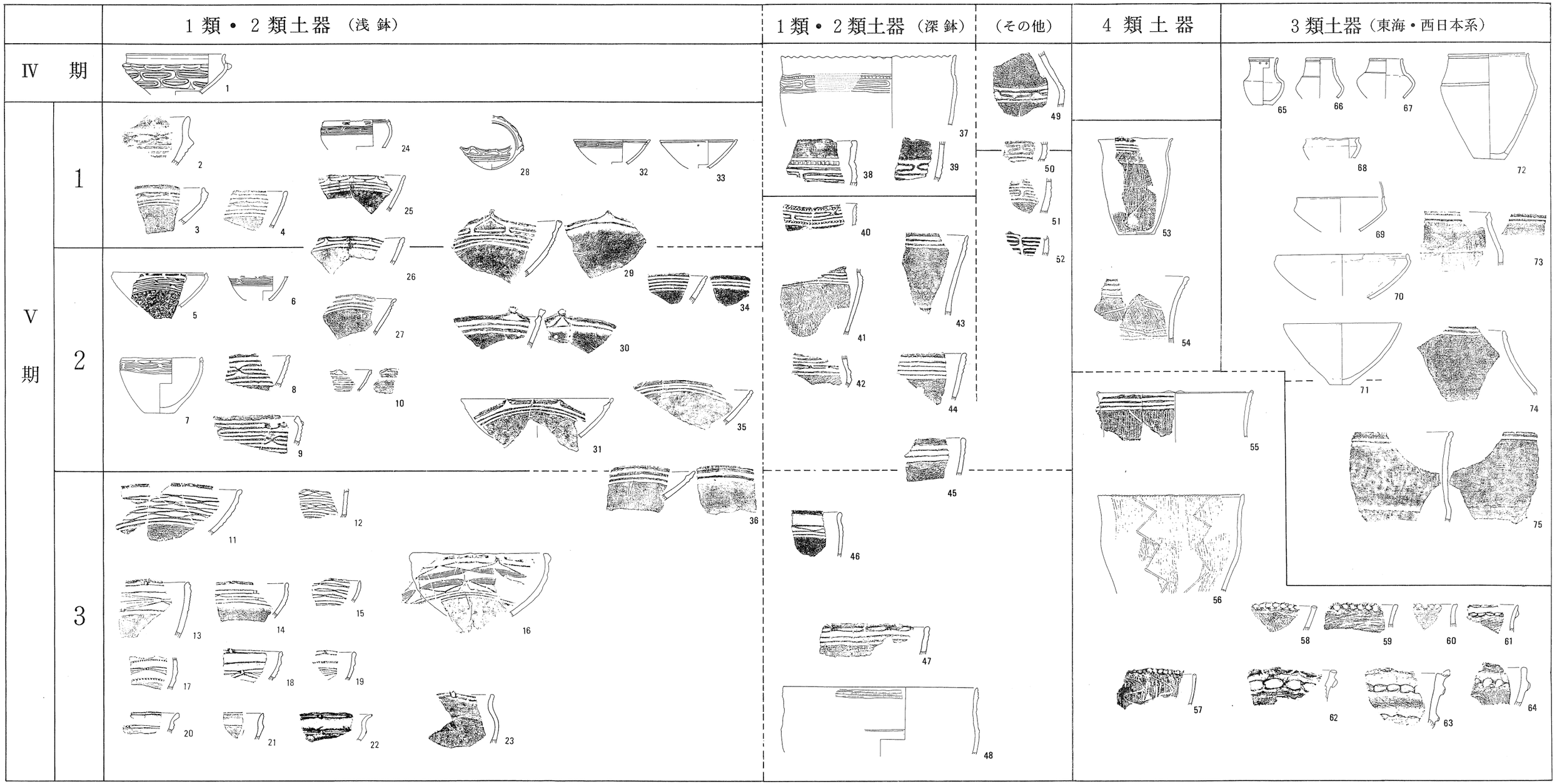
まず第12図から続くⅣ期は大洞C2式に併行する段階のもので、今回の報告ではこの類は少ないが、報告書から引用した浅鉢形土器1、同じく深鉢形土器37、および38・39などがある。1についてはこの時期のうちの新しい段階のものと見られるものである。さらに東海・西日本系とした3類のうち、65〜67の小型壺、68〜71の浅鉢形土器、72の深鉢形土器の多くがこの段階に含まれるものであろう。なお、これら2号配石出土一群の土器については上限をC2段階、下限を浮線文の段階としてきた[8]が、最近では弥生0－1期とした中山誠二氏[9]やC2式Ⅴ期とした鈴木加津子氏[10]の分析がある。この時期における東西文化の在り方が土器様相に表れていることになり重要である。

Ⅴ期については2類とした浮線文系の土器を中心に展開する。報告書では広義の氷式の範疇としその中での新旧を考え、特に17号住居につては新段階としておいたものである。その後の中沢道彦氏の分析[11]を参考にすると特にc種とした網状文の展開を中心に一層細分が可能となる。前項で分類したとおりであるが、特に浅鉢形土器を中心に第13図にまとめた。ここではⅤ－1期からⅤ－3期という展開が見受けられる。まずⅣ期の浅鉢1を母体として2〜4→5〜10→11〜23という流れである。この中でも57や62と同じ17号住居出土の22のような狭い平行浮線が特に新しい段階のものであろう。また工字文の24からは25を経て26・27という展開が考えられる。24・25をⅤ－1期、26を2期としておいた。さらに眼鏡状隆帯に似る文様を口縁部に持つ28を1期とし、29・30→31となろうか。32・33は2号配石の一群をなす土器で、24や53と同じ時期とみて1期とした。この系統は最後の段階まで続くものと思われ、出土量も比較的多い。

深鉢形土器については浅鉢ほどの文様の多様性はみられない。Ⅳ期に37・38があるが、この系統の文様とした40がある。ただしⅤ期で主体となるのは43〜48にみる平行浮線ないし沈線の土器である。41・42では肩の部分に浅鉢の3・4に共通する浮線文がある。これら40〜42を古段階、22と同じ17号住居出土の48を新段階とすることができようか。4類では深鉢で53から57という流れがうかがわれる。53は口縁部に平行浮線があり、胴部には細い条線がはしるもので2類とすべきものであるが57に至る流れからこの類に位置づけた。時期的には24・33と同じ2号配石の新しい部分でありⅤ－1期としたい。54では頸部の無文帯が殆どなくなり、稲妻状沈線も太くなる。さらに55では口縁部の外反が少なくなり、56ではずんぐりした器形となる。口縁部にはもはや平行浮線はなくなり口唇部に刻みが連続する。この56や57の段階が17号住居と同じ新しい段階と言えよう。

	1類a．b種土器（清水天王山式系）	2類～4類土器（大洞系）	2類・5類土器（安行系・他）	7類土器（北陸系）	6類土器（鍵の手文系）
Ⅰ期	1 2	9 10 13 16		44 45 46	
Ⅱ期	3 4 5 6	11 12 14 17 18 20 22 24 25 26 28 31	33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43	47 48 49 50 51 52	53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67
Ⅲ期	7 8	15 19 21 23 27 29 30 32			

第12図　第6群土器


1類・2類土器（浅鉢）
1類・2類土器（深鉢）
（その他）
4類土器
3類土器（東海・西日本系）
Ⅳ期
Ⅴ期
1
2
3
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75

第13図　第７群土器

3類ではすでに見たように馬見塚F地点[12]に類例が多く、これまでと同様にⅣ期に位置付けておくが、一部はV－1期に入るかもしれない。2期以降についてはよくわからないが73～75のような資料もあり継続する可能性がある。ただし2類の深鉢形土器との区別もあり、今後の資料に期待したい。

以上金生遺跡出土の晩期土器について、報告書ではふれることのできなかった遺構外出土の破片資料の報告を行うとともに、金生遺跡内での新旧および併行関係をおおまかながら考えてみた。各方面との接触の中で、これらの土器が形成され展開していくことがある程度とらえられたが、その接触の強弱は時期的にも異なっていたものであろうしその波の伝わり方や時期差をとらえることができれば、山梨における晩期文化もより鮮明なものになってくるであろう。東西文化の動きの一端がこの山梨にも波及していたことがうかがわれ、今後県内資料の増加を期待するとともに他地域の資料との比較検討をおこなう必要がある。

最後に、特に前半期の東北系を中心とした土器については林謙作先生、浮線文系の土器については中山誠二氏から御教示をいただいた。記して謝意を表する。

註

1）山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第41集　『金生遺跡』（縄文時代編）　山梨県教育委員会　1989

2）新津　健「金生遺跡出土の土器1（後期）」『研究紀要』8　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター　1992

3）奈良泰史「清水天王山式土器形成期の様相」『山梨考古学論集』Ⅱ　1989

4）新津　健「山梨における後晩期土偶」『埼玉考古』30　1993

5）樋口昇一編『佐野』長野県考古学会研究報告書3　長野県考古学会　1967

6）註4に同じ

7）高堀勝喜『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会　1983

8）註1および新津　健「金生遺跡発見の中空土偶と2号配石」『研究紀要』1　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター　1983

9）中山誠二「甲斐弥生土器編年の現状と課題」『研究紀要』9　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター　1993

10）鈴木加津子「安行式文化の終焉（四・完結編）」『古代』95　1993

11）中沢道彦「中部高地の動向」『東日本における稲作の受容』第1分冊　1991

12）澄田正一ほか「馬見塚遺跡」新編『一宮市史』資料編一　1970

山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター　研究紀要10　1994年　pp73～78

山梨県東八代郡中道町金沢出土の土師器瓶について

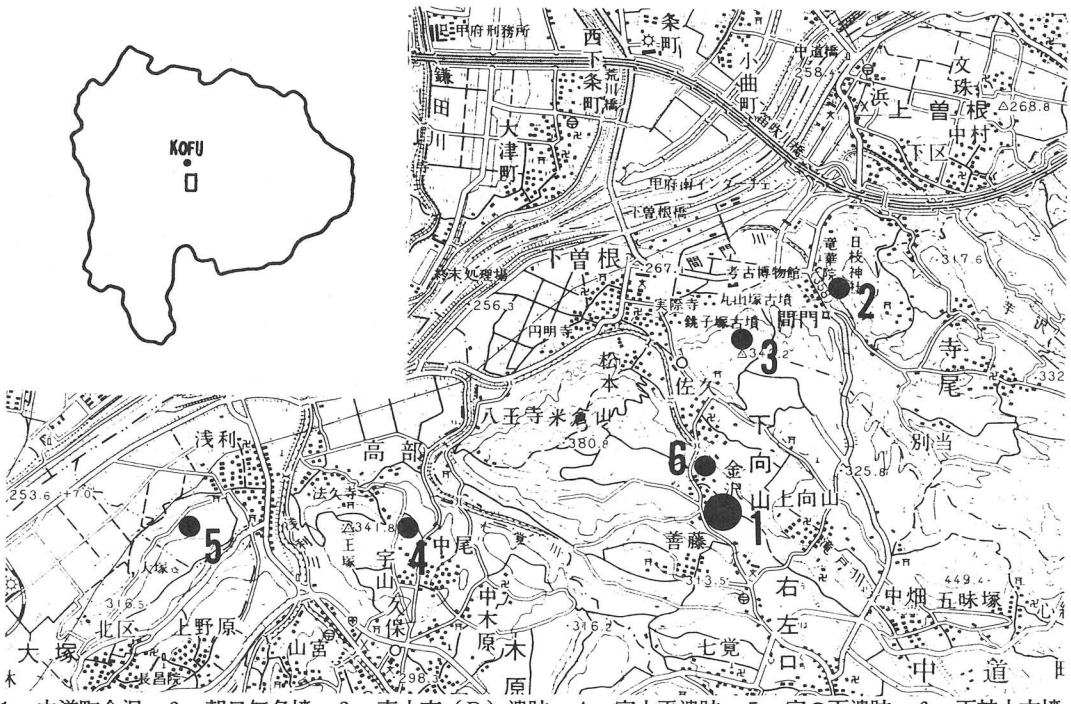
高　橋　みゆき

1　はじめに
2　研究略史
3　遺物と瓶出土遺跡
4　考察
5　おわりに

1　はじめに

山梨県では、古墳時代中期に属する遺跡の調査例が少なく、その資料の希薄さから他の時代に比べ研究が滞っているのが現状である。実際、遺物の集成を行うとき、本県は長い間空白地帯となっていた。しかし、最近の発掘調査で資料が増加しており、各方面での整理作業も進んでいる。これらが報告されれば、空白だった県内の古墳時代中期の様相が見えはじめることであろう。

今回紹介する資料は、東八代郡中道町金沢で発見された古墳時代の土師器小型壺と土師器瓶である。この２つの土器は、現在では石材置場となっている小林慶悟氏の所有地から、土を搬



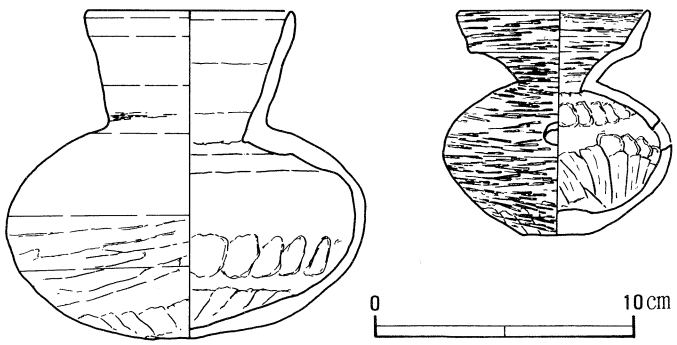
1．中道町金沢　2．朝日無名墳　3．東山南（B）遺跡　4．宇山平遺跡　5．宮の下遺跡　6．天神山古墳

第１図　遺物出土地点位置図

出する際に発見されたものである。残念ながら、これらの土器以外には遺物は残っておらず、遺構の存在も明らかではない。しかし、発見されたのが比較的新しく、出土地点もはっきりしているため貴重な資料といえる。幸い、単独の出土ではなく2個体が共伴していることから、その所属する器種の中で、各々を検討することによって時期を明らかにすることができる。そこで、今回は、須恵器の編年をもとに、県内の甕についてのみ資料の集成を行い、検討してみようと思う。

2　研究略史

山梨県における古墳時代研究は、古墳の石室やそこから発見された遺物を紹介することを中心に早くから行われている。古墳時代と名が示すとおり、この時代は古墳という最大の構築物が注目され、その石室中には豊富な副葬品が納められていたこともあって研究者以外にもその存在は広く知られていた。しかし、このために盗掘や開墾にあい多くの古墳がその姿を消していったのである。このような状況のなか、県内の古墳時代土器研究は始まったのである。当初の研究では、学術雑誌や市町村誌に出土地や、その遺物の観察を記載することが多く、それ以上の検討がなされる事は少なかった。もちろん、発掘して得られる一括資料に恵まれなかったことにも一因はあるが、少ない資料で遺物の集成や編年を試みることはとても困難なものであった。しかし、1970年代以降から中央自動車道の開発に伴った大規模な発掘調査が行われ、遺構に伴う一括資料を得ることができた。これらの遺物の整理・報告を通して、今まで試みられなかった土器の編年作業が注目され始め、徐々にその成果をあげてきた。県内の古墳時代土器研究における本格的な編年案は、末木・坂本両氏によって行われ[1]、県内出土の弥生時代後半から古墳時代全般にかけて各遺跡単位で組まれた。金沢出土土器が属する5世紀代の資料として、この中では、塩山市西田、御坂町二之宮・姥塚の3遺跡をとりあげている。この編年が組まれた時には、二之宮・姥塚遺跡の整理が途中であり、時期の細分も不完全なものであったと思われるが、県内の遺跡を総括している点で、現在でも基礎資料として使われている。この後、二之宮[2]・姥塚遺跡[3]の報告書が相次いで刊行され、時期の細分化が進み、それに合わせた調査報告が数多く出されている。しかし、各遺跡ごとには遺物の検討を行っているものの、全体を通した編年までには至っていない。本県においては、古墳の位置づけや、古墳出現期の様相、更には奈良・平安時代の土器様相が盛んに研究されている状況のなか、古墳時代中期から後期にかけての限られた部分では研究が滞っている。このため、この時期の遺物の集成や遺跡の分布状態を



第2図　出土遺物実測図

把握することは、空白部分を補って古墳時代の様相を明確にさせるためにも、急務であるとおもわれる。

3　遺物と瓶出土遺跡

今回報告する資料は、古墳時代中期後半に位置づけられる土師器小型壺と瓶である。ここでは、遺物の観察をおこない、県内で瓶を出土している遺跡について少し触れておこうと思う。

土師器瓶は、口頸 7.4cm、口頸基部径 3.1cm、体部最大径 8.8cm、器高 8.9cm。口頸部は細い基部から外反して立ち上がり、中段で屈折して稜をもつ。口縁端部はやや丸みを欠く。体部の最大径は体部の1／2以上にあり、外面外上から斜めに円形の穿孔１つ。成形は、体部下半を丁寧に全面ヘラ削りした後、皮などで全面になでを施している。内面に指頭圧痕がみられることから、粘土紐積み上げ成形とおもわれる。調整は、成形後に横方向の細い磨きを全面に施しており、焼成も良い。底部はヘラ削りでやや平底を呈す。

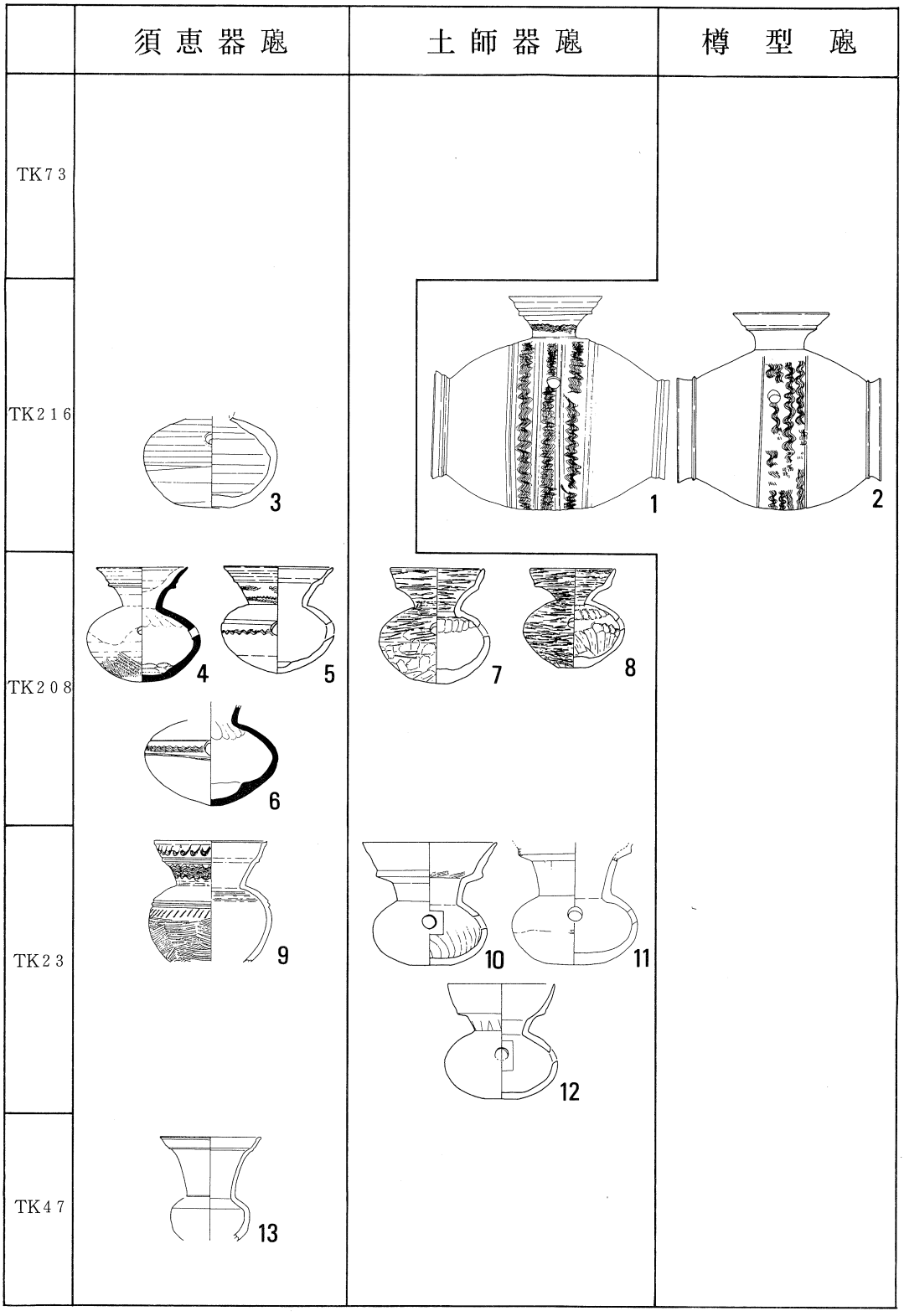
小型壺は、口径 8.2cm、体部最大径14.1cm、器高12.6cmを測る。頸部から直に立ち上がる口縁をもつ。体部の最大径は体部の1／2前後にある。口径に対して体部がかなりはり、つぶれた偏平な楕円形を呈す。口頸基部から口縁端部までが比較的短い。調整は瓶と似ており、ヘラ削りで成形したあと全面をナデ調整し、最後に横方向の磨きを行っている。

この２つの土器は、県内では出土例が少なく、特に小型壺は、一宮町大原遺跡[4]の祭祀遺構から出土した小型壺以外、今のところ該当する器形が見当たらない。大原遺跡の祭祀遺構からは、土師器各種と一緒に手捏くね土器と滑石製模造品がたくさん出土しており、古墳時代中期後半の遺跡の特徴をよく示している。金沢出土の２つの土器は、破砕された後に火を受けたようで、黒く煤けた部分の接合面が一致しない。また、小型壺の器形が稀なことからも祭祀に係わるものの可能性もあると推測される。

次に、土師器瓶を出土している遺跡についてだが、中道町出土を含め５遺跡を数える。御坂町二之宮遺跡では、1980から1982年にかけて調査され中期後半の住居跡が12軒検出され、その内の西71号住居跡から完形品と口縁部の破片が確認されている。この住居跡では須恵器瓶も出土しており、県内では唯一の須恵器瓶と土師器瓶が共伴する資料である。また、グリッドからも完形に近いものがある。御坂町姥塚遺跡では、1981から1983年に調査がおこなわれ、古墳時代中期後半に属する２件の住居跡が検出されている。瓶は古墳時代前期後半から中頃に主体をもつ５号溝から出土している。この他、古墳からの瓶出土例としては中道町天神山古墳[5]と一宮町都塚古墳[6]がある。天神山古墳は、県内の古墳の中で数少ない未調査の前方後円墳であるが、『中道町史』によれば、前方部近くのくびれ部葺石中から土師器瓶が出土したこととなっている。一宮町都塚は金原古墳群の１つで現在は確認できない。

4　考　察

1984年以来、古墳時代中期以降の土師器は、資料が増加しつつも手つかずのまま現在に至っている。今回、偶然にも中期後半という県内でも最も資料の少ない時期の土器を託され、少しでも、こ



第3図　古墳時代中期瑤編年図

れからの研究の足掛かりとなるよう編年を試みようと思う。今回は、古墳時代中期後半を中心に、陶邑編年[7]のＴＫ73からＴＫ47の５型式に相当する甕に限り編年組みを行った。

本県で最も古いといわれる須恵器は、現在のところ、中道町東山南（Ｂ）遺跡[8]が当てられている。同遺跡では２基の古墳が調査され、１号墳出土からは把手付き椀が、２号墳では樽型甕が出土している。これらは、共にＴＫ216に相当し、さらには、１号墳が２号墳より古く位置づけられている。県内で須恵器甕が出現するのは、ＴＫ216からで、以後、継続して出土している。

ＴＫ216では、東山南（Ｂ）遺跡２号墳（第３図　１）と、宮の下遺跡[9]（第３図　２）、伊勢町遺跡[10]（第３図　３）が相当する。東山南（Ｂ）遺跡２号墳と宮の下遺跡は樽型甕を出土している。樽型甕は、古式須恵器としてＴＫ23頃まで製作されているようで、古いほど両端と胴部の径に差がなくなるが、両遺跡出土の樽型甕は、中央部が膨れた形状を呈しているため、この段階でも比較的新しく次の段階にかかるかもしれない。この他、現在整理中であるが、中道町朝日無名墳[11]からも樽型甕が出土している。県内で、樽型甕はこの３点のみで、すべてＴＫ216からＴＫ208に位置づけられている。宮の下遺跡出土のものは、耕作中の発見であるが、ほか２遺跡は古墳の周溝から破砕されて出土している。須恵器の甕と同様に墓前祭祀に使用されたものであろうか。伊勢町遺跡の甕は、頸部から口縁部を欠いているが、この時期に相当するものであろう。

ＴＫ208 では、二之宮遺跡西46号（第３図　６）・西71号住居跡（第３図　４）、宇山平遺跡[12]（第３図　５）の須恵器甕が、二之宮遺跡西71号住居跡（第３図　７）・中道町出土（第３図　８）の土師器甕が相当する。この段階の特徴として、前段階まで細かった口頸基部が太くなる傾向をしめすようになる。ここで、ＴＫ208に組み込んだ須恵器甕の３点は、二之宮遺跡出土のものが古く、宇山平遺跡のものがやや下るとおもわれる。後者は前者に比べ、口頸基部が太く、明瞭な段をもたないにしても、口縁部径が体部最大径と同じ位にひろがる。したがって、二之宮遺跡がＴＫ216に近い位置まで遡り、宇山平遺跡のものがそれに続くとおもわれる。金沢出土の土師器甕は、細い口頸基部をもち体部高と口頸基部から口縁部の高さが２：１の割合である。このことは、二之宮遺跡のものにも見られる特徴で須恵器をよく模倣しているとおもわれる。

ＴＫ23では、柳坪遺跡Ａ地点[13]９号住居出土の須恵器甕（第３図　９）と、姥塚遺跡５号溝・天神山古墳・二之宮遺跡遺構外の土師器甕３点が相当する。この段階では、口頸基部が太く、口縁部径が体部最大径と等しいか、それに近くなる傾向を示す。柳坪遺跡Ａ地点から出土した須恵器甕は、この時期の特徴をよく呈しており、相当する土師器甕は、その特徴を誇示して作られたものとおもわれる。

ＴＫ47では、境川村馬乗山２号古墳[14]から出土した須恵器甕である。外反する口縁部が段をなして端部へつづく器形に変化はないが、やや頸部が体部に比べ長くなる。実物を観察したことがないためはっきりはしないが、都塚の土師器甕は、この段階に相当するのではないかと推定する。以上、最近発掘された遺物等を含め集成を兼ねながら編年を試みた。もともと、甕は他の日常的な器種に比べ出土量が少ない。しかも、集落跡よりも古墳から出土することのほうが多いため、古墳の調査が少ない本県においては充分な結果とはなりえなかった。しかし、古墳から出土した甕の大半が、破砕されて周溝内から検出されたことや、以外にも早い段階で、住居跡から出土するということか

ら、瓸のもつ意義や特殊性を考えさせられる結果となった。

5　おわりに

今回、須恵器模倣土器の先駆けともいえる瓸のみ、紹介をかね若干の考察を行ってみた。しかし、現段階では県内の資料を集成しただけに過ぎないため、今後、他県との資料比較・検討など、古墳時代中期後半の遺跡の検討、遺物の集成など多くの課題を残している。もともと資料が少ないうえに、明確な遺構からの出土例も少ないため不十分な点が多いが、今後の須恵器模倣土器を資料化する上で参考になればとおもう次第である。執筆にあたり、以下の方々にご指導・ご教示を頂いた。末筆ではあるが記して感謝する次第である。帝京大学文化財研究所　平野　修、豊富村教育委員会　岡野秀典、中道町教育委員会　林部　光、明野村教育委員会　佐野　隆、一宮町教育委員会　瀬田正明、甲西町教育委員会　広瀬和弘、山梨県立考古博物館　出月洋文、山梨県埋蔵文化財センター　末木　健・坂本美夫・長沢宏昌・森原明廣（敬称略・順不同）

註

1）末木　健・坂本美夫　1986　「山梨県」『古墳時代土器研究』　古墳時代土器研究会

2）坂本美夫　1987　山梨県埋蔵文化財センター調査報告第23集『二之宮遺跡』　山梨県教育委員会

3）末木　健　1987　山梨県埋蔵文化財センター調査報告第24集『姥塚遺跡　姥塚無名墳』　山梨県教育委員会

4）猪股喜彦・宮沢公雄・平野　修・櫛原功一　1990　『大原遺跡発掘調査概報』　一宮町教育委員会

5）中道町　1975　『中道町史』

6）一宮町　1967　『一宮町誌』

7）田辺昭三　1979　『須恵器大成』　角川書店

8）末木　健　1991　山梨県埋蔵文化財センター調査報告第64集『東山南（Ｂ）遺跡』　山梨県教育委員会

9）岡野秀典　1993　「豊富村出土の樽型瓸」『山梨県考古学協会誌』第６号　山梨県考古学協会

10）甲府市　1989　「第１章　第４節　伊勢町遺跡」『甲府市史』

11）朝日無名墳は円墳で、２段構築の葺石をもっている。現在整理作業中にもかかわらず、担当者の温かい配慮により、紙面にのみ記載させていただいた。

12）岡野秀典　1993　豊富村埋蔵文化財調査報告第１集『高部宇山平遺跡』　豊富村教育委員会
なお、今回編年図に載せた実測図は、整理期間中にも係わらず、担当者の温かい配慮によって拝借した。

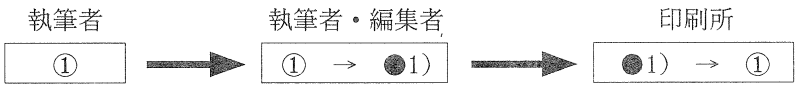
13）末木　健　1975　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－北巨摩郡長坂・明野・韮崎地内－』　山梨県教育委員会

14）坂本美夫・米田明訓　1985　山梨県埋蔵文化財センター調査報告第５集　『八乙女塚古墳（馬乗山１号・２号墳）・口開遺跡』　山梨県教育委員会

編集後記 —— フロッピー入稿の試み ——

「ワープロだって文房具じゃないか。どうして原稿用紙と鉛筆のようにできないんだ！」めんどうは充分承知の上ではじめた作業ではあったが、思わず叫んでしまった。というのは、各執筆者が各自のワープロなどで打った原稿をMS-DOSファイルに変換し、パソコンにて一枚のフロッピーに編集する作業を進めていたときに、予想以上の厄介なことに突き当たったためである。漢字やカナは障害なく転送されるのに、実は転送が出来ない文字や記号がかなり存在するのである。次の「入稿変換表」に示したようなふだん使われる文字が、JISのコード表には存在しないのである。それで各メーカーなどが、各社バラバラに勝手に決めているのである。一社のワープロだけを使用しているときには問題はないが、ひとたび他社のワープロとまたがって使いはじめると、こうした文字は今まで見たこともないような記号になったり、まったく無視されてしまうのである。

今回はこうした状況に対処し、文字入力と校正をできるだけ効率良く進め、ごくごく少ない印刷費用にて寄せられた4本の原稿を世に送りだすため、印刷を依頼した峡南堂の金丸さんらと相談をしながら次のような「入稿変換表」を作成した。編集の流れは次のようである。原稿中の変換不能な「①」を、編集にて変換可能な「●1)」に置き換える、そして印刷所の電子製版機にて「●1)」を「①」に戻すのである。最近ではワープロ専用機でも、文中に散在する任意の文字を任意の文字に機械的に差し替える『検索』『置換』などという機能があるため、こうした約束さえ決めれば処理自体は数秒で可能な簡単なものである。



こうした処理をすることを前提として、JISの非漢字一覧表にあるもの、目立つもの、通常使われないという条件で代用する文字を決めた。また、こうしたフロッピー入稿する際の問題点も出てきた。印刷の仕上がりとフロッピー入稿の文字数が違うために厳密なレイアウトをする場合に若干の誤差が生じることである。

今回はフロッピー原稿・図版・レイアウトなどすべて一括して入稿したため、初校にて図版が貼り込まれた通常の『三校』程度の状態にて校正を進めることが出来た。つまり、若干の問題はあってもフロッピーによる入稿は、作業全体としては速く、ふつうタイプミスも無く非常に効率が良いことは確かである。以下に編集に際して気付いた点を記したので、今後の参考にしていただければ幸いである。(眞)

フロッピー入稿するときの留意点

- 入稿専用文書を作成する。レイアウトを練るときは別文書を作成する。
- 入稿専用文書では、註の各項目の2行目頭の見出し部分などのスペースは入れない。
- 次の「入稿変換表」を参考にして、入稿専用文書では「入稿記号」に変換する。

入稿変換表

	原稿・印刷 ⟷ 入稿記号		
ローマ数字	Ⅰ	⟷	■Ⅰ　半角アルファベット
	Ⅱ	⟷	■Ⅱ
	Ⅲ	⟷	■Ⅲ
	Ⅳ	⟷	■Ⅳ
	Ⅴ	⟷	■Ⅴ
	Ⅵ	⟷	■Ⅵ
	Ⅶ	⟷	■Ⅶ
	Ⅷ	⟷	■Ⅷ
	Ⅸ	⟷	■Ⅸ
	Ⅹ	⟷	■Ⅹ
度量衡	kg	⟷	◆kg　半角
	cm^{-1}	⟷	◆cm^{-1}
	km	⟷	◆km

	原稿・印刷 ⟷ 入稿記号		
丸付き数字	①	⟷	●1）半角数字と半角括弧
	②	⟷	●2）
	③	⟷	●3）
	⋮	⟷	⋮
文中の註番号	1）	⟷	▲1）
	2）	⟷	▲2）
	3）	⟷	▲3）
	⋮	⟷	⋮
その他	瑤	⟷	〓
	？	⟷	＊ギリシャ文字
	？	⟷	＊ロシア文字

1994年３月31日　発行

研究紀要　10

編集・発行　山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター
印　　刷　㈱峡南堂印刷所

BULLETIN OF YAMANASHI PREFECTURAL MUSEUM OF ARCHAEOLOGY & ARCHAEOLOGICAL CENTER OF YAMANASHI PREFECTURE

Number 10

CONTENTS

March 1994

Middle Jomon Pit-Burials and Reburied Pot-coffin Burials in the Kofu Basin District : Cases from *I dojiri Phase III* through *Sori Phase I*
—by Hiromasa NAGASAWA

The Source of Archaeological Amber from Kabutuppara Site in Ooizumi Yamanashi Prefectuer —By Infrared Spectra
—by Shingo GOMI
Yukikazu NOSHIRO

Potteries from Kinsei Site. (Latest Jomon Period)
—by Takeshi NIITSU

Haso (𤭢) of Hajiki from Kanezawa in Nakamichi Town, Yamanashi Prefecture
—by Miyuki TAKAHASHI